

二思潮の對立

ゆる戦記物等にその特色を發揮したり。
 夫れ中世の文藝には新舊思潮相對立す、見よ、一方に雅樂あるに對して他方に平家琵琶、田樂、猿樂等起り、和歌に對して連歌俳諧の一新體を生ず、彼は平安朝以來の貴族文藝を代表し、此は中流武家僧侶等の有なり。さばれこれらの二潮流は必ずしも確然たる墻壁を築いて相隔て相對抗せるにはあらずして、時に同一作者同一書中にも共存するを見る、然り、この現象は苟くも中世の戦記、隨筆、謠曲等を繙くものの容易に觀取する所なるべし。要するに中世は平安朝の舊風漸く衰へて江戸時代の新風の勢を得るに至れる過渡の時代にして、その消長の跡はまた最も文學に著しきなり。
 翻つて、余輩は曩に新舊二時代の修養上の特色を比較し、その學ぶところ一は和歌有職にして、一は兵術武器なるに言及したり。今これを補説して、所謂新風潮の如何なるかを見んか。新風潮に顯著なるは、一、尙武の氣象の勃興せること、二、儒佛二教の感化が社會人心の根柢に及べること、の二現象なり。いふまでもなく儒佛二教がわが思想界に認められしは上古以來のことにして、尙武の氣

新思潮の特色

象も建國このかた既に存在したるものなりと雖も、その鬱然一代の風をなし、社會百般のこと一にこれを標準として決せらるゝに至りしは、すなはち中世に入りて後のことにして、平安朝の感情偏重主義に覆はれて、一時人心の奥底に蟄伏せざるを得ざりし倫理的はた宗教的觀念は、一朝時代の變革に遇ひて俄然として迸發の機を得たりしなり、境遇人を化すとはこれらの謂なるべし。

尙武の氣象

尙武の氣象！あゝ、こは國初以來終始一貫せるわが國民性の一顯現にして、最近露國が企てし東侵の野心を挫きしはいふも更なり、往古神功皇后が三韓を征したまひしが如き例、枚擧するに遑あらず、額に立つとも背に矢は立てじとは早く國民の腦裡に刻まれたる信念にして、比較的情弱といはるゝ平安朝にありてだに、地方にありては尙ほ能くこの氣象を存して、これを獎勵琢磨し源平兩氏の武士が入つて京都に勢力を得ると共に、國を擧げて一代の風をなす。「さ候へば君は實盛を大矢とおぼし召され候にこそ、僅か十三束をこそ仕り候へ、實盛ほど射候ふ者は、八箇國にはいくらも候ふ。大矢と申す定の者の十五束

に劣りて引くは候はず、弓の強さもしたゝかなる者の五六人して張り候ふ。かやうの精兵どもが射候へば、鎧の二三領は容易うかけず射透し候ふ。大名と申す定の者の五百騎に劣りて持つは候はず、馬に乗りて落つる道知らず、悪所をはずれど馬を倒さず、軍はまた親も討たれよ、死にぬれば乗り越え、戦ひ候ふ」といへるは、これなん當時最も勇武の氣象に富めりし坂東武士の特色を口づから評せる齋藤別當實盛が言にして、説き去り説き來りて痛快極なし。而してこの進むを知りて退くを知らざる尚武の氣風と相伴ひて、自己の仕ふる主のために一身を鴻毛の輕きに比する忠義心の如きは、要するに自己の誠意誠心を傾け盡すところの一種の犠牲的精神にして、建國以來國民の心裡に存すれども、特殊なる名稱は存せず、またそは一般國民が皇室に對するやみがたき性情にして、特別なる階級に限られたるものにてなかりしが、此時代に入りて武士がその主に對する道義的觀念として凝結し、これに儒教の名義を附し、佛教の教理をも附加するに至りて、遂に一箇の道德律即ち武士道なるものを生ずるに至れるなり。勿論、武士道が確然たる諸形式を定めて以て武士に強

朱子學の傳來

ふるに至りしは、遙かに下りて江戸時代のことには屬すと雖も、兎も角も中世にありて漸くその發達を致せるは事實なり。而して江戸時代に於ける所謂武士道が、古來の尚武的事蹟を綜合し、更に之を理想化して成れるものなるを思はば、中世に於ける尚武の氣象が如何にその發達に資する所多かりしかは言ふを須ひず。

儒教の行はるゝやまた久しいかな。然れどもそのわが國文學に及ぼせる影響は常に佛教の勢力あるに及ばず、漢文學全盛の時もなほ一步を彼に譲り、中世に及びてもこの形勢は依然として舊の如くなりしが、またさすがに新興の佛教と相待ち相扶けて、當時の人心を感化せるもの尠少なからざるものありし如し。中に就きて最も勢力ありし學派を朱學とし、その説くところ頗る禪學と相似たり。朱子學の始めて傳はれるは何時の頃なりけん、或は順德帝の朝俊苜これを傳ふといひ、或は金澤文庫にその創立者實時の子越後守顯時が奥書せる小學あれば、恐らくは既に鎌倉時代に傳はれるならんといひ、また一説には建武の頃玄慧の輸入するところともいひ、その他異説は多く、其間に多少年歴

神道

の出入なきにあらずといへども、恐らく禪宗と相前後して傳へられ、建武中興の頃や、著はれ、室町時代の末期に至りて大に行はれしものなるは疑を容れず。かくてその弘通と共に文學も漸くその影響を受くること多く、一般國民の思想もこれが感化を蒙ること甚大なるものありしなり。然かもこの一事あるが爲にわが國近世道德の淵源を支那にありとせんは當らず。由來、われは東海君子の國、倫道の基礎國體と共に定まる、實たる名を借れるを以て直ちにその實をも得來れりとするは、一を知りて二を知らざるものといはざるべけんや。敬神祭祀てふ行事の發達して、神道の樹立を見たるもこの時代にあり。明らかに言へば、この神道も儒教と同じく佛教の勢力に隨伴して起れる新現象にして、その教義の大部分も佛教にとり、なほ混和するに儒教及び陰陽道の二説を以てせるものなり。名けて道とはいへど、特種の深邃なる思想あるにあらずるなり。

新佛教の傳播

ねしが、平安朝の末より鎌倉時代の初にかけて、禪宗支那より傳はり、種々の念佛宗及び日蓮宗の新たにわが國に起るありて、折ふし戦禍多き社會の信仰を促し、明日をも知らぬ人々の要求に應じて、平安朝の萎靡に對する反動の氣勢は漸く揚れり。されどこれは新興佛教のみのことにして、舊佛教は與らず。天台眞言二宗の如きも徒らに袖手傍觀して、またこれらと中原に角逐する能はざりしなり。この時代のこれら新佛教が平安佛教の専ら現世的、形式的なりしに反して、最も熾烈なる宗教的要求の對象として起りしは注目すべき現象にして、その發達はまた新たに擡頭せる武家の勢力と相隨逐せり。故に禪宗まづ鎌倉に榮え、日蓮宗これにつぎて關東に信者多く、念佛宗は最も後れて一般國民の間に流布したり。さるが中に禪宗はその教理以外、支那の文化をも伴ひ來り、新奇を喜べる當時の風潮に乗じて、速かに傳播し、學藝風俗にも影響するところ多かりき。茶道の起りたるといひ、東山水墨畫の一代に重んぜられしといひ、みな禪宗を傳へたる僧侶等の輸入せるものにして、その他衣食住のことなど、この時に面目を改めたるもの極めて多し。

文學の服従

斯くては文學も同じ風潮に棹さざるを得ず。しかも當時上下干戈を弄するに急にして、一般人士は學問の道に疎く、文筆を執るに暇なければ、操觚の業は自ら閑寂なる境涯に住する禪宗其他の僧侶の手に委ねられたり。當代の文藝が宗教的臭味を帯ぶること甚しきはこれが爲にして、偶、佛教家ならぬ人々の述作にかゝるものありとするも、社會人心の傾向にして既に前述の如くなれば、これもまた宗教的厭世的色彩を帯びざるを得ざりしなり。佛教趣味の普及や善し、中世文學の特色は、正にこれありて致すところなるべしといへども、一步を過てば大澤に陥つとかや、佛教の趣味を加味して止むべかりしこの時代の文學は、その境界線を越えて佛教の教理を宣傳するの具となり了せり。即ちよりて以て甚深の意を加ふべき佛教の爲に、却つてその特立の位地を失ひ、佛教の傀儡となりて、却つて文學としては淺薄の誹を免るゝ能はざるに至れり。例を舉げて言はんか、當時に在りては、和歌を學ぶもこれまた佛道の奥旨に達せんが爲の方便にして、わが國小説の王たる源氏物語の如きも佛教中毒者の眼より見れば、天台止觀の意を祖述せる世にありがたき法の手引を以て目せら

男尊女卑の風

るゝに至れり。

尙武の氣象盛になりて、やうやく武士道を構成し、また儒佛二教の影響深く人心の奥底に徹するに及びて、女性に對する社會の觀念は平安朝と全く異なるものあるに至れり。三從七去の説は早く儒教の來ると共に唱へられしところにして、平安朝にありては女性の勢力の侮るべからざるものありし爲に、その實際には行はるゝを見ざりしが、こゝに及びて犯すべからざる女性壓迫の憲法となれり。儒教は女子と小人とは養ひ難きものとなし、佛教は女人は生れながら罪業深重にして三世の諸佛に棄てられたりとなす外、直接に女子の身にとりて更に悲しきことは、自ら戰場に馳驅してものの役に立たざることなり。これらの思想や事實は相依り相援けて女性卑下の思想を養ひ、平安朝にありては一面には女尊男卑の傾さへありしに、こゝに至りて舊習一變、男子は上にありて昂然自ら居り、女子は唯々としてこれ命これ從ふに至る。かくてこの濟度すべからざる女性に對して愛着を感ずる如きは、男子の面目上拭ふべからざる耻辱にして、方めてこれと關係を絶たんとすれば、文學にも從來さしものに

中世の概観

重きをなせる男女相思の情も漸く影を潜め、却つて君臣の情、父子の愛などいへる道徳、これに代りて旨と描かるゝに至れり。

要するに中世は、一面に於てはなほ幾分因襲摸倣、平安朝の様によつて胡蘆を描くの風を存すると共に、一面にはその舊慣を打破し、以て革命的改新を成就せんとせる時代にして、文學にありても從來の平和優柔なる戀愛描寫を一掃して、殺伐剛毅の氣象を鼓吹するに至り、或は克己制慾を主とする儒教の觀念を明かし、或は無常厭世の佛教的教理を説き、未だ破壊に伴ふ建設の大に見るに足るものなしと雖も、とにかくに一種清新の風を生じたるは多とすべし。しかもこれに伴うて形式上平安朝に於て漸次階を追ひて進める典雅絢麗の雅文體が俄然として崩壊し、破格破調に充てる粗笨の文章ならざるはなきに至れるは、また一代の奇觀なり。たゞ儒佛二教の盛行に伴ひて、漢語、佛語の用ひらるゝもの漸く數を加へ、形容辭の豊富、句法の變化を致すと共に、剛壯雄健の度を加へたるは特記すべき長所といふべく、王朝の雅文の近世の和漢混淆文に轉するに至りし徑路は、歴然としてわが中世亂雜の文體中に見ゆ。

時代の區劃

- 例によりて圓數によりて中世を左の四時代に分つ。
- 一、新古今時代 (二八五〇—一八九〇) 四十年間
 - 二、鎌倉時代 (一一八九〇—一九九〇) 百年間
 - 三、南北朝時代 (一九九〇—二〇六〇) 七十年間
 - 四、室町時代 (二〇六〇—二二六〇) 二百年間
- (戰國及び織田豊臣時代をも含む)

第二章 新古今時代

所謂新古今時代

鎌倉幕府開けて後四十年の間を新古今時代と名づく、新古今和歌集の成りし元久元年は正にその中ごろにして、新勅撰和歌集撰述のことありし貞永元年はその末葉に當れり。

和歌の盛運

中世時代にありては小説は振はず、漢詩文も衰へたり、到る處秋風落莫の感なき能はざる裡に、ひとり丹楓の霜に誇れる如き概あるを和歌の道とす。實に此

時代區劃の難

時代の和歌はかゝる文學凋落時代の産物としてめざましきのみならず、花の如き古今時代に比しても殆ど遜色なからんとす。然り、新古今時代は曩の古今時代と共にわが歌壇の二大盛時として記憶すべし。

翻つて思ふに、院政時代の世相はこの時代に入るも未だ何等の著しき變革を被らず、一般文藝の傾向はた舊様依然として前時代を襲ふのみ、斯くても之を前代と區分して新時代を劃すべきか、疑問なき能はず。余輩の見によれば、政治史上の時代區劃を以て直ちに文藝史上に應用せんとするは、無意義のことにして、中世に就ていへば、その政治史上の區分だに甚だ曖昧にして、普通に所謂武家時代の初は果して何れに置くべきか、極めて漠然たるなり。或は頼朝が鎌倉に居を占めたる時か、或は平氏が安徳天皇を奉じて西海に沈める時か、或は頼朝が總追捕使もしくは征夷大將軍に任せられたる時か、これ既に疑問とすべきに、更に派れば、武家執政の備を作せるものにははやく清盛あるに想到せずんばならず。即ち單に武家政治てふ新事實を以て中世を劃すべしとせば、清盛が太政大臣となりし仁安若しくはその全盛時代なる治承の交を以て之に

幕威確立の期

擬するもまた可ならずや。もしそれ政權全く關東に歸して幕府の威令天下に布き、その勢力牢乎として抜くべからざるに至りし時を選ばんか、そは遙かに下りて承久の亂の後にあらん。

鎌倉幕府の建設は元暦文治の間にあり、頼朝が方寸には當時早く確乎たる信念を抱懐したりしなるべしといへども、時人は見て以てこれを清盛が權花一朝の榮に比し、未だこれに多大の信服を捧ぐる能はずして、何時かその覆滅の日あるべきを想へり。朝廷また常に政權回復の念を斷たざれば、京都派の人士は機會だにあらば討幕の大軍を起さんものと冀へり。この民心沸騰せる戰亂時代の代表はいふまでもなく、後鳥羽上皇にましまし、承久の亂はやがてその抑へ難き叡慮の發露なり。されど悲しいかな大勢既に定まりて、王師勝たず、驟雨一過して新政府の地盤は却つて堅くなれり。王政復古の希望と武家政治遂行の決意との軋轢も最早これまでにして、京師は一敗の後また起つべからずなりぬ。これを國民一般の思想上よりいへば、源平時代以後さしにも動搖せる天下の人心こゝに鎮靜すると共に、また著しく國民の活氣を失ふ。さらば嚴格

時代分割の
不精確

なる意義に於ける鎌倉時代は、承久の亂の終ると共にその第一頁を開くといふも不可なるを見ざるべし。

既に政治歴史の上より見るも、鎌倉幕府の創立を以てその時代を分ちがたしとせば、政治史と歩調を同じくせざる文學史上の時代區劃の目標となさんば、更に當を失せるや論なし。平安朝の末に源俊賴出でて和歌の革新を標榜し、その麾下に屬するもの甚だ多く、これより保守を倡道するもの、清新の風を喜ぶものは、た折衷を主張するもの等ありて、議論紛々として決せず、ういで藤原俊成出でて、快刀亂麻を斷たんとしたれども、容易にその目的を達する能はず、奮闘惡戰の狀正に政治上に源平二氏が兵馬の權を争へると好一對の觀をなす。源平の争亂は鎌倉開府と共にその局を結びたれど、歌壇はその後も暫くこの趨勢を持續し、俊成の子定家がひとり覇權を弄するに至りしは、新勅撰集撰進の後にして、歌壇統一の結果はこの集に於て始めて現はれ來る。これまでには紛亂の時代にして、その情勢は敢て平安末期と撰ぶところなし。定家は歌界の頼朝なれども、その功を畢へたるは彼に後るゝこと四十乃至五十年なり。故に文

新古今集の
性質

學上の一般の形勢より見る時は、院政時代と新古今時代とは殆どその間にけぢめを分ちがたく、從つてこれを平安朝の最後に附して、王朝文學の殘光を放つて見るのと見るべきか、または鎌倉時代の初に置きて、武家時代の文學の既にこの時に萌芽をあらはしたるものと見るべきか、二者孰れかその一を選ばず、文學史として確かに在來の區劃よりも一進歩を示すに足るべしといへども、かくては或は讀者が混亂を感せんことを恐れて、こゝには暫く従前の方法に甘んじ、むしろ分ちがたき時代を鎌倉幕府創立に分ちて、新古今時代なる一小期を設く。

さて新古今集の特色は、前の千載集と比べて甚しく異なりたるものを見ず、すなはちその歌風は千載集の志を紹いで、更に一步を進めたるものと見て不可なからん。是より先き金葉、詞花の兩集に種々の歌風亂れ起りて、或は清新を求め、或は奇拔を狙ひて、ひたすら古きをすて、新しきを逐へる結果は、亂雜となり粗笨となり、一害を去りて一害を招きしかば、千載集出でてこれに掣肘を加へしを、新古今は更にその束縛を固くしたるなり。然り、束縛は固くなれり、され

敍景の詠

ど無標準なる唐政者の筆法にはあらず、好き所は飽くまで存して、たゞ好からずと思はるゝ節のみ抑へられたり。されば新古今集はその意圖と結果とに於て古今集に髣髴するところ多く、古今は新古今を得て屈竟の後繼者を見出し、新古今はまた名詮自稱、よく古今撰述の意を體して、永く歌壇に標範を垂れしものといふべし。

平安末期以來の和歌の特色の一は敍景詩の多くなれることなり。これを新古今集の例に見るに、

かすみたつ末の松山ほのくくと波にはなるゝ横雲の空。 家 隆

旅人の袖吹きかへす秋風に、夕日さびしき山のかけ橋。 定 家

古畑のそばのたつ木にゐる鳩のともよぶ聲のすぎき夕暮。 西 行

などの歌に「さびしき」「凄き」などいひて、中には多少作者の主觀的感情を交ふるものなきにあらざれども、概するに詠物敍景の風の著しくなり來れるは争ふべからず。かくて主觀的抒情のみを主とせる古今の舊風に、客觀的敍景の新潮を加味し、以て客主交錯、景情一致の趣を得んとつとめたるところ、正に新古今

の最大特色なるべし。

忘らるゝ身を知る袖のむらさめに、つれなく山の月はいでけり。

後鳥羽上皇

定 家

格調句法の變

春の夜の夢のうき橋とだえして、峯に別るゝ横雲の空。 定 家
歌詞歌調に就て見るも、繊細巧緻なるもの、豊豔華麗なるもの等もこれあれども、これと共に思想の雄大、用語の洗鍊を併せ得て、その姿の極めて莊重謹嚴の趣あるもの、すなはち所謂丈高き歌の現はるゝに至りしも看過すべからざる一特色なり。

ほのくくと春こそ空にきにけらし、天の香具山霞たなびく。 後鳥羽上皇

とよませたまへる歌の如き、必ずしも新奇を衒はず、悠揚として迫らざるところにいふべからざる妙味あり。

修辭の進歩

思ふに修辭の進歩も、また新古今集に至りては、その極に達せり、既に古今集といへども、一はこの點に於て名聲を博したるなるが、未だ理想を去ること遠かりしに、新古今に至りて曾て見ざりし句法の變化を示す。蓋し修辭の發達せ

歌人輩出

るは漸次複雑となり來れる思想の、在來の語句を以てしては盛り難きに至れる自然の結果にして、また一つには歌合の流行のこれを刺戟せるが爲に外ならず、今その特色の二三を擧ぐれば、名辭及び終止の辭を多く用ふること、助動詞、天爾、袁波をなるべく省くこと等なり。終止の辭を多く用ふることに關しては、本居宣長はこれを以て新古今の一大弊所なりとして深く警め、石原正明はこれこそ新古今が古今を凌駕せる新生命にして、その格調の高き所以のもの、一にこれあるが爲なりと斷じ、その他甲論乙駁、説をなすもの少からず。思ふに思想は複雑になりても和歌は何時までも三十一文字に限られたり、その語句を簡潔にし、従うて終止の辭を多く使用するに至りしも、必然の勢ならずや。新古今集が誇とする所以の一は、俊秀なる歌人に富むことは是なり。古今集成りて後、歌壇は久しくその風尚の跳梁に委せ、後進の輩これを摸倣して、その法則に違はんことを恐れしが、金葉、詞花の出でし頃より形勢漸く改まり、革新の聲高きに至れりと雖も、この二集といひ、千載といひ、いまだ新古今時代の如く名人の輩出は見ざりき。然るに新古今時代にはまづ後鳥羽上皇あり、天資英邁、そ

名家の概評

の才多方面にして、政治に勵精すると共に文藝美術を嗜み、特に和歌の爲には、和歌所を再興して、斯道の發達に力め、固よりみづからこれに秀でたまへり。土御門順徳の二帝また和歌の上には、拔群の伎倆ありて、父皇と並べ稱せられたまふ。後京極攝政良經は身權要の地位にありて、歌壇の重鎮たり、その叔父にして天台座主たりし僧正慈圓また盛名あり、藤原家隆、同定家が當代の二星と仰がれしは今更にいはすもがな、その他男子に俊慧、寂蓮、長明、秀能等、婦人に式子内親王、宮内卿の如きあり、みな當時錚々たる歌人にして、各自その特色を有して相下らず、余が霜葉二月の花よりも紅なるの概ありといへるはこの謂なり。後鳥羽上皇の作には沈痛悲壯なるもの多し、而して言々句々おのづから君王の氣を帶ぶ。共に他の作家輩の企及を許さざるところなり。奥山のおどろが下もふもわけて、道ある世ぞと人に知らせん。人もをし、人も恨めし、あぢきなく世を思ふゆゑに物思ふ身は。われこそは新島守よ、沖の海のあらし浪風心して吹け。良經は天稟の才、その迷悟の境に浮沈して煩悶に堪へざるところ、讀者をして

同情の念禁する能はざらしめ、彼景の詠にもすぐれたるもの多し。惜しいかな、中年にして人に殺され、その詩才未だ十分の發達を見ざりきといへども、清新の歌風は優に推して以て同時代の作家を代表せしむるに足る。慈圓論して慈鎮といふ、西行を庶幾して、無常厭世の佛教的思想を詠じ、歌數の多きことは遙かに西行の上により。されど歌品の高下を以て論ずれば、此は到底彼の敵にあらず、措辭概ね粗笨にして、趣味油然たるものを求むるに難し、或はこれ濫作の弊か、要するにその實は遠くその名に及ばざるを惜む。藤原家隆もまた多吟を以て名あるものなり、生涯詠するところ六萬首に及ぶと稱せらる。その特色は敢て新なるにあらず、奇なるにあらず、極めて平易穩健なる思想言語のうちに捨てがたき趣あるを取る。結構の上よりいふも、全體に重きを置きて、字句の工夫は寧ろ凝らさざりしに似たり。家隆歌人として深く後鳥羽上皇の眷顧を蒙り、また定家に推重せられて、時人の師表と仰がる。しかも多作の弊に陥りて、時に詩興を缺けるもの少からざるは渠の爲に取らず。

藤原定家

藤原定家は最も辭句の修飾に重きを置ける歌人なり、西行が不用意に率直に

素懷を吐露せると全く相反す、實に彼と此とはこの時代の作風の二極端を示すものといふべし。定家謂へらく、情は新しきを先とし、言葉は古きを用ふべしと、すなはち三代集以後の言葉は用ふべからずとし、父の俊成にも過ぎて尙古の風を唱へ、尤も用語句法の彫琢に重きを置きて、以て亂雜粗笨の時弊を矯めんと力めたり。然れども時代の進むに伴ひて思想複雑になれば、三代集時代にありては不便を感せざりし言語も、勢、その用を辨するに足らず、斯くて限ある古語によりて限なき思想を現はさんとすれば、措辭の工夫が緊要手段となるは當然のことにして、定家の歌はこの技巧上の苦心の爲に往々直截簡明を缺き、再讀三讀、歌意の那邊にあるかを疑はしむるものあるに至る。晩年、新勅撰集を撰する頃に及びては、漸くこの弊を覺り、幾分平易の調に就きたれども、とにかくに定家の歌の難解なるは定家の崇拜者もこれを認むるに吝かならず、而して余輩の見によれば、この弊は特にその戀歌において甚しきものあるに、定家の流を汲むもの、却つて戀歌をしも定家獨得の妙所と心得るは、恐らくその真意の漠然として捕へ難きを以て、感情の深刻痛切なるが爲と過信したるも

のにあらざるなきか。見よ、
年も経ぬ、いのる契は初瀬山、尾上の鐘のよその夕ぐれ。
といへるが如き、殊更に多くの名詞をよみ込みたりといふまでにて、何の意な
るかを知らざらしむ。

門閥の樹立

新古今の成れる時、名家は綺羅星の如く列なれり、されどそれより時移ること、
いまだ三十年ならずして、形勢は漸く一變す。良經はやく薨じて、諸家またこれ
につぐもの多し。三上皇は承久の亂後邊陲の離れ島に遷御ましまし、後鳥羽上
皇に昵近して最も信任を得たりし家隆またこの役以來、人の見ることに漸く篤
からず。こゝに定家は歌壇唯一の老将として、輿望を負うて立ち、みづからまた
兀々として倦まず、老年に及びて終に歌道の門閥を樹立するに至りぬ。

定家が收權
の手段

當時、時人の歌人を評するや、その標準とするところ、作歌の絶対價值よりも俗
界に對する作家の地位に拘はること多し、世間に於ける俗人としての地位の
高下は、直ちに歌界に於ける作家としての聲譽に影響す。されば家隆は後鳥羽
院に昵近して、盛名頻に傳へたるも、院の遷幸と共に勢力挫け、定家はこれに反

今
西園寺
公經の相

して關東に阿附せるが爲に、家隆に代りて權威を恣にす。定家が秋波を幕府に
送りしは著しき事實にして、その新勅撰集を撰ぶや、何れの點より見るもその
價值少き實朝の作は二十餘首の多きを收めたるに、いとも堪能なる三上皇の
詠は、その一首をだに探らざりしは不公平も甚し。選者のこの一舉は果して世
上の物議を招き、定家の妹なる越部禪尼さへ、その後數年、定家の嫡子爲家に書
を送りて、この撰が家兄の手に成れるものならざりせば、手だに觸れざるべき
にといへり。當時、また別に鎌倉幕府と氣脈相通じて權威遙かに儕輩を壓した
るを、太政大臣西園寺公經とす。公經は俊成もしくは定家の門に學び、定家亦そ
の家に出入して、種々の便宜を得たりしが如し。同じく權家に出でて和歌に名
ありしもの、なほ常盤井相國と鎌倉右大臣とあり。相國實氏は公經の子、定家が
老後の作に則りて最も平穩の調を喜び、措紳家にして和歌の門閥を樹つ。右大
臣實朝は定家が秘藏の萬葉集を相傳すると共に、歌に於てはその尙古の一面
を傳へて、好んで萬葉の古風を諷詠す。かくて東西の權門勢家によりて師家と
仰がれたる定家の勢力や想ふべく、群小作家が畏敬の情を捧げたるや知るべ

二條、六條
の反目

きのみ。

是より先き平安末期に當りてまづ歌道の門閥を定めたるを六條家とす。六條家の祖は藤原顯季なり、顯季に繼げる顯輔また令名あり、三代清輔に及びて地位漸く堅し。俊成この時に出でて二條家を起し、爾來二家相反目して黨同伐異す。建久の頃、六百番歌合あり、俊成これが判者として、六條派の作家を罵り、偏頗の評一時に高くして、六條家の顯昭の如きは陳狀を作りて不平を訴ふ。これを始として正治二年、後京極家に選歌合ありて、こたびは六條家の季經その判者となるや、定家口を極めて、この撰の粗謬見るに堪へざるを誹謗せしかば、季經またこれを含んで定家を譏す。終にその年百首選歌の擧あるに際して、これに加はるを許されざりし定家が怨恨憤懣の情や想像するに餘あり、父俊成もまた奏狀を奉りて、六條家の無學を論述す。かくして漸く定家も百首作者の員に加へられ、且つその歌によりて昇殿を許されしかども、俊成父子は飽くまで敵を窮處に追はずんば止まず、顯昭が日本紀の歌を註して法橋の僧綱を乞ふに及びて、またこれに向つて矢を放つ。軋轢年あり、六條家の墨漸く傾きて、氣

定家の歌學

息奄々として振はず、知家嫡流として家名を繼ぐといへども、疾く父を失ひて、終に定家の軍門に下り、定家よくこれを指導して機會ある毎に推薦の勞を吝まず、輔翼薰陶、力めたるに庶幾し。定家の歿後、知家二條家を離れて、再び一家を稱するに至れりといへども、一時は全く二條家の眷顧に倚頼したりしなり。既に異を歌學に樹て、門閥を稱す、必ずや子孫後生に傳ふべき特色なかるべからず。六條家はやく二條家に先だちて起り、歌論にも先鞭を附けて、これに關する著書類多かりしが、二條家は定家の出づるに及びて、殊に意をこゝに注ぎ、晩年に至りて略、その計畫を實現し得たり。すなはち種々の異本を涉獵校訂して古書類の定本を定むると同時に、その註釋をも作り、これを基礎として一家の説を立つ。その日記なる明月記を見るに、類論に及びて未だ曾て衰へず、嬰鏢壯者を凌ぐの勢あり、土佐日記、伊勢物語等の短篇の如きは、一兩日の勞よく淨寫の業を了へ、その手寫に當りて誤脱の少きも、また私かに誇とするところなりしが如し。その苦心校合の餘になれる源氏物語は、青表紙とて、源光行の河内本と竝べて後人の憑據すべき定本となり、註釋としては古今集の顯註密勘

最も名高く、源氏奥入また世尊寺伊行の註を定家の増補せるものといひ、水源抄紫明抄に先んじて源氏註釋書の先驅と稱せらる。若夫歌學上の著書に至りては詠歌大概等頗る多しといへども、後人の假託に成れるも少からざるべければ、これが眞偽の鑑別は、定家を論ずるものの特に注意すべき點なりとす。

第三章 鎌倉時代

所謂鎌倉時代

これを政治上よりいへば承久の亂(一八一)以後、これを文學上よりいへば新勅撰和歌集撰述(一八九二)の時よりこのかた、鎌倉幕府の滅亡に至るまでを鎌倉時代といふ、言ふまでもなく政治の中心たる東の鎌倉と文化の中心たる西の京都とが兩々相對立せる期間なり。されど委しくいへばその劃然對立せしは北條氏執政の後にして、實朝の時まではしかく彼此固く執つて相隔つることなかりしなり。

源氏三代

實朝は風流に志を寄せて、自ら和歌を嗜み、頻に京都の文化を鎌倉に輸入せん

と企てたり。ひとり實朝一人に止まらず、源氏三代はいづれも京都を眷戀したり。今や天下の霸權その手に歸して、關東の威勢遙かに京都を壓すといへども、京都はこれ祖先の住みなれし桃源境、その地風光明媚にして、文化燦然たり。翻つて關八州を見れば、何ぞ葦蕪茫茫たるの甚しきや、故郷忘じがたきの念こゝにおいてか須臾も去らず、彼の優美なるところを取りて此に移さんと試みたるもの、蓋し自然の人情なるべし。されどこの京都に對する憧憬が、剛毅朴訥なる關東土着の武士と相容れざるべきは勿論にして、源氏の霸業成つて漸く三代、早くもその覆滅を招きて、悲慘の終を告ぐるに至りしもの、原因一にして足らざるべしと雖も、兩者その好尚を異にして、意志の疏通を見る能はざりしを以て、その主因の一に推さんとす。

北條氏の方針

源家滅びて北條氏政權を恣にするや、鎌倉幕府の施政方針は頓に緊縮を加へ、泰時以後はわけても武事を養ふにつとめて、勤儉質朴の風を獎勵すると共に、嚴に驕奢柔弱の俗を遠ざけ、以て幕府永遠の基礎を堅うせんと計る。鎌倉と京師との對立こゝにおいてか確然として成り、都人は鎌倉武士を以て蒙昧野蠻

なる東戎として卑下し、關東武士は浮華輕薄の輩として上方人を彈指すれば、兩者の間交通なきにあらざれども、古風と新興の潮流とは相接觸するの期なく、公卿は公卿、武家は武家として特立したり、鎌倉時代の特色はまた實にこゝにあり。

關東武士

げに鎌倉武士は文を解せず、寧ろ知らざるを誇りて、知らんとせず。幕府百五十年の間、さすがに關東武士の間にも國文和歌を玩ぶものなきにあらざりきといへども、その數寥寥として晨星も昏ならず。見よ、頼朝の制度を定むるや、大江三善等の明法家を京都より招きて事に従はしむ、これは草創の際なりとせんも、その後久しく幕府の文筆を掌れる右筆の供給をも京都に待たざるべからざりしに至りては何とかいはん。既に關東武士は文筆にかけては實用にだにその人を缺けり、況んや文學の創作をや。所詮鎌倉は武事一片の地なり、文學はこゝには無用の長物として顧みられざりしなり、政治上の鎌倉は刮目して見るべしと雖も、文學史上に於ける鎌倉に至りては、多く問はずして可なり。文學史上の鎌倉はその價值極めて少し、京都はこの時代に至りても依然とし

京都公卿の萎縮

て文學の中心たり、平安朝以來の文化はとにかくに常にこゝにその粹を集め、學問藝術の最高府として一代の名人を會し、これが翫賞もまたこゝに限られたるの觀あり。されど明らさまにいへば、承久の亂に公卿が一敗地に塗れてよ、京都もまた振はず、虛榮の念のみはいよゝ盛なれども、誇とすべき實質は既にかれらの有にあらす。かれらは質實なる學問や光彩ある創作にその精力を捧げんとはせずして、唯己が佛を尊くする爲に有職故實の研究に浮身を窶し、これを一身の學問、生涯の職業ともして僅かにその活計を失はざらんとするものあり。政權一たび鎌倉に移りて、一朝實務に離れたるかれらは、晝日悠々、閑は棄つるに餘りあれど、これを以て直ちに文學に向くるにもあらず、生活の漸く懦弱なると共に、文學もまた活氣を失ふ。而してかれらが偏に古を恠悦して、みづから信するの薄きや、一にその範を平安朝の盛時に求めたるの結果、補綴釘匣これ事として、摸倣の盛なること此時ばかり甚しきはなし。夫れ陰陽二氣の接觸するや、電光急ち閃き、雷車轟々の響をなす、東西兩思潮にして若し相會せんか、必ずや人目を聳動せずんば止まざるものありしならん、惜むべし

二條爲家

京都は京都たり、鎌倉は鎌倉たること上述の如く、文學もまたこの情勢の下に全くその發達を阻害せられ、萎縮凋落を極めたるなり。而してこの趨勢は歌壇に於て最も著しきを見る。

歌壇には定家の子に爲家あり、父祖と同じく長命にして、子弟に教授し、三代和歌の家學を傳へて、二條家の門閥全くこゝに確立せり。俊成の千載、定家の新勅撰に爲家の續後撰を加へて、後の二條家の門流を汲むもの、家の三代集として尊奉措かず。蓋しこれらの諸集は、その撰述、選者等が心に任せて成れるものにして、各、その好尚のある所を知るに最も便よければなり。爲家の續後撰集の成れるは建長三年なるが、これに先ちて生まれたる實治百首また二條家にありては百首の典型なりと稱せらる。爲家の重視せらるゝことそれ此の如し、されどその實一家の見地を樹てたるにあらずして、ひたすら父祖の學を傳へて及ばざらんを思ふるのみ。父祖の學を傳ふるに急なるはなほ忍ぶべし、その徒らに摸倣を事として、清新を失ひ、平板に流れたるに至りては、斷じて贊すべからず。畢竟爲家は凡才のみ、その語と調とが父祖の鞭撻によりて練磨せられたる

三家分立

もの即ちその歌にして、詩趣の横溢は遂に見がたし。その歌學として説くところ、古語を尊び、縁語を喜び、嚴に新奇の語を避けて、制ある語、主ある語などいへる名目を定めて、これを用ふべからずとなす。而してその古風を尊ぶといふも、いふところ歌ふところ、すべてこれ凡庸の調、自ら當世擬古の弊に流れて、眞の古體を傳ふるに足らざりき。

爲家歿してその後三家に分る。長子爲氏二條家を繼ぎ、次子に爲教ありて京極家これより出で、三子爲相は母を異にして生れ、冷泉家の祖となる。而して何れも門戸を構へて相下らず、爲氏と爲相との如きは、父祖傳來の所領たる播州細川の庄の所有權を争ひて、遂にその裁決を幕府に仰ぐに至れり。この争は家産の争にして、文學には直接の關係なけれども、この争の爲に鎌倉時代の紀行文の白眉たる十六夜日記を出すに至りしは注意すべし。日記は爲相の母たる阿佛尼の作にして、訴訟の爲に關東に下れる道中の見聞感想録なり。

爲相と長兄爲氏とは年齢において非常の懸隔あり、爲氏が古稀に垂んとする時、爲相はやうやく弱冠を過ぎたり。爲相父母の慈愛を一身にあつむといへど

二條、京極の軋轢

も和歌の道にかけては爲氏の敵にあらず、されば歌道の論争は鎌倉時代にあ
りては主として二條、京極の二家にかざられて、冷泉はこれに與らず。二家の反
目は爲氏の子爲世及び爲教の子爲兼の代に至りて愈はげしく、互に陥擠して、
おのれ歌壇の覇權を握らんと願ふ。時に恰も皇室にありては兩統迭立の議あ
り、大覺寺、持明院二派の軋轢絶ゆる時なく、終に南北朝對立の基を開くに至れ
り。爲世は後宇多天皇に事へて帝師となり、その女は後醍醐天皇の寵幸を得て、
尊良親王、宗良親王等を生み、爲兼は深く伏見天皇に昵近して、また和歌を教へ
奉り、後伏見、花園二帝これを乳父として、その家に生長したまふ。されば和歌に
おける二家の紛争が皇統兩系の分立を刺戟するに與りて力ありしや、蓋しい
ふを俟たずして明かなり。されば二條家は名家の嫡流なり、續拾遺、新後撰など
勅撰集撰述の譽は常にその家に歸す、されば世人の尊信もおのづから他の二
家と異ならざるを得ず、爲兼たるもの如何ぞこれを傍觀して晏如たるを得ん、
勅撰集編成の志頻に動き、終に伏見上皇の勅を奉じて玉葉和歌集を撰し、以て
自派の主張を立てたり。其後、花園天皇風雅和歌集の御自撰あり、京極の家風こ

兩家の歌風

れより漸く與らんとせしが、爲兼は佐渡、土佐兩度の流竄に遇ひ、晩年に至りて
また振はず、爲兼を最後として、三家のうち京極家まづ絶えぬ。二條家はた爲氏、
爲世の後、後繼者の以て一世を率ゐるに足るものなく、所謂師範家の勢漸く衰
ふ。

二條家の歌風は、その祖爲家の法格を墨守して、つとめて穩健雅馴の調を歌は
んとするにあり。爲家すでに平板の弊に陥れるに、只管これを軌範としたるそ
の後の追隨者が、所信なく、主張なく、沈滯萎靡、毫も新意を加ふるを知らざりし
は固よりその所なり。京極家はこれに異なり、その歌新古を問はず、調の如きも
敢て雅俗の境を設けずして、平安朝初葉このかた新古今時代にかけての和歌
を包容して、長短を取捨し、極めて自由なる歌體を創造して、以て二條家に對し
て天下公衆の耳目を引かんとしたり。たゞその新奇を欲するのあまり、幾分放
縱に流れたる氣味なきにあらず。かくては二條家たるもの、名家の嫡流として
愈、保守に傾かざるを得ず、京極家の主張を抑制せんが爲めにはあらゆる手段
を盡して、用語格調上の制限規則を發表したり。

秘傳家訓

京極家もまたこの情勢に對して黙々たるものにあらず、こゝに於てか二派の論戰絶ゆる時なく、鎬を削りて辯難攻撃すといへども、その和歌の是非を論ずるや、これを自家獨得の主義批判によらんとせずして、一に父祖傳來の秘傳家訓なるものによりて云爲するに過ぎざりしは、自他共に一なり。二條家の如きは勢の迫るところ、終に家訓なきところにも家訓を設け、傳授なきところにも傳授を作りて、假託虚偽の武器を借りても敵を攻撃するの材料に供せんとす。三五記、未來記、雨中吟など、定家の著として傳ふといへども、實はその家を尊くせんが爲に後世子孫の恣まに偽作せるものなるは、夙に識者の辯斥せしところなり。

和歌の衰微

二條家の歌書の假託だに既に藝術には恕しがたき罪惡なるに、これによりて歌風の自由を掣肘したる結果は、その生氣を殺ぎ、その向上を阻碍して、歌壇の衰頹を招き、爾後暫くはこの頹勢を救ふに由なからんとす。京極家が内部構想の如何を顧みずして、一意外形の用辭技巧にのみ新奇の工夫を凝らせるも、その弊固より甚しといへども、二條家が思想形式ふたつながら平易穩健を主義

三家の概観

として、却つて因循固陋に陥り、びいて子孫後生を誤れるに至りては、その罪もとより同日の談にあらずといふべし。

更に繰返して二家の概評を試みんか。古語古調を喜べるは二條家にして、新奇を求めんとしたるは京極家なり、しかれどもその實現せるところは共に庶幾するところと相反す。すなはち彼は古風を學ぶと稱して、實はその則るところ定家、爲家以後の近體に止まり、これは時様の尙古を非議しながら、またいつしかに古調に歸れり。古しと誇るも擬古の今様のみ、新しといふも、おのづから古體を離れず。かくて二者その期するところは異なりといへども、その趣くところに至りては相距ること一步半歩、竟に甚しき逕庭なし。殊に二派ともに父祖を尊崇して、しかも父祖の眞意を解せず、時流を斥けながら時流の眞相を知らず、空しく世と浮沈して、混沌の境に彷徨せるは、共に憐むべし。冷泉家に至りては、この時代にはその家振はず、多く説くに足るものなく、強ひていはゞその歌風故らに二家に對して異を立つることをせず、寧ろ種々の風體を役使して偏頗の弊を免れたりといへども、近きを求むれば或は京極に傾きたりといひは

小説の衰運

小説も亦その傾向和歌に同じ、藤原定家に門閥生じて和歌の道萎靡振はず、源氏物語一たび古今無比の名を留めて、またこの墨を衝かんとするものなし。平安朝にありては根本思想の變化こそなければ、或は事件を前後し、舞臺を轉換して、讀者の好奇心に投せんと試みたりしに、この時代に至りて和歌の平凡陳腐に流れたると等しく、小説も悉く同一典型中に固定して、大同小異の技巧に摸倣の跡を蔽はんとするのみ。昔の衣といひ、風につれなき物語といひ、石清水といひ、みなこれに洩れず。そもかくの如きは當代の上流貴族がその職務を關東武士に奪はれて、社會の閑人となるや、併せてその活氣をも失ひ、遊惰逸樂に日を送りつゝ、思想漸く涸渇して、創意も想像もなくなり、觀察さへ銳利ならずして、摸擬剽竊にあらざれば、篇をなす能はざるに至れるが爲なり。かくてこの時代の新小説の一として見るに足るべきものなければ、讀者が平安朝の小説に對する渴仰憧憬はいやが上に盛ならざるを得ず。こゝにおいてかそれらに對する註解批評書の生じ來るを見る、わけても小説の絶作たる源氏の註釋

まし。

註釋と雜纂

は踵を接して現はれぬ。

源氏物語の註釋の始めて世に出でたるは源氏物語奥入にして、平安朝の末世、世尊寺伊行これを編述し、のち藤原定家の増補したるものなりと傳ふ。ついで源光行の水源抄、その子素寂の紫明抄、相前後して出で、弘安の頃には源氏論議といへることも行はるゝに至れり。かく古代小説の研究の起れるも、この時代の一特色なるが、これと同時に一方に古來の奇聞逸話を輯めたる十訓抄、古今著聞集等の雜纂類の流行したるも、またその特色とすべし。而してこれまた平安朝追慕の念盛なるあまりの業にして、その豪奢なる生活、優雅なる行狀、さては秀逸なる詩歌等を傳へんとせるものなるは云ふを須ひず。この二書の外には、宇治拾遺物語あり、その序には、今昔物語の編者と稱せらるゝ、源隆國の纂録せるやうに記したれど、これも實は鎌倉時代の撰にして、今昔物語の拔萃に加ふるに後世の逸聞を以てせるものなり。

當時、作家を擧げて自信に乏しく、只管古代の作品に眩惑して、藝術的良心を缺けるの結果として、古人に假託せる偽書の續出を見るに至れり。歌學における

偽書續出

この現象はさきにこれを説きたり、神道五部書が上代の作として神道根源の經典の如く尊信せられながら、實はこの時代の假作に過ぎざりしも、古人既定論あり。その他夜半の寢覺、とりかへばや物語等を改作して、平安朝時代のまなる名稱を存して、恬として耻ぢざるが如き、石清水物語の一名に附するに源氏に先だてる正三位の題を以てせるが如き、松浦宮物語を以て貞觀三年の作となせるが如き、憐笑するに堪へたり。かの宇治拾遺物語に擬するに今昔物語と同じ撰者を以てせるも、正にその好例なり。陋劣なる惡戯はこれのみに止まらず、發心集を以て鴨長明の著に擬し、撰集抄を拈出し來りて僧西行の名を強ひたり。今行はるゝところの寶物集を康頼の作といひ、方丈記を長明の筆に成れりといふも、また信じ難し。偽作の一々の精確なる年代に至りては固より知るに由なしといへども、この時代における大體の傾向より推して、余輩はこれらの書が鎌倉時代に作られたるものなるを明言するに躊躇せず。要するにこの時代にありては、文壇の徳義全く地を拂ひ、作者に自己の信頼なく、わが國文學史上意氣最も沈滯せる不名譽の一時期を劃すといふも不可なし。

文學にあら
はれたる佛
教

以上説き來れる如き文學の各方面を通じて、この時代に顯著なる特色は、その著しく佛敎的意義を劇増し來れる事なり。昔の衣は、北の方の幽死を悲める右大將が、これを因縁に落髮して、横川に隱遁せんとすといふを以て局を結び、弘徽殿の女房の父大臣を主人公とせる風につれなき物語は、大臣が宇治に佗しく行ひすませる原因を以てその女の早世とおのが失戀との哀情に歸す。またわが身にも代へがたき意中の人の東宮の女御に立てるを見て善光寺に籠り行ける伊豫守が上を寫せるは石清水物語にあらずや。これらの例によりて見るも、この時代の小説が平安朝の典型を脱せざるが中にも、作者の作物に對する理想のおのづから變遷して、無常厭世の佛敎觀を鼓吹せんと企つるもの多きに至れるは蔽ふべくもあらず。果して然らばこの佛敎的見地に立てる時人が、或は源氏物語一篇の成れる眞意を付度して、紫式部が浮華艶麗なる好色物語にまづ人の感興を引き、そのうち徐ろに佛敎の眞諦を闡明し、以て娛樂の裡に知らず識らず讀者を解脱の境に導かんことをものに過ぎずとなし。或は式部は石山寺に籠りて、その經卷の裏面に五十四帖の筆を染め、猥りに佛物を

使用して狂言綺語を寫すの非禮を敢てせるが爲、死後地獄に陥れりなど評せるも、洵に偶然にあらざるを思ふべし。もしそれ式部を墮獄より救はんとて源氏供養の行はれたるが如きは、斯かる時代に有り得べき事柄にして、愈、明かに一世の趨向を反映するものにあらずや。方丈記、寶物集、撰集抄の類もみな紛ひがたきこの時代の産物にして、厭世觀、往生談、さては自己の世をそむける因縁などを以て全篇を埋めたり。要するに當時の作家の理想は佛教の傳播を以てその主要目的とす。

意氣銷沈せる京都の公卿達は古代作品の摸倣に一時を糊塗して、また千載不朽の作をなすを思はず。關東の武士鞍上に意氣を示して勢猛なりといへども、殆ど眼に一丁字なし。この時に當りて新風潮を帶ぶるも武士の無學なるの比にあらず。學藝に通ずるも優柔公卿の流にあらずして、活潑潑地、よく文界一時の牛耳を執りて、清新の氣を鼓舞せるを僧侶及び僧侶ならぬも佛教の奥旨に通せる佛教尊信者の一階級とす。平易なる親鸞の假名聖教、激越なる日蓮が遺文等はその一例にして、品位と生氣と兩つながら備はり、以て時代の産物とし

新佛教の刺戟

平家物語

て特筆すべく、以て宗教上の述作として不朽に傳ふべし。されどこれを以て直ちに文學として史上に優越の地位を有するものとなさんば當らず。さらばこの外に更に文學的價值の大なるものありや。若しありとせば、それは必ずしも親鸞、日蓮等の新佛教に關係せる人ならざるべからざる理なし。佛教の新潮流を代表せるものは禪、念佛、日蓮等の諸宗なりといへども、從來の天台、真言等の諸宗もこれに刺戟せられて、覺醒一番、捲土重來の意氣を呈し來れるものなし。いふべからず、平家物語は實にこの時に出でたり。その著者の新佛教に關するものたるは舊佛教に關するものたるを問ふなかれ、たゞその熱心なる佛教尊信者の所産なるをいはず足れり。

更めていふまでもなく平家物語は藤原末期における源平争亂の事實を描きたるものにして、結局平家が西海の藻屑となれる一篇の悲劇なり。事實の詳略、文體の異同はあれど、同じ消息を傳へたるものに、源平盛衰記あり、更にその以前の事實を記せるものに保元、平治の二物語あり。保元、平治はその簡素遒勁なる點に於て時に平家に勝るものなきにあらずといへども、大體においてその

歴史的悲劇

價值は平家の下にあり、或は軍記物の祖として時に保元、平治を尊ぶものあれども、果して平家以前の書なりや、余輩はこれを疑ふ、故に茲にはこの二書について細説せず。平家と盛衰記との年代の前後に至りては、古來種々の異説ありといへども、これにつきてもまた説を立てず、直下に作品としての價值の研究に向ふべきが、しかしながら盛衰記に取るべきは、その敘述の精細なる一點にのみありて、文學としては平家を戦記書中の第一位に推すべし。されば煩を避けて二書を分ち論せず、平家の下に盛衰記を併せ説くこととす。

平家物語を讀みて吾人の最も感興を深うする所以は、それが源平合戦てふ歴史上の最大悲劇を寫せる點にあり。平安朝このかた文運盛にして、作家が想像によりて生み來れる名篇傑作少からずといへども、わが國いまだ曾てかゝる雄大沈痛の悲劇に接せず、壽永の天地を舞臺として自然が演せるこの大活劇は、貧弱なる人間想像の埒を超越して、その事實は正に小説よりも遙かに奇なるものあるなり。もとより平家は純粹正確なる歴史にはあらざるべし、その間著者が想像も交れり、傳説の誤れるものもまた多かるべし、しかもその歴史的事

平家と太平記

階級の破壊

實を基礎として取捨鹽梅せるものなるは疑ふべくもあらず、宜なるかな、その局面の變化に富みて、今日なほ讀者をして歎賞の聲を絶たざらしむること。

社會の秩序紊亂して、干戈しきりに動き、わが世の修羅場を現出したる時代を歴史に求むれば、源平時代、南北朝、戦國時代、織田豊臣時代等を擧ぐべし。平安朝は概するに泰平無事の世、徳川時代に至りては海内更に穩かにして、米艦一發の砲聲に三百年の眠より覺め出でしは漸くその末季なり。戦國には戦記文學あり、即ち南北朝の太平記、室町以後の應仁記、鎌倉大雙紙、信長記、太閤記等なり。然れども應仁記以下は文學上見るに足らず、ひとり南北朝の太平記は平家物語と並びて軍記物の二大傑作と稱せらる。唯平家を以て太平記に勝れりとなすべき二箇の理由あり、一は太平記に先んじて平家の出でたること、他は平家の對象たる事實が、技巧を弄せずして太平記よりもおのづからに詩的分子に富めることこれなり。また言ふ、太平記は平家を摸倣せる點において既に一籌を輸するに、その文彫琢に過ぎて、餘りに華麗絢爛なるを惜しむ。

源平争亂の事實は何が故に詩的にして多趣味なるか、いはく、平家一門二十餘

年の盛衰が急轉掌を覆すが如きものありしを以てなり。たゞ榮枯地を變ふること夢の如くなりし點のみを以ていはゞ南北朝も多く異なることなし。されど源平争亂は從來固定したる社會の秩序動搖して、全く調和を缺ける新舊二潮流が、こゝに始めて、久しく蓄へ來れる威力と、新進氣鋭の勇を以て相衝突せるもの、その怒濤狂瀾の狀豈に想見すべからずや。南北朝の戰亂はその初はまた武士と公卿との争なりきといへども、しかも當時の公卿は既に武を練ること日久しく、實は武を以て武に當れるものなり。源平時代の争鬪はすなはち然らず、名は源平兩武家の戰といふも、實はこれ文と武との争なり、新と舊との戰なり。この大混亂の渦中に投じて、その犠牲となり果てたるものを平家の一門とす、中にも清盛が一生こそこれを代表して餘あるものなりしか。

清盛の奮闘

平清盛は藤原氏の習慣的勢力に反撥して起れるものなり。因襲の久しき、上下の階級おのづから定まりて、その壓迫に堪へざれば、これを破りこれを倒して、一面に繁縷なる社會の形式を顛覆すると共に、一面に箝束縛の境より自己を救ひ、以て人生本然の要求に應じて、その行動を自由にせんと試みたるなり。

平家の覆滅

その志や寔に壯とすべし、その徹頭徹尾自己の威力に信頼せる獅子奮迅の大勇猛心や、以て天下を横行するに足る。日本六十餘州は果してかれによりて新しき光明を見たり、かれが希望はた將に成らんとす。たゞ歴史の勢力や更に偉大なるものあり、清盛いかに縦横奮闘すとも、歴史の張れる網をば破り得ず、その勢力は逆まに一門の上に至りぬ。平家一門の軟化てふ事實はやがてその結果にあらずや。

清盛は知らず、昨日まで馬上弓を搔い挟んで疾驅せる嚴めしき武夫は、今や皆詩歌管絃の宴に袖を絞る優にやさしき公達と化しぬ。甲冑やいづこ、刀劍やいづこ、一門がいま踏みて歸れる戰場の様も忘れたりげに、優しくも行ひすませる笑止さよ。平安朝以來の宗教もまた舊思想を代表して平家を煩はすこと多大なりき。園城寺といひ、興福寺といひ、延曆寺は幸にして清盛と結びしも、何れも不俱戴天の仇敵として、常にその鋒を差し向けぬ。平家が横紙を破りて、一時帝居を福原に遷せるも、その原因多々あるべしと雖も、一は京都の地にありては、これら舊思想の壓迫絶えずして、恣にわが威力を振ふに由なかりしが爲

なり。されど既に久しく住み馴れし帝都の憧憬は、こゝにもかれらを安んずる能はざらしめ、また幾ばくもなく都がへりの醜態を演ずるの止むを得ざらむ。さしにも魔王の威を振はんとせし清盛の運命もこれまでにして、その歿後、數年を出でずして一門の破滅となり、西海の浦波永へに悲哀の曲を奏するに至りしもの、單に源氏の武力の優れたるが爲とのみにてはいひ足らず。かの木曾義仲が一舉にして都に入るを得たる如きも、巧に術策をめぐらして、從來平家に同心したりし山門の衆を語らひて、その合力を得たるが爲に外ならざるなり。奈良の大佛殿を焼き、伊勢の神領を掠めたる、平家が無道の振舞は、いかに天下萬民の敵愾心を喚び起したりけん。およそこれらの壓迫と怨恨とは相重なり相寄りて、かくまでに容易にめざましき源氏の功名を遂げしめぬ。要するに平家没落の主因に二あり、その都會に上ると共に早くも武士の魂を捨て、文弱なる公卿に同化せるは其一にして、その新進の勇氣に任せて舊來の文化に對する破壊を試み、終にまた防遏すべからざる天下の反抗心を躍起せしむるに至りしは其二なり。

文武の對照

宇治川の合戦脆くも敗れて、腹かき切らんと扇の芝に坐したる源三位頼政が「埋木の花さくこともなかりしに、身のなるはてぞ悲しかりける」こよめる、薩摩守忠度が都落に馬首を廻らして、五條なる俊成が館を敲き、この中一首にても撰集に入るべきものあらば生涯の面目なりとて、おのが家集を預けて去れる。また一の谷の戦に、櫓の上に吹きすさぶなる笛の音をきゝて、眞先かけたる朴訥の熊谷直實が、平氏の公達は姿もこゝろもやさしき上臈よなどて感歎の聲を放ちし逸話など、いかに詩味油然として興趣盡きざるの感あるよ。平家の著者は、固よりこの新舊思想を代表せる文武の對照の讀者の感興を引くに足るべきを信じ、肉動き骨鳴る勇ましき戦物語の間々には、往々この優美可憐なる話柄を挿み、以てその庶幾するところを達し得たるは、苟くもこの篇を繕くもの容易に看取するところなるべし。

平家の女性
と武士

優にやさしき方面の物語の中にも、新舊二道の潮流はまた自ら顯著にして、例へば運命の飄弄するにまかせて、その一生を浮沈せる二代の後、小督局、維盛の北の方の如きは、飽くまでかよわき平安朝式婦人の舊思想を代表し、祇王、祇女

佛御前横笛、千手の前等の、中流以下の女性の如きは、その戀を失へばすなはち去つて佛に歸すといへる新時代の傾向を帶ぶ。武士に至りては、平家の公達の多くは平安貴紳の亞流にして、優柔不斷に陥りたりと雖も、その中にも稀には新なる武士氣質を養へるものなきにあらず。關東武士に至りては進むを知りて退くを知らざるもの、君の爲には命を鴻毛の輕きに比し、兵馬の外何物をも顧みざりしが、しかも後世におけるが如き武士道の發現は未だ見がたかりし如し。筑後守貞能が重盛に事へて平軍無雙の勇士と稱へられながら、御方の都落にひとり離れて東國に向ひ、宇都宮氏に隱匿はれて餘生を送れるが如き、木曾四天王の一人と聞えたる樋口次郎兼光が兒玉黨の甘言に陥りて、これに降れる甲斐もなく、斬罪に處せられたりと傳ふるが如き、これを證するに餘あり。武士の志操氣節の成熟して、渾然たる一個の特殊道德を形成するに至りしは遙かに後にありといふべし。

平家の厭世觀

平家物語は縦に雄大悲壯の戰記を貫き、横に可憐優雅なる戀物語を錯綜すると共に、また實に幽玄奥妙の佛教趣味を點綴す。就中叡山に關する記事は多し。

これ既に前に説ける所にして、著者が平家物語一篇を述作せる目的の一半は、佛教思想の喧傳にありといふも過言にあらじ。畢竟、この思想の背景ありては、じめて治承の春を名殘に、壽永の秋を西國さして落ち行ける、夢よりも果敢なき平家一門の盛衰史に言々涙あり、句々同情あり、而して讀む者をして讀誦一過、自ら無常厭世の念を懷いて、佛道に歸入せずんば止まざらしめん。固より全篇を通じて、平氏の悲しき運命の、人情の琴線に觸るゝものあるはいふまでもなけれど、その間に挿入せる戀愛譚の如きも、歸着する所は即ち無常にして、著者の理想は到る處に現はる。今これらに就ては深くもいはず、その冒頭を「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現はす、驕れるもの久しからず、たゞ春の夜の夢の如し、猛きものも遂には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じ」といふに起して、結末の灌頂の卷に、建禮門院が白河法皇への物語に、その身の經過せる一生を六道に譬へたまへりといへるに考へて、その全豹を推すに足るべし。

第四章 南北朝時代

この時代の
大勢

後醍醐天皇天資英邁、鎌倉幕府の専横を憤り、帝業回復のはかりごと幾たびか蹉跌して、なほ屈したまはず、御志いよ／＼堅きと共に時勢もおのづから一轉して、諸國の武士の心を朝廷に寄するもの漸く多く、幕府遂に倒れて、建武中興の成れるを見る。すなはち天下は再び聖天子の直ちに政を視たまふ天下となり、世はさらに静謐に歸りて、王朝盛時の復興期して待つべかりしに、痛むべし、新令宜しきに從はず、恩賞公平を缺き、さなきだに久しく攻伐に慣れたる諸將は奇貨措くべしとなし、碧血いまだ乾かざるに、早くも反旗を翻して亂を構ふ。首魁足利尊氏は鎌倉に起りて、京師に攻め上り、強ひて名分を失はざらんが爲に、正統を外にして別に天子を立つ。後醍醐天皇すなはち吉野に蒙塵したまひ、主權こゝに南北に分れて、嘗て北條氏が分ち奉れる兩皇統は更に相反目することとなり、武士てふ武士は、そのいづれかに附して、戦亂これより止む時なし。

時運と文藝

社會は統一を失ひぬ、臣民は歸嚮すべきところを知らざらんとす。一時好望なりし文藝も、またこゝに至りてその萌芽を潜めざるを得ず。

そも／＼後醍醐天皇の中興の偉業は、後鳥羽上皇の遺志を繼ぎたまひしものなり、上皇のもよほしたまひし承久の亂は、皇權の回復を謀りたまふ御企なりしが、雨降つて地かたまるとかや、官軍一敗地に塗れて、幕府の勢力いやが上に張り、その後はまた斯かる無謀の舉に出でんとするものなかりき。この間、鎌倉の地は實力足りて活氣充滿すれど、文藝の道には極めて疎く、京都はこれに反して文學の士多けれども、因循固陋にして、進取の氣象あるを見ず。さらば後鳥羽上皇の企畫はその謫所に崩じたまふごとにも、全く跡を断ちしかといふに、決して然らず、一脈不平の氣は沈滞鬱結せる社會の間にも縷々として絶えず、隱約の裡に根を張り幹を延して、遂に後醍醐天皇に及びて俄然として天下の耳目を聳動せるなり。京都はこゝにおいてか更に政治の中心となり、公卿はた活氣を呈し來れば、この勢は社會の全般に涉り、文藝も一時復興の姿を示せり。されどこの文藝革新の機の熟せるは、單に世の中戦亂うち續くに伴ひて、人心

動搖せる結果のみと説かんとは未だし。換言すれば、今ふたゞ政治の中心となる京都が、これまでに引きかへて、更に活動の地となり、亂れたる國家はこゝを核心として統一せられんとし、久しく暗黒裡に適從するところを知らざりし天下萬民が新たなる一路を探り得て、希望の光に接し、その氣力を回復すると共に理想實現の望をも得たるが爲なりといふを以て妥當とすべし。しかも惜しいかな、京都が政治の中心たるは、その後も永く變ることなかりきといへども、社會の理想實現の希望は一時の夢と消えて、天下は幾ばくもなく麻の如く亂れ、一時好望ありし文藝も、また遂に陸離たる光彩を放つことなくして止めり。惜しむべしと雖もまた實に已むを得ざりしなり。

まづ和歌の情勢を見るに、鎌倉時代には二條、京極、冷泉の三家あり、各異を立てて門戸を張りしが、その中、冷泉家は初より未だ大なる聲譽を得るに至らず、京極家は爲兼の歿後その家全く絶え、二條家も爲世の子孫にして勅撰に與るものなきにあらざりしかども、これはた微々として振はざりしが、元弘、建武の頃二條家の門より出で、折ふし頽然たる二條家の風と、一般歌壇の衰運とを挽

頓阿法師

連歌の起源

回して、よく復興の實を擧げたるものを僧頓阿となす。頓阿法師は爲世に師事せる人、和歌の造詣頗る深し、その集を草庵集といふ。風體爲氏以來の平穩を主として、奇を避け、清新の氣を失ふといへども、言語の雅俗の選擇に注意し、辭句の鹽梅に苦心を費して吝まず、殊に多く縁語を用ひたる修辭上の技巧に至りては何人もその價值を否定する能はざるものあり。後世、二條の流を汲むもの、まづ模範としてこの集を推すこと、所以ありといふべし。

その門下に攝政二條良基あり、頓阿と力を協せてまた和歌の復興に勉む。されど良基の意を傾注したるは、寧ろ和歌にあらずして、連歌にあり。連歌の起源につきては、或ははやく神代にありて、伊弉諾、伊弉冉二尊に起れりとなし、或は日本武尊が酒折宮にありて、焚火せる翁に向ひて「にひばりつくばを過ぎて幾夜か寐つる」と問ひたまふに、翁答へて「かゞなべて夜にはこゝの夜、日には十日を」といへるを以て、その始となし、これによつて連歌を稱して筑波の道といふともいへど、これらの起源論はいま深く穿鑿するの要なし。下りて萬葉拾遺等の集にもその例見えたるが、なほ特別の名目を設けず、金葉集に至りて始めて連

連歌の盛運

歌なる一部門は置きたるなり。
 連歌は、一首の和歌の上の句、もしくは下の句を一人がよむを、これに次ぎて残りの下または上の句を他の一人が連ぬる仕組にて、その例は今しも擧げたる日本武尊の問答に見ても知るべし。初めは單に文學上の一種の遊戯として弄ばれ、随つて多くは滑稽の意を寓せしものなるが、平安末期を通じて鎌倉時代に入り、その漸く盛に行はるゝに及びて、和歌の名家にしてこれに指を染むるもの多く、これと同時に一首のみを作る習慣を脱して、二十句、五十句、百韻、二百韻、五百韻、千句をつくるに至り、二條家の祖爲氏の如きは和歌よりも却つて連歌をもつて得意の技としたりと稱せらる。かくて鎌倉時代には既に連歌の法式を定むるものあるに至りしが、なほ一家の私言たるに止まりて、以て廣く連歌を律するには足らざりしを、良基一たび出で、救濟周阿と共に連歌新式を定め、始めて準據すべき斯道の法則を立つるに至れり。こゝに於てか今まではこれを餘技視せる歌人も、眞面目の態度を以てこれに對すれば、風體の滑稽もいつしか嚴肅となり、進んでは和歌と拮抗し、或は和歌の勢を壓せんとするも

神皇正統記

のあるに至る、歌壇の風潮の漸く動かんとする傾向あるも、また自らこの間に窺ふべからずや、連歌は斯くてこの時代に至りて漸く文學として重要視せられ、滑稽の域を出で、嚴正の地歩を獲得したり。しかもこれを歴史の壓迫を被ること多き和歌に比ぶれば、なほその法則の自由にして、用語の無節制なる、同日の談にあらず。されば良基等の如き、極めたる上流者の間にも行はれたりといへども、流行の程度を以ていへば、公卿の間には和歌なほ勢力あり、連歌は寧ろ武家の文學として行はれたりといふを妥當とせんか。
 南北朝時代は王政の復古を見んとして、しかもこれを得ず、天下一統せんとして、しかも一統せず、日輪山の端を出で、更にまた雲霧の爲に遍照の威力を遮られたるが如き時代なり。この一瞬の光明を捕へて、文筆の上に自己の理想を披瀝せんとしたるものを神皇正統記と増鏡とす。神皇正統記は准后北畠親房の著にして、中興の業破れて南北更に分立するに至れる王道の衰頹を憤慨し、古來の歴史に照らして皇統の正閏を論じ、三種の神器の在るところすなはち大權の存する所なるを疾呼せるもの、實にわが國文を以て綴れる議論文の

權輿といふべく、婉曲なる詞句のうちに雄大の氣魄を藏し、朗々として誦すべし。たゞ著者が身權要の地にありて、みづから權力爭奪の渦中に投じたりしが爲に、その文やゝもすれば政論的の臭味を帯び、純文學として嫌焉らざる節なきにあらざるは、或る人は却つてこれを賞すべく、余輩を以てみれば寧ろ憾むべし。たゞ嚴密にいへば、此書は文學にあらず、文學として此書を上下せんは固より當らじ。

増鏡と吉野拾遺

増鏡は後鳥羽天皇の御即位より後醍醐天皇の建武中興に至るまでの歴史にして、この間に起れる大小の事實を客觀的に記述して、一見南北分争に關する意見の如きは、これを徴するに難しといふべし。その發端を後鳥羽天皇の御代に置きたるも、單に今は絶えたる彌世繼の後を承けたるものと見ば、これはた尋常のことにして、普通の歴史として毫も此點に於て疑を容るゝ餘地なく、著者が編述の目的は極めて平明なるが如し。されど若し余輩の忖度にして誤らずんば、承久の亂を開卷として、結尾を建武の中興に選べる著者の内心、また何等の意味をも存せずといふを得じ。たゞ正統記が明々地に正閏の議論を云爲

白紙
新編吉野拾遺

徒然草

せると選を異にし、事實は有りの儘なる平面的敘述を用ひたるが爲に、その底に潜める眞意を汲むに難んずるのみ。斯く増鏡が深く思想を裏に包みて、表面に於ける著色を帯びざるは、やがて文學として正統記に優れる所以にして、流麗の筆致またよくその模範たる榮華物語を凌ぎ、大鏡の墨をも摩せん。ただ著作の時代の先後及びその絶對的價値より批判するに、論者或はこれを以て假名歴史として大鏡の名譽をも凌駕せんとするものとなす如きは、誤れるものといふべし。吉野拾遺もまたこの頃に成りて、吉野の朝廷に關する種々の逸聞を録す。固より南帝に近侍せる人の作なるべく、その記述の舞臺は天下統一の希望ありし頃、即ち初期の吉野にして、恰も老後衰殘の士が今はた望むべからざる少壯健闘の時代を追憶せる回顧録にも似たりといふべし。神皇正統記といひ、増鏡といひ、吉野拾遺といひ、いづれもその形質において多少の差こそあれ、一時光明を認めんとせる實社會に直面して成れる産物なるは、みな同様なるが、こゝにこれらと全く發生の所縁を異にして、著者が修得せる道佛主義の眼鏡によりて、皮相の虚飾を透して社會の裡面を洞察し、爬羅剔

扶痛快にその矛盾撞着のあるところを暴露し、しかも世間より一步を退いて全く傍觀者の位地にその着眼點を置けるものあり、これを兼好法師の徒然草とす。兼好法師は洛東吉田祠の神官卜部氏に出づ、後宇多上皇に仕へて、一時宮廷の間にも立ちならし、が、上皇崩御の後、髪を削つて山林に隠れ、閑寂の生活に餘世を終りし人、その佛教の蘊蓄ありしはいふも更なり、ふかく道家の虚無説に悟入して、二者の抱合するところ、おのづから特殊の厭世觀をなし、かの支那の南北朝に出でたる清談家の輩の如く白眼以て世を見る。たゞ平安朝以來の舊思想はこの時に至りてもなほ大なる勢力ありて、恬淡なるこの僧をしてなほかつ感情主義の羈絆を脱するを得しめず、時に口を開いて、色好まざらん男は玉の卮の底なきが如しなど、戀愛謳歌の響を傳へしむ。まことや人生を達觀し時代を超越して、その好むところに従つて世を褒貶すといへども、人間通有の情緒斷つに難く、一味忘るべからざる温情を有するは、わか兼好の特色にして、その見聞感想録たる徒然草の、この時代の産物としては太平記と併稱せられ、隨筆としては王朝の枕草紙と並べて輕重を問はれんとするも、畢竟この

太平記

舊思想たる情緒主義と新思想たる厭世主義とが、錯綜反撥して、時にかれに傾き、時にこれに偏して、一種獨得の響を傳ふるが爲なり。一言にして評すれば、兼好は新舊思潮相葛藤せるこの時代の鏡なり、而してその趣味の洒脱なる、後世よく對を求むるに難からんとす。また兼好は歌道において頼阿と弟兄の間にあり、たゞ和歌は自らその得意とするところにあらず、長技は文章にあり、文章はすなはち不朽の價値あり。

南北朝における文學の最大著述はいふまでもなく太平記四十卷なり。此書は平家物語に倣ひて作れるもの、後醍醐天皇の即位に筆を起して、建武中興を過ぎ、兩朝分争を経て、足利二代將軍義詮の薨後、細川頼之が幼主義滿を輔佐して、天下の政治を行へる頃まで、およそ五十年間に亘りて戦亂の始末を記す。その文章は平安朝の末期より漸く發達し來れる和漢混交文を用ひて、漢語を交ふることに多く、脈絡はた大に漢臭を加へ來りて、絢爛華麗なること遙かに平家物語の上に出づ。されど評するものはこれを以てなほ平家物語と比肩する能はざるものとなし、讀むものはたこれに對して平家に感ずるが如き油然た

る興味なきを遺憾とす。何が故ぞや、他なし、平家物語には首尾一貫せる著者の理想の儼として存するあり、こゝを以て波瀾抑揚のうちにも自ら一箇の條理貫徹して、全篇渾然たる一全體をなすに、太平記は然らず、著者の心と筆とは、事件の進行のまに／＼屢、動搖して止まず、終に平家が有する如き統一を示すと能はずして止めるが爲のみ。

見よ、初め醍醐天皇の中興の業に多大の尊敬と同情とを捧げて起てるが如き太平記の著者は、兩統分立の頃までは流石に櫻樹を削りて赤心を披瀝せし兒島高德の忠節、わが子の自殺をいまして、尊王の大義を明かにせる正行が母の庭訓など、時に巧なる空想をさへ交へて、國民が尊奉すべき道義の觀念を示したり、さるほどに南朝の旗幟漸く光なく、朝に忠臣と頼まれし勇將も夕に賊軍に降つて逆さまに矛を構へ、一時の利害愛憎によりては兄弟も敵となり、敵も御方となり、一代を拂つて節義なく、恩愛なく、はた理想なきに至りては、またいづれにその同情の向くべきかを知らず、描寫は徒らに東西に彷徨して、中心の歸結を失ひ、散漫無統一、讀者はまたこれが爲に屢、前後記述の脈絡を失ひ

社會的統一の缺如

武と武との争

て、卷を覆うて退屈を訴ふ。太平記が一人の手に成れると數人の手に成れるとは關するところにあらず、どにかくにそが統一の美を缺けるは第一の缺點にして、しかも此點は強ち太平記の著者をのみ咎むべきにあらざるが如し。蓋し建武の中興ありて、社會の秩序一時成立せるが如きも、やがて南北朝の兩立となり、天下さらに混沌の状態に陥れば、さきに仄かに認めし光明もまた忽ちにして消え、國家の統一を失ふと共に、文學の上にも知らず識らずこの影響の及べるなり。皇統の分立は、短日月の間にはあれど、平家時代にもまたこれを見たり、たゞ太平記と異なるところは、彼にありては、國民の間に政治の中心、權力の中心は常に京都にありといへる一片確乎たる信念あり、かゝる際にも此點に於て思想の動搖するを免かれ得たりしのみ。

されど太平記と平家物語とがその趣致を異にする原因はまた別にあり、そは平家の條において既に言へるが如く、兩者が取れる題材の著しく相違する點にあり。平家が主題として取れる源平の争亂は、名は武家と武家との争なりといへども、實は武家と公卿との争なり、而してその生活様式を異にし、習慣を異

にせるところに破天荒の詩味を生ず。これに反して太平記が主題として取れる南北朝の合戦は、關東の武家方に對する京都の宮方の反抗なり、一見その階級において非常の相違あるが如きも、この時代の宮方はまた昔の宮方にあらず、武を練り膽を磨きて、剩へ從屬の武士ども、その數優に關東に匹敵すれば、名は公卿といへど、實は武家といふも何ぞ選ばんか。宮方と武家との合戦は全然武器の利鈍を試すなり、兵力の強弱を比ぶるなり、新田勝つか、足利敗るか、これを決するは一にかゝりて戰術の巧拙によるのみ。太平記が全篇を通じて殺伐なる記事に滿ち、殆ど平家に見るが如き、優美可憐の戀物語、さては戯曲にも似たる悲劇の類を見ること少きは當然のことといふべし。平家物語はわが國の散文的敘事詩の上乗なるものなり、太平記もまた後世に及びては一の敘事詩を以て目せらるるといへども、當時の戰術等を研究する上に寄與するところあるを外にして、よく文學的に不朽の價値を有すること、平家の如くなるを得るや否や、識者を俟ちて後に知らざるなり。

道義の觀念

説き來りて余輩は太平記の爲に頗る不祥の言を重ねたるが如し。然り、太平記

はこれを何れの方面より見るも、文學史上の大傑作とはいひ難し。されどこれは一全體としての立論にして、もし部分々々の美點に至りてはまた大に見るに足るものなしと言ふべからず。而して平家に比較して太平記の特色として擧ぐべき點は、その記述の中に現はれたる人間が、平家時代にありては未だ全く脱却するを得ざりし平安朝の色彩を去つて、新しき風俗習慣を養ひ、殊に儒佛二教の影響を受けて、倫理的はた宗教的觀念において一步を進めたることなり。すなはちまづ儒教の感化に見んか、かの藤原藤房が龍馬を退けて政道を論じたるが如き、また尊良親王が式部少輔英房の貞觀政要を講ずるを聞きて寵姫を退ざけたまひしが如きは是にして、佛教的方面に於ては、わけて禪宗の勢力行はれて、公卿武士のこれに歸依するもの多く、日野俊基は鎌倉に命を失はれんとして、泰然として「古來一句無死無生、萬里雲盡、長江水清」と喝破し、北條氏の臣長崎次郎は「如何なるかこれ勇士、恁麼のこと」と南山和尚に問ひ、和尚の「吹毛急に用ひて前まんには如かず」といふを聞くや、驀地に敵陣に駆け入りて血戦す。かれらが死を見ること歸るが如く、泰然自若として運命の示すところ

武士道

に従はんとせる、その志のある所を見るに足るべし。
 もしそれ武士道に至りては、これら儒佛の思想と聯關して、一層その發達の特筆するに足るものあり。元弘三年六波羅の陥るや、越後守仲時を始として、兵士これに死するもの四百三十二人に及び、ついで高時の鎌倉東勝寺に誅に伏するや、無慮八百七十四人の臣下枕を並べて追腹切る。北條氏の末路は悲惨なり、民心を失ひ、戦争に敗れて、四面楚歌の聲に滿つ、されどその最後の一時やかくの如く、それ華やかなり、これをかの一の谷の合戦乃至壇の浦の船軍における平家の見苦しき敗北の狀に想ひ比べて、その差如何、時勢の變遷の争ふべからざる、一にこゝに至るか。

女性に對する觀念

女性に對する觀念もまた平家物語とは頗るその趣を異にし來れり。源平時代にありても、時に時世に先じたる女性なきにはあらざりしかど、なほ二代后小督局の如き戀愛偏重の平安朝式婦人はその時代の代表的女性にして、平家の著者はまたこの種の婦人に向つて滿腔の同情を注ぐに吝かならざりき。太平記の著者は然らず、鎌倉時代以後漸く根柢を固め來れる女性卑下の思想に

示唆せられて、頻に儒佛の説を注入したりしが如し。例へば、御方の土岐頼員が、大事をその妻に洩せるが爲、後醍醐天皇の討幕の破れたるを擧げて、七たび子をなすとも女子に心を許すべからずといへる外來の俚諺に左袒し、また、さしも忠節堅固なる武家方の佐々木信胤が、一朝節を變じて宮方に附きたるを見て、「この頃天下に禍をなす例の傾城ゆゑとぞ申しける」といひ、更に新田義貞が合戦の期を失へるも、勾當内侍の愛に溺れたる爲、鹽屋高貞が家をも身をも亡ぼせるも、またその美しき妻のせさせたる業なりとす、されどかく著者が誹謗し呪詛せるは、優にやさしき平安上臈式の女性のみ。或はその子を誡めて、父の志を繼がしめ、又は御方の兵氣を鼓舞して止まざりし、楠木正行の母、奈須五郎の母、さては瓜生保の母などの如き、武事の一端をも心得て、庭訓の龜鑑たるべき雄々しき戰國的女性に至りては、固より稱讚措かず。此の如きは未だ平家に見るべからざる特色にして、以て太平記と平家物語との著者が女性に對する理想の異同を比較すべく、延いては時代思潮の變動をも知るに足るべし。

第五章 室町時代

この時代の
大勢

南北朝合一して京都は再び政治の中心となれり。尊氏はよく足利氏十五代の基礎を築きしかど、なほ紛々擾々たる内訌軋轢を如何ともする能はざりしに、花の御所を築き、金閣三重の樓を營める義満に至りて、政治もまた始めてその緒に就ける觀あり。尊氏が天下に覇を稱するまでの態度は、到底公明正大とはいふを得ず、戦亂の世の中とはいひながら大義名分はおのづから分れたり。尊氏いかに權謀術數を弄すとも、曲れる尺度は正しき用をなし難し。機を見るに敏なる渠は、諸將と國民とがおのれに悅服の意なきを知りて、忽ちその態度を一變し、おのれ却つて頭を低うして、媚を八方に呈す。傲慢至尊をも眼中に置かざる人の政策として、一見奇異の感なき能はざるも、天下を懷柔すべき道、これを措きてまた他にあらざりしなるべし。しかも當時諸將の尊大自ら許せるや、これしきの甘言に軟化するものにあらず、ますます、權力を張りて、各自の所領

に跳梁跋扈し、將軍の威令を蔑視することにも、或は個々に、或は黨與相結びて、干戈これ事とするの風あり。およそ此の如きもの尊氏時代の有様にして、むしろ自ら醸成せる氣風ともいふべし。然るに義満の世に至りて、久しく解決するところを知らざりし兩統の軋轢は融合し、天下の紛争はた一時に歇みて、士民こゝに太平の象を喜び、始めて室町幕府の盛運を謳歌す。されど實はこれ風雨更に暴威を逞くせんとして、一時その鳴りををさめたるの時のみ、やがて永享に空かき曇り、嘉吉にいよいよ空荒れそめて、應仁におよびては、電將狂ひ驅け雷神轟きさわぎて、京都を中心として、天下を擧げて混沌溟濛の裡に露出すること、前後百餘年、あはれこの悲風慘雨に遇ひて、義満の世に萌せる文華の蕾は、咲くこともなくて散り失せたるこそ是非もなけれ。徳川家康はこの雨この風の歇む時、その頭を擡げたるものなり。渠が見たる天地は滿目風浸雨蝕の痕ならぬはなく、渠が見たる國民は具さに塗炭の苦を嘗めて、怨嗟の聲いと哀なりき。げに嬋娟たる百花は駘蕩の春にこそ誇れ、文學もかくの如き亂離の世にいかで榮ゆるを得ん。

文武の合一

然れどもこの戦亂の時代も應仁までは時に和平の日もあり、よしや内治外交のことに、一々意のまゝに行はれざりしにもせよ、室町將軍家の威令は、とにかくに全國を支配するに足りしなり。前の鎌倉の世を見よ、文化の中心は全く東西に二分して、文藝の素養あるものは實力萎靡して振はず、氣力漲りて政治の權を握れるものは、文事の門外に立ち、文武全く兩途に趨せ、兩者の離反この時より甚しきはなかりき。これにつげる南北朝もまた勢力の二元なるは依然として變らず、天下歸服するところを失ひて、人心五里霧中に彷徨すれば、文藝の發育のこれがために阻害せられたること固より言ふを須ひず。然るに室町時代に入りて情勢一變、權力京都に集中して、文に携はるものと、武に従ふものと、並びにこゝに集り、従つて一時の元氣はこゝを中心として盛になれば、文藝もまたこの機運に乗じて大に振はんとする傾向あり。すなはち所謂東山時代の繪畫を筆頭として、髹漆、陶磁等の美術工藝が非常の發達を示したりし如く、文學にも漢詩和歌の盛を致すと共に、別に謠曲といへる一新文學を生み、前後に類なき特殊の産物を後世に遺すを得たり。

社會よりも個人

されど天下の諸侯、陽には柔順を装ひて、將軍家の麾下に服するが如しといへども、陰にはいづれも野心勃々として、事に臨み、機に應じて、その鋒鏑を露はし來り、暗流四方に流れて止まざれば、國民は須臾もその生業に安んずるを得ず。東山將軍も積極的にこの不服分子を平けて、昇平の實を擧げんとはせず、袖手傍觀、消極的に退いて銀閣の閑室に風雅の道を樂まんとす。かゝる時、社會に理想の光明を闕けるは理の最も見やすきことにして、この點はまた南北朝と異ならず。國はいづこにかある、統一いづこにかある、紛々たる好戰の諸侯は攻撃これ事とし、たゞわが威を張るに忙し、矛盾の人世なり、悲慘の世の中なりとは、當時何人の眼にも映じたる世相なるべく、これに逆ひて進んで自己の理想を實現せんとし、或は社會全體の精神を發揮せんを試みるが如きものなかりければ、文學にも自ら或は個人の苦痛悽慘の境に同情を寄せ、或はその清風高節を讚するものを生じたり。後崇光院の椿葉記の如きは稍、選を異にして、皇統の嫡庶を論じたりきといへども、これとて神皇正統記の氣魄堂々たるには似ず、寧ろ瑣末なる私事をこゝろこゝしく説けるのみ。固より平家物語、太平記などの

典型の弊

如く、天下國家の安危存亡に關する大戦を描けるものは少くして、義經記、曾我物語など、個人の武勇譚、孝行話の類を寫せるもの多く出で、なほ下りては社會の紛紜をば全く度外に置きて、専ら滑稽を主とし、純然たる想像の所産に俟てる鴉鷺合戦物語、魚鳥平家等の作を見たり。されどこの時代また全く大題目を捕へたる戦記物のなきにはあらず、應仁記の應仁の亂を寫し、鎌倉大雙紙の關東治亂の委曲を盡せるが如きはすなはちその例にして、たゞ當年の士人が踏踏々々、自己の歸向するところを失へるが如く、作者もまたこれらの戦亂に對して、敵味方いづれにその同情を寄すべきかを知らず、漫然筆の動くに従つて出來事を陳列せるが故に、通篇何等光彩の見るべきものなくして、要するに單調無味多くいふに足らざるものとなれり。

かくて文學はこの時代に至りて、いよ／＼平凡庸劣のものとなれり。しかしながら、こゝにこの時代の新しき傾向として一顧に値するは、文學に個人の尊重せらるゝ傾向あるに至れることとす。されどこれに對しても余輩が未だ雙手を舉げて賛意を漏らすに躊躇する所以のものは、その新現象は打見たる所頗

古今傳授

る注意すべきものあるに拘はらず、實は大いに慥感すべきものあるを思へばなり。何を以てこれをいふか、他なし、この時代の個人尊重なるものは國民の團結心の缺乏、社會思想の壞類がその極に達して、國家的觀念の失はれたる結果おのづからこゝに至れるものにして、決して積極的に意識的に個人を尊重せんとしたるものにあらずりければなり。されば文學が個人を寫すといふも、その性格なり、心理なりはやはり普遍的なるものとなりて、特殊なる感情の發動の如きは寫されず。また後に出でたるは先なるものの爲すところを追ひ、みづから深く討究することを怠るを以て、その描寫は一代は一代よりも自然に遠ざかり行きて、果ては全く變化の妙を缺ける一定不變の典型を生ずるに至る。和歌に傳授の論のやかましくなれる、謠曲が千篇一律の弊に陥れるなど、原因はすなはち同じ。

まづ歌壇を見るに、頼阿の後、二條家も一向に振はず、僅かに義滿の時冷泉の家風を學べるものに、武人今川貞世、入道了俊あり、ついで東福寺の僧正徹、徹書記また同じ流を汲みて一時盛名ありしのみ。概するに寂寥の感を免れざりしが、

應仁の頃武人東常縁なるもの、頼阿の曾孫堯孝の門に學びて、二條家の正流を得たりと稱し、始めて古今傳授を倡道す。そも、和歌の傳授といふことは、敢てこの時に始めて起れるにはあらず、既にやく鎌倉時代の初期、若しくはまた平安末期にありて、その萌芽は見えたるなるが、今常縁がその弟子宗祇法師にその傳を傳ふるに當りて、特に古今傳授とは稱へけるなり。當時文學頽然として衰へ、和歌の道日々に廢れて、師資相承も漸く失はれ、圖書も散佚しゆけば、これ等の弊を防がんが爲には、傳授などいふことを稱へ出でしも、強ち無用のこととしも覺えざれど、それも程度あることにして、かれらがこれによりて故意にその道を神祕にし、自己が糊口のたつきを得んが爲に、恣に牽強附會の辯を設けたるに至りては、斷じて許すべきにあらず。思ふにこれが結果、歌道に志すものをしてその門戸の容易に窺ひ難きを思はしめ、斯道の弘通を妨げて、益、その趣味を少數者間に制限するの非運を招かしめたるは、疑ふべからざる事實なりとす。論より證據、かれ等が尊げに説けるところを見よ、三鳥三木など稱へて、古歌に見えたる語を捕へ來りて、たわいもなき意義を附し、以て傳授と呼

び祕傳と稱ふるのみにして、かりそめにも和歌の大本に及びたるものありや、余輩不幸にしてこれを知らず。この和歌の傳授は宗祇より堂上家たる三條西實隆に傳はり、二人力を協せて二條家風の復興を計れり。實隆より子孫三代相傳へて、後更に武人細川幽齋に移る。たゞ戰國の世、歌道まさに絶えんとして絶えず、縷々絲の如くにして、以て次の江戸時代に及ぶを得たるは、玄旨法印その功なきにあらず。

宗祇法師

更に宗祇に就て少しく説かんか。かれは別に歌道を柴屋庵宗長及び牡丹花宵柏に傳へたり。されど渠はその二弟子と共に、短歌を以て立つものにあらずして、寧ろ連歌を以て有名にして、その人みづからも得意とするところ、これにありてかれにあらざりしは、二條良基と相似たり。而して良基の菟玖波集について、勅を奉じて新撰菟玖波集二十卷を編む。連歌の和歌を離れて一種特立せる文學となり、且つその勢力ありしこと、實にこの時に極まる。宗祇は性ふかく山水を好み、江湖に放浪して、旅次箱根の山中に歿す。蓋し前の和歌の西行、後の俳諧の芭蕉と併せて、自然を心友として、その一生を羈旅に送れる、わが國三大詩

能樂と謠曲

人の一として推重すべく、道こそ變れおの／＼その道にかけて第一位を占めたるも奇といふべし。されど摸倣を事とし、典型に泥める時勢の感化は、宗祇を以てしていまだ全く免るゝを得ず、殊に連歌のものたる、この時に及びてすでに遊戯の境界は離れながら、なほ即席の唱和に興を遣るに過ぎざりしかば、今日に至りても大いなる價值を認められず、従つて宗祇の名も他の二家に比べて遙かに及ばざるものあるは、深く渠の爲に悲しむべし。

室町時代の文學中最も光彩あるは何ぞと問はゞ、誰か言下に謠曲なりと答へざらん。三代義滿の世は足利家の權力が最も伸びたる時にして、また室町時代のうち最も平和なる時なり。されば文學美術もこの頃より漸く向上の運に向ひ、八代義政の時、應仁の亂は起りたれど、北山の金閣を學びて東山に銀閣を築ける將軍の胸中には、金閣の主にも超えて風流三昧の境地あり。いはゆる水墨畫の發達もこの間に遂げられ、香道、茶道起り、蒔繪、陶磁器なども、とり／＼に新機軸を出して、頗る見るべきものあり。この時よ、しかり、義滿の時に起りて義政の時にかけて盛なりし一種の舞曲こそあれ、その舞ぞ能樂にして、その曲ぞや

謠曲の作者

がて謠曲にはあるなる。能樂委しくは散樂の能といふ、散樂は古來神事に用ひられし一種の伎樂にして、義滿殊にこれを喜び、樂師をして田樂、曲舞等の長をも取りてこれを折衷せしめ、以て今日行はるゝ能樂を起せり。之れより先き、禪宗の行はるゝこと漸く盛にして、唐山の文物、來往の僧侶によりて傳へらるゝもの少からざりしが、義滿新に明國と交を修し、彼我の交通頻繁の度を加ふるに及びて、その影響いよ／＼著しく、いつしか繪畫に宋元の水墨が浸潤し來れる如く、文學にもかの國の風は入る。謠曲もまたその一例にして、その歌詞わが國古來の文學を彼此取合せたるものなるは言ふを待たずと雖も、また支那の傳奇雜劇、すなはち元曲に則るところ多かりしは、特筆すべきことなり。

茲に明かならざるは謠曲の作者なり、或は觀阿彌清次、世阿彌(元清)等の名を擧ぐるものありといへども、これらの人々は曲譜をこそ定めたれ、詞藻もその手に成れりとなさんは早計に失すべし。一休、正徹等の禪僧の作として擬せらるるもの二三あり、やゝ信すべき説なるが如きも、これにて確證あるにはあらず。今日に傳はれる謠曲は通常、内外二百番、その外番外のものを一々數へば、その

國家的觀念の缺乏

倍にも及ぶべし。されどこれらは決して一時に成れるにあらず、世を継ぎ時を隔て、徳川氏初世の頃までに漸次量を積みたりとするを以て妥當の見解とすべく、なほその後に至りても辭を修め、句を正せること少からざるべし。されど後なるは前なるを摸して、概ね一樣の形式を脱せざれば、室町時代の形式はおのづからその儘に傳はりて失はるゝことなく、畢竟謠曲はこの時代の所産として、その特色を今に存するものといふべし。

前にも述べぬ、室町幕府の世は諸國の大名に權力ありて、將軍に威なき時なりと。げに日本六十餘州おのゝ獨立して、一小國の姿をなせば、國家を一體とせる社會觀はおのづから存するを得ず、士民は全くその小範圍に跼蹐して、更に眼を大局に放つを忘れたりき。謠曲は實にこの時代思潮を包含す、そのひたすら個人としての個人を描くに力めて、國民としての個人はた國家そのものを閉却せる傾あるは、言を要せずして明かなり。住吉の神が、わが文化の程度を窺はんとて來れる白樂天を追ひかへし、(白樂天)支那の天狗がわが國を計らんとして、却つて佛教の爲に敗れ歸れる(善界)類、これらはいづれも日本は神國なり、

江戸時代との比較

また佛法加護の國なりといへる古來の思想を、この亂離の世にありても國民が失ふことなかりしを示したるものなれども、社會の秩序の紊るゝと共に、かかる國家的觀念も漸くその根を絶たれて、行方も知らに漂ひゆかんとせるは、蔽ふべからざる事實なり。大佛供養、景清における景清はいかに、渠が敵と狙ふは頼朝一人のみ、渠が願は頼朝一人を失はゞ足れりとす、それ以上に源氏を亡ぼして、再び平家の世を見んなどは、庶幾はざりしなり。安宅および攝待にあらはれたる義經はいかに、渠にはその徒黨を糾合して更に覇を天下に稱せん、の志なし、たゞ追窮せられたる鼠の如く、身を隠すべき所もがなと逃げまごふ、小なるかな、謠曲に現はれたる景清や、義經や。

斯くいはゞ論者あるひは言はん、此の如きはその主題たる史的事實の與り知るところにして、これを借りて筆端に上せたる作者の罪を問はんとするは、問はんとするものの誤れるなりと。されど思へ、史實を史實として、一毫片鱗もその眞に遠ざからんことを恐れ、小心翼翼尤も忠實にその事蹟の描寫を試みんとするのみが、方ある詩人の本領なりや。否、謠曲が歴史に拘泥せずして想像を

も加へたる作物なることは、穿鑿を費やさずして明らかなり、従うて曲中の人物も作者の方寸に従ひて自由に左右せらるべき筈なり。下つて江戸時代の戯曲小説を見れば、一の谷嫩軍記に彌平兵衛宗清は敦盛を守りたてたり、平假名盛衰記に樋口次郎兼光は幼主を保育したり、而して共に衰へたる主家を興して、天下を治めしめんとす。されどこれらの行爲はなほ薄弱にして、殊に注意すべき程にもあらざるが、馬琴の作に至つてその傾向は殊に著しく、義経に兵法を授けし鬼界島の俊寛が衷情、滿腔の經綸施すに所なく、去つて琉球に風雲を捲きし八郎爲朝の將略、南朝の復興を計る新田、楠の遺孤が忠心、義膽、老奸、北條を罵倒せし朝比奈三郎が俠勇など、いづれか國家的觀念の存在を證するものにあらざる。翻つて謠曲を見るに、鉢の木、藤榮の類、僅かにこれに准すべしといへども、かれは佐野源左衛門が廉潔によりて再び出世の途を得たりといへる一身の話、これは月若丸が一たび叔父に横領せられし本領を取りかへして、めでたく榮えたりといへる、大きくしても一家の事件に過ぎず。殊に鉢の木の最明寺殿が源左衛門の志を試みんとて、要もなき鎌倉の大事をいひ觸れしめて、

人心の動搖を顧みざるが如きは、國家をも政治をも辨へぬ沙汰にして、沒常識もこゝに至りて極まれりといふべし。

謠曲に現はれたる古代の事件

中世には、平安朝以來の舊思潮と、武家の世となりて起れる新思潮とが合流す、而して文學はこの情勢を反映すとは、既に概觀の章下に述べたるごころにして、謠曲にもまたこの二風潮は確然として存するなり。即ち王朝時代に材を取れるものは、上流の戀愛、和歌贈答の由來など、優にやさしき物語多く、鎌倉時代以後の史實に據れるものは、おのづから勇敢殺伐の氣に滿つ。前者の例として、空蟬、夕顔、葵の上、匂の宮、玉葛、浮舟は源氏物語より、小鹽、井筒、杜若は伊勢物語より、姥捨、求女塚は大和物語より出で、後者の例としては頼政、實盛、巴、七騎落、敦盛、忠度、八島などありて、平家物語、源平盛衰記に出づ。中にも屢、謠曲に引かれたるは、義経と、右二書に見ゆる以外の事件たる曾我兄弟とにて、一は武勇、一は孝行を以て、中世はいふも更なり。下りて江戸時代の文學にも屢、現はれて、讀者を喜ばしむ。太平記時代の史實に至りては極めて少く、僅かに壇風的一篇を見るのみ。支那の故事なども散見して、漢文學尊重の跡を留むといへども、十中の八九

物 謠曲の世話

は平安朝以降鎌倉時代を舞臺とせるものといふを得べし。さて此等の史實は今しも擧げたる例にも見ゆる如く、嚴格なる歴史的事實より生れたるものにあらずして、多くは文學中に現はれたる記述を材料として作爲せるものにして、此の如きものを稱して余輩は假に謠曲の時代物と呼ばんとす。いふまでもなく時代、世話の名稱は後世に至りて起りたるものなれど、これらを外にして残るは謠曲の世話物にして、すなはち當時の社會を其儘に反映せるものなり。中に就きて最も多數を占むるは、離散せる親子の再會、次には敵討なり。當時世の中亂れて政令の行はれざるや、人買ひと名をきくだに恐ろしき人鬼、都の中にさへ出沒して、兒女を誘拐して錢に代ふ。自然居士、隅田川、櫻川、隱岐院など皆この人鬼にかごはかされし子とその親との運命を寫せるものにして、かくて子を失ひし母の氣もすゞろに迷ひ出づるは、三井寺、百萬、柏崎、父の子を尋ぬるは、花月、丹後物狂歌占、繼母に虐待せらるゝ子を實母の悲むは、竹の雪、子の親を尋ぬるは、籠祇王、菫、土車、女の夫を探しあるくは、班女、加茂物狂、水無月、祓夫の女を慕ひ求むるは、舞車なり。これらの中には隅田川、菫の

文學の下向的傾向

如く永へに相見る期なくして幽明處を異にする悲劇に終るもあれど、多くは再會の時を得て歡語を盡すを常とす。男女の中らひよりも親子の情を主とせるは、いま數へたる數の多少にても知り得べく、以て平安朝に比して、人情の推移しゆく所を知るべし。また臣の君を失ひて狂亂せる高野物狂などもあり、望月、放下僧などは即ち父の敵を子が討つ例とす。連歌は上流よりも主として中流に行はれたり、和歌もまたこの時代には武士の文學となりぬ。そも平安朝にありてはわが國の文學は摺紳貴女の専有するところにして、敢てその以下の輩の窺ふを許さざりしに、鎌倉時代に入りて、情勢一變、僧侶のこれに携はるもの多く、且つその後世の中の亂るゝに伴ひて、武士の立身出世は器量のまゝとなり、王侯將相種を問はぬ習となれば、いつまで續く公卿の地位かは、文學もやがてその優柔の手を去りて、中流以下には投じけらし。さはいへ、この時代にありては文學はいまだ全く平民的化せりといふを得ず、一面における貴族的保守の傾向はなほ盛にして、二潮は相混じり相争へり。和歌の道が武士の手に移りながらも、その武士たる東常縁が貴族的に

も古今傳授を稱へ出せるが如きは、その一例にして、謠曲にもまたこの傾向はあり。元來謠曲には、曲論議などいひて歌ふべきところ、單に語るべきところが、謠曲に至りて殊に著しき區別を生ず。歌ふべきところは希臘古代の合唱に似たりともいふべきか、これには到る處に古歌故事などを引用すれば、文學の素養あり、且つ常にこれを耳にし慣れたる輩ならでは、到底その意を解しがたし、これを貴族的の方面とす。語るべきところは近世の演劇の面目を存し、比較的によく俗談平語を用ひて、聞き易く解し易し、これやがて平民的の方面なり。而してこの二要素の對立せるはいふまでもなく元曲に擬して成れるが爲めに、して、これのみにては強ち室町時代の文學が貴族的と平民的との兩面を有する十分なる證左とはなしがたからんも、更にこの謠曲が能樂として演ぜらるゝに當りても、また同じく二つの方面を有したるは深く注意すべき事柄なりとす。すなはち、古歌をよみ込み、故事を引き入れたるもの、しき謠曲が多く、の觀者に解し難かるべきを思つて、別に謠曲の本文を平易に碎ける間の狂

狂言

言なるものをその間に挿めること是なり。

狂言には間の狂言の外に獨立せる狂言もあり。要するにこれは貴族的なる能樂に對して、極めて平民的にして、また滑稽を主とす。即ち多くは罪もなき失策談にて、中にも迂濶なる大名を主人公とせるもの多く、巧に人情の弱點を捕へて誇張過大の脚色、よく人の頤を解かしむるに足る。しかれども、狂言も亦摸倣に摸倣を重ねて千篇一律、一種のフォールス、パントーマイムたるに止まりて、その價值に於ては今日の俄と相距ること遠からず、たゞ愛すべきはその古樸にして品位ある一點なり。

謠曲の宗教思想

謠曲は平安朝の戀物語と鎌倉初期の武勇譚とに富む、これ上來説き盡したるどころなるが、また謠曲の研究者が看過すべからざるは、これらと錯綜して佛教思想の遍滿せることなり。佛教思想はこの時代にありてはあらゆる文學の根柢をなす、一例として、和歌を解釋する爲に古今傳授が唱へたる體用の説を見よ。歌學者はいはく、およそ和歌のものたる、體を以て説けば表面の義のまなれど、用を以て説けば一首の歌も微妙にして甚深、佛法の眞義に徹底せずん

ば止まずと。一見奇異の感なき能はずといへども、古今傳授が實は眞言の灌頂に擬して出でたるものなるを思はゞ、この邊の消息はおのづから明なるべく、かれ等がひたすら和歌の道を以てこれもまた衆生濟度の善巧方便なりと思惟したるもの、所以なきにあらざるを知るべし。翻つて謠曲のことを思ふに、所謂鬘物(戀愛を主とするもの)にまれ、修羅物(武勇を主とするもの)にまれ、はた狂女物(物狂を主とするもの)にまれ、佛教の意を寓することの多きは、想像の外にあり。勿論、一概に佛教とはいへど、うち分けていへば神道のごとも混れり、元來祭神の儀は國民固有の習慣にして、佛教渡來ののちは、これが爲に、やゝ抑へられたるが如きも、なほこれと同化して甚しき壓迫は被らざりしなり。かつや能樂の起原を尋ねれば、祭祀の用として神前に行はれたる古樂を基礎とせる因縁もあり、おのづから神道はまた謠曲に缺くべからざる一要素とはなりけるなり。この神道に關するものの多分は、脇能といへるものの中に收められ、御裳濯(伊勢、賀茂、弓八幡、石清水、大社、出雲、松尾、老松、北野)など、みな神々の靈驗、もしくは社々の縁起を述べたり、その數また決して少しとせず。

來世の解脱

佛教的要素に至りては、謠曲全體がその思想を鼓吹せんが爲に作られたるにあらずやと思はるゝほどにて、その仕組は概ね猛將勇卒の亡靈が、妄執浮びもやらず、中有にさまよひ、賤のをのこと形を現はして、巡錫の途すがらなる名僧智識に遭ひて、處の物語などし、更にありし世のさまに歸りて、歴史的事實を再演し、さて僧侶の供養を得て成佛するが、十中五六を占むる筋なるが如し。平家物語の如きもまた同じく佛教の教理を含めたりといはるれど、彼にありては、たゞ人世は泡沫夢幻の如きもの、修羅道の如きものといふに止まりて、畢竟作者が厭世觀を洩らせるに過ぎず。然るに、謠曲は更に進んで、この矛盾悲惨の境界より解脱して、未來に救はれざるべからずとなすところに、大なる特色あり。將來の光明は必ずしも來世の得脱には限らず、現世の幸運を寫すところにまたこれを見る。得脱は所謂時代物に多く、幸運は所謂世話物に普通のことなり。隅田川、荻萱などは例外として、哀別離苦を寫せるものすらも、後にはめでたく再會するを以て結末とすること既に前に述べたり、この邂逅もまた多くは神佛の冥助によるものとなす。百萬は嗟峨の大念佛のをり、弱法師は天王寺にて、

現世の利益

御伽草子

三井寺、高野物狂、賀茂物狂はその名の如く三井寺、高野山、賀茂にて花月は清水寺にて、柏崎および土車は善光寺にて、丹後物狂は切戸の文殊堂においてするが如し、何の加護ありてこにもあらで、母がふとその子を櫻川にて見つけたる（櫻川）子が飛鳥の里に田植するその母を尋ね出だせる（飛鳥川）が如きは寥寥隻手の指を折るにも足らざるべし。こゝに至りては佛教は單に未來の冥利のみ希ふものにあらずして、現世の幸福をも得るの手段となれりといふを得べし。かく謠曲が佛法のこの世における物質的利益を認めんとせるは一見すれば平安朝の佛教を排して起れる新佛教の傾向に反するが如きも、實は一時佛教的厭世觀によりて蔽はれたる國民の思想が、こゝに至りてまたその固有の樂天主義と相抱合して、光明主義の人生觀を發露せるものに外ならざるべし。謠曲よりも恐らく一步を後れて、戰國時代に大に行はれたる文學に、御伽草子、舞の本、俳諧の三種あり。御伽草子は平易なる短篇小説なり、その主人公としては、小町草子、和泉式部などに平安朝の人物を見、小敦盛、横笛草子などに源平時代の人物を見、木幡狐のせざる草子、猫の草子などに動物類の人格化せるもの

舞の本

を見る。なかんづく名あるは文正の草子、鉢かづきの草子の二篇にして、前者は常陸の國鹽燒の里に住みける文正といへる賤の男の、鹿島大明神に祈りてまうけたる二人の娘を骨子とし、この娘がやんごとなき人の妻となり、父文正も宰相の位に上りて、その家富み榮えけりといふに一篇を結び、後者は鉢を頭にかづける片輪の女の、繼母に悪まれて、世をあぢきなく過し、が遂にその鉢の碎けおちて、金銀財寶あまたその中よりあふれ出で、宰相なる人に嫁ぎてめでたく暮しけりといふを梗概とす。總じて御伽草子の思想は、平安朝の形式を踏襲して、毫も清新の趣を認めがたきもののみなるが、その甚しく通俗化せること、佛教の臭味を帯びたることは、殊に注意を要することなるべし。鉢かづきの結末に、是たゞ長谷觀世音の御利生と聞えける、今に至るまで觀音を信じ申せば、あらはに御利生ありと申し傳へはんべりける、此物語をきく人は常に觀音の名號を十遍づゝ御唱へあるべきものなり、南無大慈大悲觀世音菩薩といへるを讀みては、また如何に佛菩薩に對する歎異の情の著しきかを知るに足らん。舞の本は今日殆どその跡を絶ちたる幸若舞の舞曲なり、いま四十餘種を存す。

俳諧

幸若舞の權輿は詳かならざれども、義政の時すでにその行はれたるは事實なるべし。されど謠曲創作の時代よりは後れて出来、概するにその體裁文章共に謠曲よりも少しく近代の風を帶ぶ。主要の題目はこゝにもまた義經と曾我兄弟とにして、その外なるも神躍り魂飛ぶ勇壯の事蹟を第一とし、針小棒大筆を極めて誇張の言を構へたれば、今日の讀者を以て見れば、かたはらいたきこと多し。思ふに謠曲はその品位甚だ高く、中流以上に行はれたるに反し、舞の本はその趣味や、低く、多くは中流以下に喜ばれたるものと言ふべし。

俳諧は山崎宗鑑、荒木田守武等が始めたものと傳ふ。宗鑑はやゝ宗祇に後れて出でし人、また連歌に志しゝかごも、この道は既に宗祇に至りて絶頂に達し、後進の士の施すに餘地なきを思ひて、轉じて別に滑稽洒落なる新生面を開かんとし、守武もこれに力を合せてその發達を助けたり。所謂俳諧の連歌略して俳諧とのみいふはこの時に起り、また別に連歌の附合を離れて、一句をよみずつる發句も行はれぬ。蓋し連歌の起るや、その初は滑稽を主とし、一種の文學的遊戲としてこれを見、卑しき言語も、俗なる趣味も、何等の束縛もなく、自由自在

平民文學の曙光

に用ひたるところにその特色ありしに、年を経るに従ひて却つてもこの眞面目のものに還りて、法格もやかましく、用辭思想の選擇も嚴かになりしかば、これより連歌は廢れて、嘗て連歌が和歌に對して起りたるが如くに、俳諧の起るありて、之と拮抗對立するに至りしなり。俳諧の起るや、それ此の如し、而して習慣の爲に左右せられず、規則の爲に箝制せられずして、一時の座輿を遣るに成功したりしかど、この時代にありては、なほ言語の上に滑稽を弄するに止まりて、いまだ十分なる發達を見ず、それが戰國の頃起り來れる淨瑠璃と共に、わが文學史を飾るは、更に江戸時代を待たざるべからず、従つてこゝにはたゞその發生の徑路を説くに止めて、その餘はこれを後の全盛期に譲らんとす。

以上述べるところを綜合するに、この時代に入りて文學の傾向は正しく一轉機に遭へりといふを得べし。すなはち保守的、貴族的なる境を去つて、通俗的はた平民的となる。既に前代にありても多少この傾向を見るべく、戰記類もまた然りきといへども、この時代に至りてその趨勢は殊に著しくなり、進んで江戸時代に入り、以てその文華を煥發せしむ。しかもこゝに注意すべきはこの平民

文學發達の因縁にして、これは固より曩に略説せる個人的觀念の勃興と相關聯す。されど此時代の個人的觀念は思想の進歩に伴へるにあらず、即ち平民の自覺に伴ふ積極的現象にあらず、たゞ世の中の亂るゝに伴ひ、一方に於て社會的、國家的觀念の銷磨すると共に、一方に學問の道廢れて貴族的文學を味ふだけの能力なきに至れる結果、訓蒙的、平民的なる文學の起れるのみ、即ち平民的文學の發生はいまだ以て國民思想の向上に依れるものと稱すべからざるを以て、之を以て直に文藝の進歩といはんは當らざるの甚しきもの、實は却つてその退歩を示すものに外ならず、思想の獨立なければ、徒らに古代文學を愉快し、さりとして趣味の素養なければ、古代文學の妙趣も汲むに由なく、ひたすら皮相の摸擬にのみ趁る。室町時代の特産物と稱せらるゝ謠曲の結構の、前後同型一を讀めば他は推すに難からざるも、これが爲にして、伎樂としてたしかに一種幽遠の趣を具へ、ひとかどの見所はありながら、文學としては唯手際よく古來の美辭麗句を補綴したりといへる外、何等大なる特色なきは、いかに悲しき現象ぞや。御伽草子の結構の如きも、また飽くまで類型の中に誇大の辭句を弄

戰國末世

して、固陋の弊濟ふべからず。舞の本の單調なるも、またこれに同じ、要するに江戸時代の曙光はこの時すでに現はれたれども、その本體たる平民文學が眞の平民的思想を發揮せるは、遙かに後の事なり。

室町時代の末期は所謂戰國の時代なり、干戈動くこと頻にして、文學は絶滅の境に瀕す。幽齋死せば古今傳授の絶えんことを恐れて、丹後田邊の城に勅使を遣はして、その圍を解かしめたまひし一事によりて考ふるも、和歌の道、推しては文學に人物の乏しかりし様を想ふに足る。此時に當りて學問文藝に指を染め、以て僅かにその命脈を次の時代に傳へたるは、京師の五山もしくはその他の大寺の僧侶にして、苟くも文學を修せんとする者は、就いてこれに學ばざるべからず。後世寺子屋の稱もこれらの因縁より起れるなり。あゝ國亂れて麻の如く、都も野邊の夕雲雀、落つるを見ては涙流るゝ。しかすがに大名の威權あるきは、城下のみは賑へり、細川氏、三好氏の堺、大内氏の山口、北條氏の小田原の如きはすなはちその代表的なるものにして、京都の文藝の士にして、一時これらの地に難を避けたるものも少からず。

江戸時代

第一章 この時代の概観

文學普及

明治の世を外にしては江戸時代は文化最も發達せる時代なり、殊にその文學は以て王朝の盛時に比すべきのみならず、もしその行はれたる範圍の廣狹を以て論ずれば、王朝何者ぞや、江戸時代の大序は元和偃武なり、元和偃武は戰國の黒幕の落ちたる舞臺にして、正面の主人公は家康なり、信長、秀吉は疾風迅雷的に事を行へり、しかも多く勞して少しく功を收め、めでたき大團圓を見ずして逝けるが、家康は陰忍時の到るを待ち、遂に二人者の理想を實現し得たり。亂れたる世は馬上にしてをさむべし、治まりたる世ををさむるには文によるべしとは、その大方針にして、時世の彼を去りて此に向ふや、すなはち大に文教を奨励せり。家康以後も將軍みなその志を繼ぎたれば、教育幾ばくもなくして都鄙に弘通して、江戸には湯島の聖堂あり、諸藩には藩學あり、庶民の爲には到る

どころ寺子屋の設ありて、書算など日常必須の學術を授くるに至れり。家康また廣く書籍を蒐集して、就中有名なるものを選びて活字に附す。爾來印刷の術俄然として進歩し、民間にも出版の業開け、書籍の普及せること前代にその比を見ず。すでに四民を擧げて、教育足り、知識進めば、従うてまた文藝の盛なるべきは理の當に然るべきことなり。平安朝の文學は美はすなはち美なりといへども、少數なる宮廷貴族の間に限られて、その外に出でず。鎌倉時代には僧侶の一手に専有せらるゝのみにして、いづれの世とても局在的の傾向を免れざりしに、漸くこの時代に入りて、文學は國民全般の玩ぶものとなれり。從來純文學の書籍は僅かに傳寫によりて行はれ、いまだ版本によりて公にせらるゝことはなかりしに、機運一轉、今日草稿を終れば、明日は剗刷に姿を飾りて、天下に流布す。その盛況は日を同じうして語る能はざるなり。

儒教の勃興

入る。そも、佛敎はその渡來ののち漸く勢力を逞しうして、わけて鎌倉時代に至りては國民思想の根柢をさへ動かさし、張りたるものは弛むかゝる全盛の勢に各宗僧侶はおのづから枕を高うやしけん、長夜の眠より覺めいづれば、眼を射るものもはや五彩の瓔珞、七堂の伽藍にあらすして、嘗てはその袖の下にかばひたりし貧兒の、今はこれらを破壊しつゝ、仁王の如く突つ立つを見る。貧兒とは儒敎なり、儒敎はいつしかに佛敎の領土を蹂躪したるなり。この敎やわが國に入ること佛敎よりも早く、しかも佛敎の爲に壓せられて勢を布くに餘地なく、朱子學も、既に鎌倉時代に傳はりて、桑門の間に隠れたりしが、今や時勢の一轉機に乗じて、竦めたる頸を思ふさまに伸ばしけるなり。かくてこの時代に於ける儒者と佛敎との關係を考察するは、また興味あることにして、例へば藤原惺窩は一たび祝髮して妙壽院と稱したりしが、のち豁然その非を悟りて儒道に歸し、林羅山は幼時建仁寺の寺中に寓して、切に僧侶たらんことを勧められしも、固く執りて聽かずして、惺窩の門に入る、山崎闇齋も還俗したる人、不振の敎界爲すなきを知りて、絶藏主の法名と共にこれを抛ちて、朱子學に

儒教の勢力

就き、木下順庵また佛より儒に轉じたるものなりと稱せらる。而してこれら當時の儒者は自己の勢力を張らんが爲に、口を極めて當の敵たる緇衣の徒を罵り、以て從來佛教が久しく扶植し來れる勢力を殺さんと試みたり。

神道の如きも、はやく本地垂迹の説によりて佛教に混和せられ、甚しきは神にして佛に隷屬せる觀あるものなきにあらず、唯一神道の如きは神道の獨立を唱へたりといへども、なほその道を説くに當りて佛教の教理を借るところ多かりき。然るに江戸時代に至りて度會延佳の神勢神道、吉川惟足の視吾道、山崎闇齋の垂加神道などの起るありて、神道を佛教の羈束より解放すると同時に、儒教の領内にこれを拉し來り、新たに宋儒の見によりて、陰陽理氣の説を融和合一す。儒教の文明指導者としての勢力、國民思想の先達としての勢力の佛教を越えて遙かに上にありしは概ねこの類にして、文學の如きもかの國の文學たる漢詩漢文が第一位に置かれたるも、かゝる時代の現象としてさもあるべきことなり。文學批判の見地、また從來は佛教の因果厭世説の上にのみ置かれしが、こゝに至りて全く移りて儒教の修身齊家説を土臺とせるも怪しむに足

佛教の弘通

らざるべし。

既に幕府の方針はいふも更なり、諸藩の藩學何れも儒教を以て學問の根本とし、道德修養の憲法とするの世なり、さらば佛教は一敗地にまみれて全くその勢力を失ひ了せるかといふに、意外にも民間の信仰は前代に劣らず。これ一つには、明僧隱元が新たに黄檗の一宗を傳來し、また運敞は眞言、鳳潭は華嚴の振作者、白隱は禪門中興の祖と仰がるゝなど、名僧智識のそこゝに出世して、清新の氣を注入せるにもよれど、一つには外部よりその存在を一層確實にせし事情あり。何ぞや、幕府が耶蘇教を禁せんが爲に取れる政策是にして、その制によれば國民は上下を舉りて、異教徒にあらざるを表明せんが爲に、いづれの宗派にもあれ、佛教の信徒たることを要したるなり。すなはちこゝに一家あれば必ずその一家の檀那寺を定めざるべからず、檀那寺はまた必ずこの檀家に對して寺受證文を交附せざるべからず、てふ制度にして、八代將軍の治世まで、いはゆる宗門改帳はやがて戸籍簿たるの實を具へぬ。かゝれば宗教として盛なるは佛教をおきて他に及ぶものなく、神道の實力の如きは到底これに較ぶべ

武士道

くもあらず。見來れば、當時社會の中流以下に行はれたる文學に、なほ因果應報または宿命説を骨子としたるもの甚だ多かりし所以も、おのづから釋然として氷解するなるべし。

次に武士道に就て見ん、すでに國民の胸中には千餘年來の歴史を經たる儒佛二教の思想蟠屈して、牢乎として抜くべからず、されどこれらは到底外來の思想にして、いまだわが國民固有の精神とはいひがたし、かくて彼を此に融和打成して始めて一個渾然たる美玉をなす、武士道これなり。そも、武士道の根本精神たるや、國初以來深く國民の胸底に包藏して失はざるもの、戦亂多事の武家時代に際して、明かにその面目を露はすに至りしが、しかもその内容と形式とを整へて、長所短所共に高調に達せるは、江戸時代なり。武士道の信條は何ぞ、一言にして盡せば、内に膽を練り氣を養ひて、外、弓馬、刀劍乃至兵法に達するなり。刀劍は武士の魂なりとて、片時も身邊を離さず、時に殺伐に涉るもまた已むを得ずとす。忠孝はまた武士道の要件なり、國の爲、君の爲には命を抛ちて、鴻毛の輕きに比し、死節を全くするは、かれ等が寤寐に忘れざるところ、然諾の一

心學

言金銀よりも堅く、武士に表裏反覆の行なしと誇る。こゝにおいてか武士の個人としての信用は甚だ重きを加へたれども、また一方を見れば、當時國內諸藩に分れ、一全體としての天下國家の觀念に乏しければ、武士道の觀念も未だ大なる國民的基調の上に立つ能はず、同藩の中にもまた上下階級の差別嚴かにして、平等を缺き、公德心といふが如きものも高からぬ程度にありしも、是非なし。なほ廉潔克己等も武士が特に重んずべき諸徳の中に數へらる。金錢を見ること土芥の如く、私慾の爲に正しき意思を枉ぐるは、許しがたき卑劣の行爲として、社會の制裁は忽ちその頭上に墜ち來れり。

およそ此の如きは當時社會に濶歩してみづから國民道德の指導者を以て任じたる武士の必須の道德にして、いはゆる武士道の綱領なり。然るに之と同時に、その地位武士よりも低しとして輕んぜられ、従つて徳義の制裁も、それほど厳しからざりし町人の間にも、おのづから一種の道德律の發達するを見たり。而してそがこの時代の中葉に於て、一個の教理として現はれしを石田梅巖の心學とす。心學は、武士道がわが國固有の忠孝尚武の精神を基礎とし、之に折衷

するに儒佛二教の特色を以てせるが如く、いはゞ神儒佛の三道を混じて生れたり。唯その武士道と異なるは、これは忠義よりも孝行を主とし、武士道にありては口にするをだに憚りたる金銀財寶のいどゞ重んずべきことを親切に説きたる點にあり。而して心學にも根本的にいへば武士道と其の基くところを一にし、且つ武士道の影響をも受けたれば、町人道にも虚偽騙詐等の不徳を警めたるや言ふを須ひずといへども、しかも町人はおのづから武士と事情を異にする點もありて、空辭義、懸引は商賣の方便として許すの風あり。この商賣上の方便と武士が金錢を輕んずる弊とは、相因果して、取引上の不信用を來し、餘弊今日に及んで未だ全く抜く能はず。

道德主義

かくの如き時代に養はれたる文學の、平安朝と痛くその傾向を異にすべきは、言はでものことなり。平安朝文學の主題は常に感情生活にありしが、江戸時代は意志の活動を中心とす。故にかれには殆ど普通の事柄に過ぎざりし男女の戀愛も、これには稀めて少し。蓋しこの時代にありては、人性本然の欲求に従ひて男女が相愛の情を恣にするが如きは、節操なく、克己心なき懦弱卑劣の行爲

四段の階級

として斥けられ、殊に武士が女性に愛著するが如きは、刀の手前も耻かしき振舞とし、戯曲小説の主人公としても、かゝる輩は同情を寄する所以を知らずとせり。されば小説中に現はれ來る主人公てふ主人公は、いづれも道念堅固の人にして、情慾に對して降服することなく、斷々乎として男兒の行くべき道を行くを常とす。それも其筈。この時代の文學は感情を描くものとせられずして、むしろ勸懲主義を以て道德を俚耳に入り易からしむる善巧方便として之を考へたればなり。従つて武者修行、敵討など勇壯なる事柄は最も多く題材として取扱はれ、各篇到る處活潑勇壯の氣に滿つ。活潑を過ぎて殺伐に走り、勇壯を越えて殘忍に至るも、讀むもの敢て怪まず、却つて手を舉げてこれを歓迎す。平安朝と如何にその趣を異にするかを見よ。

江戸時代の文學を論ずるに當り、儒佛二教の影響を受けたる國民思想の消長を述べたるのみにては、未だ以て全般を盡せりといふを得ず、乃ち更に進んでその社會制度の如何に及ばん。そもくわが國氏によりて族を分ち、上下の別畫然として存せるは太古以來のことにして、平安朝も然り、鎌倉時代また然り、

然るに一朝戦國の世となるに及びて、この階級制度は忽ち碎けて、實力の社會となり、下流の士も器量によりては侯伯の位に上り、臣僕時に主君の地を篡奪して怪ます。徳川幕府の政を始むるや、こゝに見るところあり、天下萬民をしておのゝその生業に安んじ、併せてその家を永遠に持續せしむるの道は、まづこの戦亂時代の餘習を掃蕩して、社會の秩序を回復し、更に階級の制を正しくして、上下その分に安んせしめ、一步を埒外に轉せんとするものあらば、社會をして立所にこれを制止せしむべき方針を取れり、いはゆる士農工商の別はかくして起れり。士農工商別にこれを公卿武士町人百姓と分ち呼ぶも妨げず、すなはちこの場合には前の區別に見えたる商と工とは、町人の中に攝せらるゝこととなる。さてこの四級のうち、公卿は京都に住する最も小範圍の階級なり。この階級は平安朝の古にありては、よく一國文化の源として、勢並ぶものなかりしが、鎌倉幕府の創立以來、位のみは依然として高きに居れども、知識生活共にやうやく下落し、江戸時代に至りては、むしろ無智固陋の標本として嗤笑せられ、一般社會と何等の交渉なくてぞ過ぐる。さらば百姓は如何にといふに、交

文藝に於る
上下の隔離

通不便の世、都會の文化は地方に傳はらず、従つて平和なる自然の裡に起臥せるかれらは、殆ど眼に一丁字なきもの多し、いかでか學問とやらん、文藝とやらんに關知せん。かくて四級のうち、學問文藝に對して比較的多くの交渉を有したるは、武士と町人とを推さざるを得ず、わけても武士は社會的地位高く、江戸の文化は實にこれを中心として生れたり。

階級の制既に嚴しく、町人の子は生れながらにして算盤はじく運命を持ち、武士の子は生涯二本指とさまれば、文藝に對する嗜好もおのづから同じきを得ず、彼と此とは明かに區別を生じて互に相犯すことなかりき。いまその例を具體的に擧げんか、一方士分の家に彈せらるゝは、琴にして、一方町人の門に響くは、三味線、かれに烏鶯の懸引あれば、これに飛車角の魂膽あり、前者の樂むは、土佐狩野の畫、後者の翫ぶは、吾妻錦繪、能狂言と淨瑠璃芝居ともまた同じ相違を示す。もしそれ文學に至りては、漢詩和歌は武士の專有にして、狂歌俳諧戯曲小説などは町人の領分ならずや。かくて相分れたる二者の長短を比較するに、武士は動もすれば古法を株守して、清新の風に乏しき恨あり、町人はこれに反

して歴史習慣を無視し、新たに欲する所を試み得て、新進氣鋭の概ありといへども、その文學の讀者たる町人にして、趣味の下俗を免れざれば、これもまた向上の一路を斷たれたりといふべし。もしこの上流(武士)と下流(町人)と相融和して進みしならんには、その結果は更に一段の光彩を添へたるべきに、不幸にして氷炭相容れず、一旦發展の途に就きし文藝の空しく一處に停滯するの餘儀なかりしは惜みても餘あり。

家系の尊重

階級の制度はまた自ら家系の重んずべきを思はしめたり、貴賤上下の區別といふも、詮じつむれば畢竟家系の尊卑にあらずや。生れて武家と貴ばるゝも町人と卑しめらるゝも、たゞこれ系圖一卷がせさする業、學問も門閥を更へず、徳望も遂に身分を改むるなし、因襲久しうして世を擧つてこれに甘んずるに至る。甘んずるを得るものは寧ろ幸にして、若し然らずして自己の伎倆を頼んで家格の外の出世を望むものは禍なるかな。社會は決して破格の立身を許さざりければなり。かくて國民は何れも家族の一分子に過ぎずして、個人の權利は認められず、吾は自己の吾にあらずして、一家の吾、氏神家の檀那寺はあれど、吾

消極的態度

の求むるがまゝの宗教は與へられず、若しわが身と家との間に利害の衝突を生じたる時は、吾を没して家を立てざるべからず。養子といひ、勘當といふ二つの相反せる習慣も、一に家系の斷絶に備ふる豫防策のみ、要するに階級分れて家系は重く、家系重くして職業世襲の風は成る、これ自然の勢なり。武士の家に生れては、父と同じく弓馬の道を練り、町人は多少の自由を有したれど、なほ醫者の子は、藥味箆筒の前に坐る習にして、祖先嫡々の職業をしも變へて別に野心を貯ふるものあらば、遠からずして破滅の日は到るべしと思へり。従うて上下の風俗、何れもその身分を示して亂れず、竹庵老の慈姑頭、新五左の淺黄裏片はづしは御殿女中の外はなく、俱利伽羅紋の文身は江戸子の齋の者なり。

この職業世襲の風と諸般の道に師資相承を貴ぶ習慣とは、また自ら相伴ふ。生みの父母は身體の親、藝術の師匠は才能の親、かれの血統を重んずるが如く、これが系統をも重んじ、弟子七尺去つて師の影を踏まず、師の教ふるところは斯道の骨髓、祕事口傳の沙汰喧ましく、手本の神聖を瀆すものは、豫め破門の辱を期したりしなり。およそかくの如きは、江戸時代に入りて始めて養はれたる習

慣にはあらず、由來するところ頗る遠しといへども、徳川幕府が消極政策を取るに至りて、殊に甚しきを加へたるはいふまでもなし。つらく思ふにいつの世とても須臾も國民の念頭を去らざるは向上の精神なり、この心をして擅に増長せしめんか、社會の秩序は早晚破壊せられざるべからず、徳川幕府はその己に不利なるを察したり、鎖港の令もこれが爲に出し、耳なれぬ説、見なれぬ物を説き作ることを禁じたるも、これが爲なり。或は季節以外の野菜菓物を市場に送らざれ、着る物は身分に従ひて一尺何分以下たるべしなどまで、法令の正文に載せて、實行を強ひ、以て天下萬民の鬱勃たる志を撓き、以て幕府千年の基礎を堅うせんとせり。

傳承の弊

幕府の消極的方針は、果然國民をしてよく勤儉質素に、各自天命に安んずるの風を養はしむるに効果ありき。されど社會を擧げて因循姑息を極め、著しく文化の進歩を阻碍せる事實は、何とか辯護せん。今他の方向は暫く措き、文藝について見んか。それ藝術の天才は個人的なり、個人的特性の滅却破壊を以て一代の方針とせる時代にありて、いかでか天才の出現を待たん。江戸時代の文學に

携はるものは、他の造形藝術に従事するものと共に、師資相承し、父子相傳して、師たり父たる者が授くる所の粉本は、後進容易にこれを改むるを得ず。しかもその粉本たるや怪奇比なく、極めて常識的實際に遠きものにして、常人の判断に苦しむものあり。譬へば、青苔深く鎖して誌銘読み難きの墓石を摩して、これ何某の墳塋なりと言ひ當つるが如きものにして、地下に眠れる人の誰なるかを教へられたるものならざる以上、正しくこれを指摘せんことの難きと一般、その粉本は秘密的口傳的教授を待ち、始めて之を理解し得る底のものならずや。時代が個性を無^み視して、典型を貴び、模倣を強ひたるの弊もまた甚だしといふべし。

寫 普遍美の描

かくの如く社會は家系を重んじて、個人を無視す、世人が自然となく、人生となく、一に普遍美を主として、個性美に冷淡なりしは、また必至の結果にして、この現象を反映したる江戸時代の文學は、當然世にあり得べしとも思はれざる道徳完全の模範的男女を空想し來りて主人公となし、全然肉あり血ある個人を描くを忘れたり。

御家騒動

進んで文學に用ゐられたる題材を見るに、家系尊重の大事件は、いはゆる御家騒動に如くはなし、御家の重寶紛失し、その保管者がこれを尋ねて東奔西走得ざれば、則ち自殺したりといふは、大に注目し、何故に今日のわれ／＼より見てはむしろ些細なるが如き什器を祕藏して、傳家の重寶となし、一身を賭しても、これが保存に熱中したりしか、他なし、傳家の重寶は、やがて祖先が功名手柄の標象なればなり。そが什器としての價値の如きは、さもあらばあれ、たゞそれ祖先の記念すべき遺物なるが爲に、これを永遠に傳ふるは、子々孫々の忽諾に附すべからざる責務にして、父祖の名と一家の譽とを不朽に遺すと遺さざることは、一にかゝりてこの重寶の保存如何による、換言すれば、名器の亡失は、やがて家名の斷絶にも比すべしと思惟せられたればなり。

時勢の概括

要するにこの時代の文學は、種々の原因の促すありて、その發達よりいふも、普及の程度よりいふも、前に比類なき盛を致せり。されど一たび戰國に遇ひて壞れんとせし階級制度も、徳川幕府の成立と共に更に確立し、文學も階級的となりて、上なるは保守的にして進歩せず、下なるは進歩的なれど趣味の野鄙を免れず、しかも共に時勢に應じて消極的に流れ、系統の傳承に執着して、個性の表現に想到せず、またいはゆる勸善懲惡主義の目的に愜はしめんと力めて、終に文學の高尙なる眞意義に觸るゝことなかりしは、わが國文學の爲に忘るべからざる恨事なり。

時代の區劃

この時代を分ちて、また四期とす。

- 一、啓蒙時代 (二二六〇—二三四〇) 八十年間
- 二、京坂の盛運 (二三四〇—二四〇〇) 六十年間
- 三、文運東遷 (二四〇〇—二四五〇) 五十年間
- 四、江戸の盛運 (二四五〇—二五二八) 七十八年間

この四期のうち、最も特色あるは、京坂の盛運期すなはち所謂元祿時代と江戸の盛運期すなはち所謂文化文政時代(または大御所様時代)となり、啓蒙時代はむしろ京坂盛運前期とも稱すべく、光彩に乏しく、文運東遷時代は、一部は前の元祿時代に接し、一部は後の文化文政時代に屬して、江戸盛運前期ともいふべし。共に以て一期を劃するに足るの要素と價値とに乏しといへども、暫く如上

の區劃を設けて了解記憶に便することとす。

第二章 啓蒙時代

古書の蒐集

戰國以來學問文藝の道衰へて典籍の散逸せること驚くに堪へたり。應仁の亂に博學を以て聞えし一條兼良は家を後にして難を都の外に避く、その桃華坊の文庫は邸内にありて辛うじて兵燹の禍を免れしかど、七百餘合の宮に充ち満ちし藏書は、武士の狼籍にあひて、ごり散らされ、誰ひとり拾はんとするものもなく、空しく路上に横はりしとぞ。そのうち兵亂織豊時代を通じて打續き流民轉蓬、國狀の悲惨この時に過ぎたるはあらず。家康霸權を握りて、干戈こゝに收まり、すなはち大に文教を興すの意あり、可いかな、渠は焦眉の急務として、銳意遺書の蒐集に着手したり。上は内裏仙洞より、下は武士町民の間に至るまで、博搜及ばざるなく、當時褊狹なる公卿が家寶として深く藏庫に秘めたりし書類まで、嚴令の下に呈出せしむ。これらは悉く五山の僧侶に附して筆寫せし

印刷の進歩

め、必要あるものは更にこれを版本となす。

そも、わが國印刷史上の最古の遺物と見るべきものは、奈良朝の古天平寶字八年に百萬塔を作りてその中に藏めたる陀羅尼なるべし。その後平安朝にも經文摺寫の事實なきにあらざりしも、固より屢行はれたりとは見えず。鎌倉時代以後やゝ進歩の度を加へ、法然上人の撰擇集、正平版の論語などを古きものとし、室町時代に及びては所謂五山版の經文詩文集、語錄など多く現はれ、地方にしては、周防の大内氏、上杉氏の臣直江氏等また古書を鑿刻せることあり。されどこれらもなほ兵馬倥傯の際における遽しき事業にして、勘合校定するところ、いまだ五車を充すに及ばざりしに、このたびの家康が擧こそは、徹々たる斯界に一大刷新を行へるものにして、印刷の歴史の上に於ても忘るべからざる功績あり。すなはちかくして行はれたる印刷には、まづ活字を試用す。蓋し文祿征韓の役に傳へたる彼國の法に倣ひて作れるもの、しかも時節いまだ到來せざりけん、銅製なるものは幾ばくもなくして廢れ、木製なるはその後もやや久しく行はれたるが、遂にまた整版に壓倒せられたるんぬ。活字、整版の消長は

ともあれ、爾來印刷は年毎に盛にして、寛永の頃には早く民間にさへ行はれ、庭訓節用の類より、啓蒙訓誨の書などの刊行せらるゝもの續々として相踵ぐ。出版術の進歩は知識の普及を促し、知識の普及はまた出版術の發達を早からしむ、かくて暗黒裡に餘命を保ちし戰國の文化は江戸時代てふ朝暉を迎ふ、この時期を名づけて啓蒙時代といふなり。

この時代の儒學は藤原惺窩が朱熹の學を奉じて名を擧げたるに起れり、惺窩の弟子にして鐵中の錚々たるものを林羅山とす、羅山、惺窩の推薦によりて家康に事へ、政治に參與して畫策するところ少からず、子孫相尋いで幕府の儒官たり。當時、佛教なほ盛にして、儒學は文化の中心たること難かりければ、惺窩、羅山は力を極めて彼が勢力を排撃せんとす。元來、宋儒の學は理論に偏して實行に疎き傾ありしものなるが、をりふし幕府草創の際を去ること遠からず、新法の制定は急中の急務なりければ、林家の如きはその必要に迫られて、古來の制度を考覈し、諸家の傳記を研究す。加ふるに世は戰亂の後を承けて、學問普及せず、萬民高遠の學說に耳を傾くるに堪へざりしかば、在官の儒家も民間の學者

儒學の訓蒙的、實際的傾向

も故らに平明なる實際倫理を説き、易きによりて直ちに世を導き社會を教へんとせり。この方便の爲に梓に上されたる多くの書籍の、いかに通俗を旨としたりしかば、その十中の八九が、諺解、和解等の表題を有するに徴しても知るを得べし。朱子學に對抗して當時に重んぜられしを、中江藤樹が唱出せし王陽明の學派とす、朱子學が談論講學を主としたるに反して、これはひたすら實踐躬行の先にすべきを主張し、徳孤ならず、藤樹はよく四隣を感化して、天下をして近江聖人の名を以て呼ばしむるに至れり。藤樹の高足に熊澤蕃山あり、備前に居り、野中兼山朱子學派の大家として土佐に居る、いづれも藩侯の帷幄に參して、政治に與り、また國俗を化するに力ありしを見れば、幕初時代の儒者が、學者としてその道の蘊奥を極むるよりも、廣く世を裨益せんと庶幾したりしこと察知するに難からず。

歌壇の趨勢

和歌は戰國の時に當りてその道まさに絶えなんごしたりしを、細川幽齋、木下長嘯等のあるありて、僅かに江戸時代に傳ふるを得たり。長嘯は秀吉が室の甥にして、和歌を幽齋に學びて得るところあり、關原の亂起るや、宗家の存亡を餘

處にして、風月に隠れ、柔儒の行一世の誹を免れざりき。堂上の人にして幽齋に道を問へるもの、中院通勝、烏丸光廣等あり。これらの人々は、單に室町以來の風尚をその儘に傳へたりといふのみにして、和歌を以て上流の翫賞に限り、その埒外に出づるを欲せざりしに、ひとり幽齋の門下より起りて、いはゆる地下にして斯道の復興に力めたるものを松永貞徳とす。貞徳の弟子に名士おほく、殊に注意すべきを北村季吟とす。季吟が畢生の心血を瀉ぎしは、古典の註釋にして、就中源氏物語湖月抄枕草紙春曙抄徒然草文段抄など世に歡迎せられ、今も盛に行はる。宜なるかな、人の近世における文學の普及を論じては、その始を貞徳師弟の鼓吹に歸し、同時に、古文學を味ふものの多きに至れる主功を以て季吟が平易親切なる編述に歸せんとすること。たゞその所説はなほ二條當流の舊套に拘泥して、何等自家の發明と稱すべきものなかりしは、惜むべき限なり。蓋し季吟や、その生存の時代や、次の元祿期にも涉り、所謂舊風の殿將として、掉尾の勢を示すものといふべし。

貞徳の俳諧

さりながら江戸時代の文學を通じて、最も光輝ある特色は平民文學の發達に

如くはなし。この一期間についていふも、比較的目ざましきは、和歌にあらず、國文にもあらず、實に俳諧てふ平民文學の進歩なり。貞徳は幽齋に和歌を學びぬ、されど和歌は到底貞徳の長技にあらざれば、従つてその功勞もこゝには存せず。貞徳の貞徳たる所以は、一に古風の俳諧を大成せるにあり。さらばその古風の俳諧とはいかなるものぞ、文學としての眞價は果して賞讃に値すべきものありや。一二の例を見よ、

しをるゝは、なにかあんずの花の色。

花よりも團子ありてや、歸る雁。

前者は掛詞を用ひたる例にして、後者は俗諺を用ひたる例なり。これ等は共に貞徳が常用の手段にして、一見、人の意表に出づるが如きも、畢竟幼稚なる言語の遊戲に過ぎず、未だ評して趣味豊富といひ難く、時には猥雑口に上すべからざるものもあり。思ふに渠が創作の才は門下の秀才にだも及ばず、たゞかくてもなほ渠が俳諧史上の大立物たるを失はざるは、足利氏の世に起りて、未だ正當なる文學的價値を認めらるゝに至らざりしこの文學にしも、始めて法式規

格を定めて、その旗幟を鮮明にし、また大に門人を養ひて、これが弘通に力め、よりて以て自ら期するところを成就せる一點に存せずんばならず、而してその著御傘なん俳諧の爲にはその好運をうち出し、寶槌にして、翻つて從來ひとり平民文學として勢ありし連歌の爲には、永くその頭を押へてその生氣を復すること能はざらしめし鐵槌なりける。

貞徳の門葉

貞徳が俳諧の門葉榮えたるが中に、野々口立圃、松江重頼および安原貞室の三人抜群の稱あり、殊に貞室は

これはくさばかり、花の吉野山。

の如き、自然の感情をありのまゝに詠じたるを以て遙かに同輩と選を異にす。その他も一人には一人の特色なきにあらずといへども、要するに貞門の俳諧は師風を受けて幼稚未熟にして、取るにも足らぬ言葉の掛合などにうき身を窶し、しかもまたみづから規定せるその法格によりて拘束せられたる觀なくんばあらず。

宗因の俳諧

この時に當りて大坂にありて俳諧に新奇の一體を起せるを西山宗因とす。い

はゆる檀林風にして、この派の特徴とするところは、磊落不羈の詩情を洩らすに、殊更に放膽なる修辭法を用ひ、或は佶屈の漢語を喜び、或は屢、古歌謠曲の文句を引き、また好んで法外なる字餘を試みたるにあり。

やがて見よ、棒くらはせん、蕎麥の花。

の如きは、故らに霸氣ある語を弄して、傍ら滑稽の意を寓し、

頭巾寒うして、北に峨々たる青山なし。

といへる類は、漢語と字餘りによりて、適勁の調を得んとせるもの、

古歌に曰く、千歳ぞ見ゆる鏡餅。

初花や、いそぎ候ふほごに、これははや。

などの例は、古句をその儘に利用して、運用の自在に人を驚かさんと欲したるものにあらずや。これらの數句によりても、宗因が才氣縦横、辭藻口を衝いて進めるものなること大略察すべく、その用辭における用意と苦心とはまた頗る諒とすに足るものあり、たゞ内容の清新奇抜がよくこれに伴へり、遺憾ながら首肯するを得ず、要するに俳諧をしてとにかくにかくば

小説らしからぬ小説

力を得るに至らしめしは、古風と檀林風との功によるべし、たゞそのしてこれに止まるべからず、前途はなほ悠久として遼遠なりしなり。小説に移らんか、この時代の小説界は稍賑かなり、これ一は印刷術の進歩へるものなるが、さりとてこの時代に出版せられたるものを以て、悉くこの時代の作物となさんば當らず、さるは室町時代の著作にして、この時代に及びて始めて刊行せられたるもの、決して少からざればなり。次に一般の風潮を観るに、この時代の小説はいまだ純文學として獨立するに至らず、多くはむしろ倫理書、地理書などの小説化せるもの、換言すれば學問、教訓、傳道などの爲に使はれたる一種變體の小説に過ぎず、いな、小説といはんには餘に小説らしからざるもののみといふを得べし。如、儒子の可笑記、山岡元隣の誰が身の上が三教一致の旨を説きたるが如き、清水物語が佛法を揚げて儒教を貶し、祇園物語がこれに對して反駁を試みたるが如き、また鈴木正三の二人比丘尼がひたすらに佛教の厭世觀を述べたるが如きは、傳道の目的より成りたるもの、竹齋物語、色音論の如き、淺井了意の作と稱せらるゝ東海道名所記および江戸名所記の如

恨之助と薄雪

き、中川喜雲の京童の如きは、京、江戸その他の地理を趣味あるやうに教へたるもの、この時代の小説といふべきものは大抵この種類のものなり。されどこの時代にも純粹なる小説なきにあらず、そのうちにも最も有名なるものを探りて二篇を得、恨之助草子と薄雪物語とこれなり。恨之助は慶長頃の作と思はれて、この時代の作物にては最も古きものの一なるべく、男にては葛の恨之助、女にては雪の前を主人公としたる、例の事ふりにたる戀愛小説なり。行文ことさらに絢爛なれど、印象極めて明確ならず、室町時代における釘飯補綴主義を追うて、何等の特色もなく、たゞ追腹切つたる記事などに争ひ難き時代の風尚をあらはすのみ。薄雪物語は寛永の頃世に出でて、園部左衛門と薄雪姫との情事を寫し、姫死してのち左衛門は出家してその菩提を弔ふといふに終る、一篇の徑路甚だ恨之助に似たり。記述の體裁は男女往復の書簡に擬したるものにして、蓋し堀河院の艶詞に源を發せるものなるべく、その時好に投ずることいかばかり大なりけん、新薄雪物語、錦木、小夜衣など、相續ぎて出でて、これに倣ふ。されど薄雪も結構の平板なると共に、文章また情熱の迸れるなく、殊

にさらでもあるべき和漢故事の引用の雑多なるは、いよ／＼讀むものをして
 こちたく厭はしき感を催さしむ。この外に安樂庵策傳が著にして、噺の本の鼻
 祖と稱せらるゝ醒睡笑あり滑稽の古雅にして簡淨なるは遙かに後世の輕口
 に優り、これに次いで昨日は今日の物語、仕方噺、さては狂歌噺、一休噺など風を
 望んで世に現はる。支那の剪燈新話の類に倣へり、と覺しくて、奇事異譚を寫せ
 る淺井了意の御噺婢子、狗張子等もまたこの頃世に出でたり。島原の役以前は
 禁制に遇ひながらも、なほ耶蘇教密かに行はれて、外國語を學ぶ者もありけら
 し、伊曾保物語の翻譯成りて、僅かに萌芽に過ぎず、といへ、早くも西洋文學の
 輸入せられしは特筆して可なり。

小説と共に言はざるべからざるは淨瑠璃なり。淨瑠璃は室町時代に起りて、今
 事新しく始まれるにあらずといへども、この時代に至りて三味線に合せて語
 らるゝやうになり、同時に傀儡を伴ひ舞はしむるやうになれるを注意すべし。
 三味線はもと支那もしくは琉球より傳へたるもの、永祿の頃早くわが國に行
 はれたりといへば、その頃よりこの時代の初に至りて、すでに四五十年を経た

淨瑠璃

歌舞伎。

り。かくて淨瑠璃のこの樂器と併せ用ひらるゝに及びて、共に一時にもてはや
 され、いつしか流派をさへ分つやうになりぬ。されど淨瑠璃文學は思想詞句共
 にむしろその源流たる謠曲、幸若の舞曲または當時盛に行はれたる説經祭文
 等に倣ひて、或は男女の戀愛或は勇士の功業などを仕組みたるに過ぎずして、
 敢て自らその陳腐を覺らず。中にも金平節の如きは、折ふし戰亂の世を距るこ
 と遠からず、人心おのづから殺伐の氣象あるに乗じて、力めて勇壯活潑なるも
 のを脚色し、大夫は鐵棒を以て拍子を取り、意氣軒昂するところに至れば、われ
 を忘れて岩をも木偶の首をもち破りぬといふ。その趣向をいへば、主人公は
 坂田金時の子金平、渡邊綱の子武綱など、いづれも義經、辨慶にもまされる剛の
 者にして、猛獸山賊をとりひしぎ、また地獄廻をなして閻魔惡鬼をも苦しむ、す
 べて肩胛つゝ、ぱり口尖らかし、誇張に誇張して語るをその特色とせり。

淨瑠璃はその地の文と對話とが打混じたるより見ても、謠曲の系統を引ける
 ものなること明かにして、對話のみを以て成れる歌舞伎とはその趣を異にす。
 而して歌舞伎芝居はその發達、淨瑠璃とは交渉なく、慶長の頃、出雲のお國とい

ふ女子によりて、糊められ、佛教鼓吹の爲に行はれし舞謠と狂言とを折衷して成れるものなるべし。とにかく浄瑠璃も歌舞妓もこの時代にありてはなほ極めて幼稚の域にあり、いまだ眼識ある人々の觀賞に値するまでには進歩せざりしなり。

第三章 京坂の盛運

前代の経過

文學は世相の變遷と共に推移して適切にその状態を反映す。室町時代の末に當りて文學に現はれたる社會の最大現象は平民の勃興とふ新事實なり。されどこの平民の勃興は積極的に自覺の力によりて成されたるにあらず、むしろ社會組織の瓦解と共に、おのづから窮屈なる階級的束縛より解放せられて然りしものなること既に論じたる如くなり。原因は如何にもあれ、干戈漸く収まりて、息つく暇もなかりし世の今は昔と過ぐれば、平民の將來は益々希望あり、文學もまたその手によりて新方面の開拓に従事せられんとす。たゞ文化の發達

支那との關係

には自ら順序あり、幕府創立の當初にありては、生活状態の改善即ち物質的文化の促進、もしくは一般知識の弘通に力を盡して、いまだ文藝の上に深く意を注ぐの餘裕を得ず、かくていはゆる啓蒙時代は文學史上特筆すべきものもなく、疾くうち過ぎにけり。

幕府初政の頃最も尊重せられたるは儒學なるが、さりとて平安朝の弘仁前後におけるが如く、これが爲に全然自己を没却して、支那に心酔し了るが如きことはあらざりき。これには理由あり、當時かの國は明末に際して、制度文物あさましくも廢れたる時なり、僧隱元が家綱の招聘に應じて來朝せるも、實は本國の擾亂を避けて、泰平無事なるわが國に就かんと志したるにあらずや、また朱舜水が水戸公に仕へたるに至りては、明朝の遺臣として、その没落を見るに忍びずして來朝したるものなることいよく明白なり。かくてはこれら歸化の人々がその本國の文化につきて説くところ、いかに美しからんとも、聞くものこれを信じて、これに傾倒するを得べきか、いなその然らざるは理の見易きのみにあらずや。かくてわが國民がこの時漸く自己に對する信念を堅うせる

明治との比較

は、なほ道眞の奏請によりて遣唐使を止めたる後の平安朝の情勢に似て、しかも一層その傾向の甚しきものありしならん。當時の形勢はまた大に明治初年とその趣を同じうするものあり、たゞ明治初年の社會は、すでに江戸三百年の雨露にはぐくまれて、何時にても急速の發達に堪ふべきほどの素地を養ひたれども、幕初時代にありては然らず、國民久しく戦亂にうち惱まされて都も野邊も荒れはて、知識の犁鋤は草莽を開くにだになほ多年の努力を要したるなり。またこの時代とても西洋との交通全く無きにあらざりしも、その文明の滔々奔注し來りて、國民を刺戟したること、到底維新以後に及ばず、從つて社會進歩の歩度も、彼にありては此の如くいまだ俄かに着々として進歩ある能はざりしのみ。

五代將軍

さもあらばあれ、今や泰平打續くこと八十年、嘗ては一椀の稗、一掬の水に飢渴を凌ぎたる民も、いつまでかその悲惨の生活をつゞけて止まんや、衣食足りて禮節を知るならひ、かれらがやうやく精神的の娛樂を求むるに至りしは、自然の勢といふべし。江戸時代の幕を切つて落せるは家康にして、江戸時代の學問

文藝をしてその緒に就かしめたるも、また家康なり。然るに五代將軍綱吉に至りては殊に意をこゝに用ひ、管に有司をして獎勵の道を誤らざらしめんと期したるのみならず、またみづから諸侯を招いて經書を講ずること屢なりき。上に威ある時その好むところは下に於いて益甚し、將軍學を嗜むこと人に過ぎて、諸侯みなこれに倣へば、四民また翕然としてこれに向ふこと草の風に靡くが如く、文化日に起り、學藝月に盛なり、これを學問の上より見たるわが元祿時代の大觀となす。

元祿の盛運

江戸幕府施政の方針は飽くまで消極的なり、消極的政策の特色は抑壓と束縛となり、抑壓と束縛とはこれに慣るゝ國民をして意氣銷沈せしめずんば止まず。江戸時代を通じて、社會は未曾有の泰平を享樂しつゝも、終にこの消極政策の爲に市民はその個人的發達を阻害せられたる傾向あり、而して個人的發達に對する妨壓の直ちに文藝の進歩に影響すること大なるは、更めていふまでもなかるべし。幸にも元祿時代にありては、この傾向未だしかく甚しきに及ばず、たゞ三代將軍家光の如きはやく諸侯に宣言して、みづからは生れなが

らにして幕府の主なれば、卿等に對して等輩の禮を執る能はず、今より君臣の儀によるべしとて、急に從來の寛大主義を廢して、萬事窘束の方針を執り、同時に國民に對する幕府の制裁もやうく嚴重を加へたりとはいへ、戰國この方態に増長せる放縱の習慣は一時に抑ふるを得ず、從つてなほ中葉以後の如く國民精神の鬱屈を見ることなかりき。試に思へ、束縛の解放は文藝發達の最大要件なり、されどこれのみを以て如何ともするなきは戰國の歴史に徴して明かなり。また思へ、社會の靜謐は必ずや文藝發達の條件としてこれなかるべからずと雖も、これのみを以て黄金時代の出現を待たんことの難きは、平安朝の古に見て知るべし。さらば文藝の眞の發達は如何にして期すべきか、いはく、これらの二條件が唇齒輔車の關係にある時なり、詳しくいへば、活潑潑地なる自由精神が國民の間に横溢すると同時に、文藝の製作はた鑑賞に都合よき平靜樂易の天地を有する時なるべし。さらばわが元祿時代は實に理想的時期にあらずや。譬喩少しく奇に涉るの嫌なきにあらざれども、魚貝の饒かに産するは河海雨水の交はるところにあり、元祿はこれ桑名の磯にして、その豊富新鮮な

習慣の打破

る文藝は名物時雨蛤なり、木曾の急流を躍り下れる活潑自由の精神が、春の海ひねもすのたりくこせる伊勢の海に注ぐほとり、蠣蛤ぞ湧き出づる。元祿文學の特徴として、まづ擧ぐべきは何れの點にありやといふに、潑刺清新何物にも拘束せられざる自由の精神を以て、舊來のあらゆる慣習を打破し、面目全く一新せる新文學を樹立し得たるにあり、然り、元祿文學は飽くまで建設的にして獨創的なるをその特色とす。翻つて中世の文藝史を按ずるに、國民が自信に乏しきの結果、先人の所説は絶対無上の權威として動かすべくもあらざるものとし、文藝の士が自然と人生とに對するや、またみづからの心眼を放つて直接に觀察し得たるところを筆にせんとは試みず、唯々舊型を守つて及ばざらんことを恐る、感情いづこぞ、個性いづこぞ、あはれ此の如くにして獨自の時代的精神を發現すべき文學に、全く時代を無みせる人情あり、觀察あり、迂愚陋醜習をなして世は空しく過ぎぬ。而して作るものに咎あれば、讀むものにもまた罪ありて、當時の讀書人はかゝる空疎なる作物をしもわが意を得たりとしてこれを歡迎するに躊躇せざりしなり。然るに斯かる暗黒の中世は去つ

て、今や平和の世は来り、ずでにしてまた一世紀に垂んとす、儒學の勃興に伴ひて學問に對する上下の知識は著しく開發せられたり、この新知識を提げ、燃ゆるが如き感情を以て、おのづからなる人生に對すれば、中世の作品の如何に空疎なるよ、元祿の人士が中世の文藝に對して、呆然として驚き、敢然として反抗の聲を擧げたるもの、まことに所以あるを思はずんばあらず。かくてわが元祿時代の文藝はその社會と共に全く中世の醜惡厭ふべき慣習を脱して、花紅に柳緑なり、あるは梅、超然たるは野鶴の如く、あるは牡丹、赫耀たるは美人の如し、實あり、花あり、文壇の榮げにこの一時に極まることぞ見えし。

順庵と益軒

漢學には木下順庵、貝原益軒等、學問博洽を以て聞ゆ。順庵はその學博通普遍を主とし、自己の學識の勝れたるが爲よりも門下に知名の士を出せること多きを以て有名なるは、俳諧における松永貞徳に似たり。益軒の學風は力めて達見を銜ふことをせず、卑近を旨として諄々説いて倦まざるをその特色とす。その著書いづれも平易の國文にて綴り、大和俗訓、家道訓、初學訓、文武訓などのいはゆる十訓の如き、處世の道を説けるもの多く、また通俗的に諸國の地理を示し

仁齋の古學

て行旅の人に便せるものも少らず。かく益軒が童蒙の教訓を目的とせるは、正に國文學界の北村季吟と傾向を同じうすと稱すべき點にして、しかも季吟が古典の註釋にのみ力を盡くしたるの觀あるに反し、益軒は一步進みて窮行實踐の道德を説いて社會を益せんとす。これ二者の等しく啓蒙を期しながら、趣く所を異にせる所以なり。さばれ順庵も益軒もその半世は前代の人にして、爲すところまた前代の風潮の外に出でず、元祿時代の漢學者として大光彩を放てるは別にその人あり、伊藤仁齋及び荻生徂徠これなり。

伊藤仁齋は京都の人、資性濃厚、言ふところ奇を求めずして、おのづから卓抜、眼光よく紙背に徹するの概あり。初め朱子學を學びしが、その老佛の説を交ふること多くして、孔孟の眞面目にあらざるを疑ひ、古意を知るはこれら宋儒の附會を斥けて、直ちに原文に對するに如くはなしとし、遂に自らその神髓を得たりと稱す。仁齋論じていはく、大學は孔子の遺書にあらず、中庸も後人の竄入多し、宇宙第一の書はそれ論語か、孟子これに次ぐと、またいはく、論孟を讀破すれば、即ち孔子その人に接するなり、孟子は論語を敷衍せるもの、論語は教を説き

て道その中に籠り、孟子は道を立て、教その中に存す、さらに論語の理を説けるに對して、五經は實際を論ず、故に學者まづ論語の一書を読み、天地間に磅礴せる自然の理を悟り、然る後五經に鑑みて、これを萬物の實際に應用するを要すと、朱子學は理氣二元の説を立てたれども、仁齋はこれを駁して、二者を分たず、天地間たゞ一元氣の存するのみといひて、生々活動機に應じて動くべしとし、世の道理に著して變ずることを知らざるものを排したり、仁齋がかく一元説を主張して、自ら潑刺たる活氣に鞭ちて勇往直進せるは、固よりその本來の性情の然らしめしなるべしと雖も、また時勢の促せるものあるを忘るべからず、蓋し此の如きは元祿の如き思想自由の時に遇うて始めて見るべくして、秩序紊亂、士民歸向する所を失へる世に現はるべき現象にあらざればなり、或はいふ、仁齋の説は明の吳廷翰の吉齋漫錄と符節を合するものあり、仁齋は竊かに漫錄の説を取りたるものなるべしと、またいふ、清朝に古學を唱へたるもの顧炎武あり、仁齋はこれに據れるにあらざるなきかと、第一の疑は、學説に偶然の契合を認めざらんとする偏狹の言たるを免れず、第二の疑は、二人の時代

は同じと雖も、仁齋が遙かに年長なりしことを知らば、おのづから疑は晴れん、仁齋はわが國に於る唯一の大哲學者にして、その思想深邃、單に薄弱なる理由を以てその偉大を疑はんとすとも、余輩その平生に顧みて、渠が剽竊を敢てするが如き人にあらざるを信する者は、これに與せじ、仁齋と殆ど同時代にして、また朱子學を破したるもの山鹿素行あり、この人もまた時勢の生める學者にして、仁齋の學と何等の直接的關係なくして出でたるものといふべし、たゞ素行の本領は儒學にあらずして、寧ろ兵法にあり、従つて儒學として見れば、整然たる組織を缺くの恨あり、その識見に至りては、二者殆ど相等しきも、一全體の學説として見る時、ひとり仁齋を擧げざるべからざるは、また已むを得ず、仁齋の長子を東涯といふ、學問の該博、修辭の洗鍊、遙かに父の上に出づ、されど一意父の説を祖述するに止まりて、敢て異を樹てず、復古學はこの後繼者ありて、漸く盛を致せり、仁齋處士として生涯仕へず、堀川の塾に帷を下して、門生に臨むに、刺を通ずるもの無慮三千、國別にしてたゞ飛驒、佐渡及び壹岐の人を見ざるのみなりきといふ、東涯ついで同塾に教へ、爾後連綿として明治の世に至る。

徂徠の古文
辭學

堀川塾は京都にあり、別にその頃江戸にありて名聲籍甚せるを、荻生徂徠とし、伊藤父子と對峙して東西の偉觀たり。徂徠は川越侯柳澤吉保の臣、委しくいへば東涯と同時代の人にして、仁齋にはやゝ後れたり。初め朱子學を學びしが、仁齋の古學を唱ふるを見て、感奮發明するところあり、みづから一派を起して朱子學を誹り、併せて仁齋の説をも駁す。徂徠が仁齋に向つて矢を放ちたるは學說の相違によるよりも、寧ろ個人的感情に出づ。嘗て渠、仁齋の説に服して一たび書を致し、仁齋すでに老いて執筆に懶かりしか、他に事情ありてか、これに酬ゆることなかりしかば、徂徠は痛くその自重心を傷けられ、憤懣骨に徹して、事ある毎にその鋒鏘を露はす。仁齋童子問を爲れば、徂徠辨道を作りてこれを駁し、かれに語孟字義論語古義あれば、これに對してわれに辨名論語微あり、大學定本現はれて、大學解は成り、中庸發義に對する中庸解の關係もまたかくの如し。おほよそ此の如きは、徂徠が古學に對する態度にして、滿腹の霸氣抑ふるに由なく、相手を選ばずして論難の矢を放てり。蓋し渠の學は内に蘊蓄する所を頼むよりも、寧ろ異を樹て、世に傲らんとするものにして、言ふところ自

ら沈厚の風に乏し。徂徠謂へらく、仁義忠孝は徳にして道にあらず、道は即ち詩書禮樂なり、故に道は先王の作爲せるものにして、自らに存したるものにあらず、これを知るの道、古辭を學び古文を讀むに越えたるはなし、文は秦漢の前に溯りて、漢魏六朝を參照すべく、詩は須らく範を盛唐以上に探るべし、文は韓退之に至りて衰へ、學は程朱を得て墮落す。此の如くひたすら古文を尊崇して、宋元以後の風を賤し、みたるが、その詩文を論評批判したる一段は、實に明の李(子鱗)王(世貞)の説に負ふところ多かりしなり。これを要するに、徂徠は哲學者たるよりも、經世家に近く、經世家たるよりも操觚者といふを當れり。されば渠が研究の第一眼目は、辭句の穿鑿、形式の工夫にあり、また好んで天下の經綸を云爲すれども、個人の道德に至りては深く問ふ所にあらず、孔孟の書は讀めども、孔孟が倫理の觀念は寧ろ閑却して、顧みざりしなり。門人の俊秀には、太宰春臺、服部南郭あり、二人者の中、經學を修めて身を持する極めて嚴格に、師とも同門とも趣を異にしたるは、春臺、詩文に堪能に、併せて文人風の畫技に長じたるは、南郭なりき。これを始として、護園の門下才人多く、古文辭學の一派大に世

新井白石

に行はれたるが、一身を修むるを以て偏固なる舊式の村學究のこととせる徂徠の子弟に放蕩無頼の徒の多かりしも、また已むを得ざる數なるべし。哲學者たる仁齋は一個のコスモポリタンなり、しかも堅忍不拔、自家獨得の學說を立てたるこの人にして、なほその用ふる文は漢文なるざるを得ず、徂徠が眼中また支那詩文あるのみなりしとせば、文學に對する當時の趨勢トするに難からざるべし。しかはいへど外國文學の操縦の容易ならざるは、屢説けるが如くにして、如何にこれが世に具通したりとはいへ、かの難解の文字の一般に讀み書きせられんことは望むべくもあらず、且や元祿時代は國民自覺の時代にして、摸倣踏襲に甘んせざる意氣の壯あり、此に於てか別に漢學者より出でて國史を究むれば、識見無雙、國文を作れば古今絶倫と稱せらるゝ新井白石を迎へ得たり。白石は略徂徠と時を同じうす、江戸の人、六代七代の將軍に歷仕してその帷幄に參し、當時の施設渠の建白に基くもの多かりきといふ。その頃、羅山の孫鳳岡あり、五代綱吉以來の儒臣として、また一方の勢力たり、白石これと合はずしば、臺閣に議論を戦はして、敵を屈せしむること數度、されど八代

吉宗立つに及びて、すなはち斥けられ、鳳岡更に信任せらる。白石國政を料理するの傍、心を學問の研鑽に潜め、著はす所の書繁忙の間に成ると雖も、積めば等身、多作すれども、駄作なく、觀察の多角的にして、奇警なる、當代學者間にありて一鶴鷄群に擢んずる概あり。その著書の重なるものを數ふれば、南島志、蝦夷志の地理における、采覽異言、西洋紀聞の西歐事情を明らかに、やがてわが國洋學の先鞭を着けたる、本朝軍器考、車輿考、冠服考の有職故實における、東雅、同文通考の國語の性質を説き、漢字假字を論じたる、古史通、讀史餘論の古今の歴史を考究せるが如きあり。中にも古史通は神代史論にして、かの時代の真相を知らんとせば、まづ古語に通曉するの要あり、即ち古意は古語に求むべしと説き、更に神名、地名等は暫く習慣に従ひて書紀に則るも、事實の穿鑿は須らく古事記に仰ぐべしといへる自家の主張を明かにす、古事記傳に先だちて既にこの卓論あり、白石が識見の高邁なること概ねこの類なり。嘗て加賀侯が此書を見て、手を拍つて、本邦第一の書、萬古の疑を決すといへるもの、敢て過褒の讚辭にあらず。讀史餘論は將軍の前に古今の成敗を論じたる稿本にして、頼山陽の日本

白石の傑作

外史は史論としては單にその精粕を嘗めたるものなりとさへ稱せらる。白石の作にして文學上の傑作とすべきものは藩翰譜と折り焚く柴の記となり。藩翰譜は諸侯の系譜を記し、いはゞ乾燥無味なる事蹟を敘したるものなるが、間々勇士奇傑等の逸話なきにあらず、その文意を経ずして成り、毫も斧鑿の痕なく、しかも筆端聲あり、文字の移るに従うて人物もまた活躍し、讀む者をして卷の盡くるを覺えざらしむ。折り焚く柴の記は白石の自傳なり、記すところ藩翰譜の事件の寧ろ單調なるに似ず、頗る變化に富み、文章また優雅を極めたり、たゞその餘りに優雅ならんことを求めて冗漫の弊に陥れるは、余輩をして遂にこの名文をしも棄て、藩翰譜の簡潔遒勁を採らしむる所以なり。ごにかくに白石は一代の文豪なり、その人の本領は政治家たるにあるべし、また學者たるにあるべし、特にその燃犀の史眼は以て古今に獨歩するに足るべしといへども、文章にかけてはまたよく渠と拮抗して相下らざるもの幾人ありや、固より渠の作れるところは、史實の記載を旨として、純文學の域に入るべきものはあらざらん、されど春水の過ぐるごころ、柳櫻枝を交はさずとも流れゆく姿に

大日本史の編修

落花浮絮の趣あり、枯木の如き事件を捕へて、これに氣脈を通じ、萬葉の雲を搖曳せしむるもの、實に白石が靈筆にあらずや、試に問ふ、日本一の敘事文家は誰ぞ、近松門左衛門ならずばわが白石なり。史學の消息を説くに當りて更に一人の特筆大書すべき人あり、水戸公徳川光圀なり。光圀白石に先だちて世に出で、白石よりも遙かに大なる事業を成したり。その史學はひとりこれを以て一身の事業としたるのみならず、後世子孫に涉れる社會的一事業となせり。光圀はまた文學の保護者なり、江戸における古典研究の復興は實にその賜にして、新文學の勃興もまた渠に負ふごころ少からざるが如し。光圀は家康の孫、頼房の第三子なり、兄を超えて家を繼ぐご雖も、自ら安んぜず、史記伯夷傳を讀むに至りて殊にこの感深し、而して史記尊重の念はやがて國史編纂の計畫を促したりと稱す。一説には林春齋の本朝通鑑に皇家の始祖は吳の太伯の後なりとあるを見、世なほ此の如き辭説あるかごてこれを改訂せしめ、みづからまた修史に志したりと傳ふれども、強ちに信すべからず。ごにかくに光圀が叱咤督勵の効空しからずして、彰考館の儒臣はよく

水戸學の大
義名分説

名君の素志を成就せしめたり、近時に至りて大成せる大日本史即ち是なり。光圀は前にも言及せるが如く、明の遺臣朱舜水を聘して賓師とし、程朱の學を奉じて、最も道義を重んじたり。常に家祖家康を尊崇して、その神靈を拜することを忘れざりしが、これと共にまた深く皇室を貴び、毎歲元旦必ずまづ西に向つて宮闕を遙拜したりと傳ふ。されば大日本史の編輯に當りても、大義名分を正しうするを以て最高の使命とし、この立脚地よりして従來の國史に三個の訂正を試みたり、何ぞや、神功皇后を帝王の外にして皇妃傳に收めたるはその一、大友皇子を本紀に加へたるはその二、神器の所在を標證として南朝を正統に立てたるはその三なり。今日より見れば、これらもまた多少の議論なき能はざるべしといへども、渠が旨意の存するところは、則ち諒とすべし。わが身は幕府の近親奉するところは、支那の儒學なり、この境遇の關係を忘れ、この學問の束縛を脱し、國體の存するところを明めて、國民の指南車たらんとせる光圀の志はまた壯なるかな。人或は光圀を以てその宗家に禍せるものとなすものありといへども、此の如きは時運の變遷を思はずして、區々たる一家族の興亡に

萬葉集の註
釋

執着する痴愚の見のみ。光圀また古文を輯めて扶桑拾葉集を編し、法度儀式を類別して禮儀類典を撰す。しかもこの方面における光圀の事業にして一層大なるものを萬葉集の註釋とす。抑、萬葉集は奈良朝文學の精髓にして日本文學の誇なり、しかるに平安朝において既にこれを読み得るもの多からず、まして鎌倉以後は一二の註釋ありと雖も、いはゞ暗中摸索のみ、その書は傳ふれどもその意は解すべからず。古史の闡明を以て己の任とせる光圀は深くこれを遺憾として、これが良註釋を得んことを思ふ。事の成否は註釋者その人を得ると得ざるとによる。江戸に求むれども得ず、乃ち遙かに大坂なる下河邊長流に託す。長流は大和の人、古典を學んで自得するところあり、説くところ舊套を脱して、頗る獨創の見に富み、後年浪華に寓居するに及びて、就いてその門に入るもの甚だ多し。されど性狷介にしてまた疎懶、平生人の刺を通ずるものあれば、好惡意の嚮ふところに任せて、或は座を空うして引き、或は門を閉ぢてこれを謝す。されば水戸家の依囑に應じても、心に快しとする時にあらざれば毫を下さず、事業の進捗はかゝりしから

契沖が古典の學

すして、荏苒歲月は經過し、遂に註釋を果さずして歿す。光圀は屈せず、更にその人を求めて長流が莫逆の友契沖を得、禮を厚うしてこれを聘す。されど契沖は俗事を煩はしとして草廬を出でず、光圀が紙筆を送りて懇に事を囑するに及びて、やう／＼に庵中に筆を執ることを諾す。

阿闍梨契沖は攝津の人、幼にして薙髮して真言宗の僧となり、高野、長谷、室生等に修道苦學し、特に悉曇の學に深き淨嚴律師に學びて得るところあり。然るに契沖の嗜好は佛教の經典よりも寧ろ古典の學に傾けり、一たび悉曇を律師に授けられてより、これをわが國の假名と對照比較して研鑽怠らず、平安朝中葉以降假名の用法の甚しく亂雜になれるを發見し、これを古代の精確なる法式に歸さんとして、立言して曰く、正しき假名を知らんとせば、直ちに古事記、萬葉集、和名抄など、漢字の音を假りたるものによらざるべからず、平假名片假名を用ひたる書は、轉寫の際誤に誤を傳へて到底信を置くに足らず、所謂定家假名遣の如きは就中杜撰を極めたるものなりと。かくて契沖はその生涯を通じて二つの大事業を成就したり、一は歴史的假名遣の復興にして、和字正濫抄はその

戸田茂睡

の具體的發表なり、一は即ち萬葉集の研究にして、光圀が依頼によりて拮据經營、一生の心血を瀝いで成れるもの、實にこれを萬葉代匠記四十卷となす。かくて契沖が絶大の勢力と卓抜の見識とを傾注して、この書を考註するに及びて、古代文學の祕庫は卒如として暗中に闡け、無價の寶珠は燦然として光彩を放つ。わが國の復古の學はこゝに至りて始めてその緒に就けりといふべく、このち幾ばくもなくして國文學の隆々たる盛運を迎へたるも、契沖の功多きに居るは勿論の事なり。

契沖は古典を註釋して一世に裨益したり、この時江戸に戸田茂睡あり、梨本集を著はし、中世以降の歌壇の積弊を痛擊して、みづから和歌革新の先覺者を以て任ず、されど茂睡は創作の才において拔群の譽なく、その論も破壞的にして未だ建設的ならず、例へば、制の詞、主ある詞などいふは師範家が他を排撃せんが爲、はたその道を尊くせんが爲に造り設けたるものに過ぎざる如きを、口を極めて罵るのみ。然れどもこゝにかくにその識見は頗る傾聽するに足るものあり、而して此の如き議論の現はれたるも、方めて舊來の弊風を一掃せんことを

國學興起の
順序

元祿特異の現象といふべし。唯當代の歌壇は未だ直ちにこれに應ずるの準備を有せず、特に注目すべき反響なくして止めり。

仁齋の古學は理論を主として哲學的思索に傾き、徂徠は政治經濟の如き實際的方面に重きを置きしが、共にその說漢學に出で、一般國民に緊切の感をも與へず、以て當代における自覺的精神を満足せしむること能はざりき、また水戸の歴史學は道義を高唱し名分を正しうせんことを力めたりといへども、その初は過去の事實を過去の事實として説くに止まりて、現代と交渉する所なし、契沖が古典の學また然り、渠やもと圓頂緇衣の人、當時の漢學者流の如く強ち佛教に對して敵意を挿むものにあらず、さりて儒教に對しても後の國學者の如き偏見は抱かず、その古文を註するや、論旨極めて公平、中世の學說と俗信とによりて謬まられたるところを正して、遺憾なきに近し、然れども唯夫その從事せるところは専ら古文辭の學にあり、古の假名遣を今に復活せしめんとしたる一點のみは、その學また現在に關係ありといふを得べけれども、遂にその外に及ばず、倫理風俗に關しても過去と現在とが如何に交渉を有するか、そ

の邊の消息に至りては、遂に一言もその口より洩るゝを聞く能はず、然るに元祿は如何なる時代ぞ、現世主義の時代にして、また實に國民自覺の時代なり、國民の眼中にはわが國ありて、外國なし、固よりまた過去よりも現代を重しとす、この有爲の國民にして既に古代の歴史を明らかに、その美醜を發く、何時までか手を空しうして徒らにその花を眺め暮すものぞ、更に進んでその學ぶべきを學び、以てわが理想を現實にし、社會を改善するの資に充てんと志すに至るべきは、當に然るべき發展の順序なり、かくして契沖の後に荷田東應は出づ、次に少しく東應に就て説くべし。

荷田東應

荷田東應は京都の人、幼にして古典の學を好み、制度格式、有職故實、國史國文に精通し、當時、堂上家の人々が頑冥固陋風をなせる間に立ちて、ひとり異色あり、嘗て江戸に出づるや、名聲一時に傳はり、諸侯のその門に遊ぶもの踵を接す、八代將軍また祿を與へて召し抱へんとしたりしが、辭して京に歸る、東應は一個の學者なり、而してその資質においては世の謂はゆる慷慨家なるものに似たり、以爲らく、平安朝以來、歌文の道漸く淫蕩に流れ、今や絶えて上代純樸の風を

存するなし、これを矯むるは我儕の任なりと。乃ち歌を詠するも、取材はおのづから他と異ならざるを得ず、戀愛の歌は一生遂に詠まざりきといふ。東應また世上儒佛の教によつて、道を説くものは多けれども、國民本來の性情に基きてわが國固有の大道を闡明する者なきを慨し、歌うていはく、「ふみ分けよ、倭にはあらぬ漢鳥の跡を見るのみ人の道かは」と、渠が國史を極め、律令を明らめ、古學の盛衰、道義の興廢を研究したるも、一にこの抱負を實現して、再び純樸の古をよび歸し、僞らず飾らざる上代の民を儀表として今日の道徳を律せんとしたるものに外ならず。或はいふ、さはいへど、東應の學は當時大に世に行はれたる仁齋等の古學に負ふところなからずやと、それ或は然らん、されど余輩の見を以てするに、元祿社會の思潮は尤も自由にして、強ひて因果の關係を以て説くべきものにあらず、右に流れては仁齋等が古學の提唱となり、左に流れては東應が國學の建設となる、東西南北、越く所に隨ひて潮は高鳴れり、東應と契沖との關係は余輩固よりこれを否定せず、或は仁齋等の學に暗示を得たることもこれあらん、されどこれらの交渉に重きを置くは、未だ深くこの時代の世相

平民文學の大觀

に通曉せるものと謂ふべからず。

以上は元祿時代における學問方面の觀察なり、これより去つて純文學の方面に眼を轉せしめよ。總じて江戸時代に特異なる現象は、その文學が社會の上下を通じて廣く行はれたる點にあり、されどその廣く行はれたりといふは、同一の文學が貴賤に通じて行はれたる意味にあらずして、何れの社會にもこれに適應すべき文學あり、換言すれば各種の文學はその種類に従ひて各、その勢力範圍を有したる意味なり。而してその上流に行はれたるものは比較的舊習を墨守し、中流以下の文學はこれを打破す、中流以下の文學、これを稱して平民文學といふ。平民文學の發展は實にわが江戸時代の壯觀にして、かゝる平民文學が盛運に際會せしは、一にこれに携はるものが、あらゆる從來の束縛を離れて、最も自由にその所信を發表したるによらずんばあらず。而して江戸時代の中にても現代を謳歌すること最も盛なる元祿時代が最もこの種の作家に富めりしは自然の勢のみ。かくて和歌を超えて俳諧行はれ、古風なる物語廢れて浮世草紙興り、謠曲漸く下火になりて淨瑠璃大に人氣に投ず。

芭蕉の正風

革新の旗を翻して天下の俳風を一變したりしは松尾桃青なり、桃青また芭蕉と號す、伊賀上野の人、初めその地の城代藤堂氏に仕へしが、のち世事と主家とを抛ちて専ら風流三昧に入る。その俳諧の經歷を尋ぬれば、まづ京に出て、北村季吟の門に古風を學び、また流行を追うて檀林風を弄ぶ。芭蕉もとより學才あり、詩にありては白樂天の平易、寒山子の禪機を喜び、わけて李杜の風格を慕ひて、桃青の稱も李白と相對せしめんが爲なりと傳ふ。わが國にては最も西行に私淑して、その山家集によりて正風の眼は開けたりといふ。旅行の癖もまたこの自然詩人に負ふところ多く、後年江戸に定住の後も屢道祖神にそゝのかされて天外放浪の客となる。げにも抖擻行脚は芭蕉が生涯を通じて變らざる嗜好にして、諸國の名所舊跡にして渠の詩囊に入らざるもの少し。かゝる豊富なる經驗をもつて従來の俳諧に臨めば、造化の隱微を究むべき詩の本義を没却して言語の遊戲に耽るもの比々然らざるなし。かゝる玩具の如き遊戯文學の舊形式によりて鬱勃たる新詩人の感情を盛らんとすれば、茫然自失せざらんと欲するも得ず。李杜、西行の詩歌は流石に宇宙の玄理に味到して千載の後

なほ讀む者をしてその錦心繡腸を思はしむ。されど國異なれば言語同じからず、星移れば人情もまた變ず、かれらが詩は、その形と心と共に美は即ち美なりといへども、直ちに今日に用ひ難し、さりながら詩に貴ぶべきはその思想にして、言語にあらず、月をだに忘れずば指自ら指さん、これぞ芭蕉が根本の主張にして、用語は大體に於て現代を標準とすれども、取材は月雪花紅葉とも限らず、見るもの聞くものにつけて感興の浮ぶがまゝを打出し、先哲の跡を繼がずしてその意を見る。さても

古池や蛙飛び込む水の音

の一首、忽然響をなしてこゝに悟脱の境に入れりと叫ぶ。然り、この句詩として
の價値は餘り高しとも思はれずと雖も、芭蕉が經歷の上より見れば、則ち無限の妙趣あり、蓋し今日まで渠が費せる慘澹たる苦心は皆たこの境に臨んで
すなはち應ずる一味の妙諦を得んが爲に外ならず、而して中心の感情は本、技
巧の修飾は未たるべしといへる年來の所説は、こゝに至りて動かすべからざる
鐵則となりければけり。芭蕉の句、壯より老に及びて三たび變化す、漢語を用

芭蕉と鬼貫

ふること多くして、絢爛の詞句を喜べるはその初なり、内容外形併せて清新ならんことを力めたるはその中なり、切磋琢磨の功を終へて、成るところ却つて平易に、一種言ふべからざる幽玄の調を帯ぶるに至れるはその終なり、たゞ一たび古池に得たる信仰は何時までも變せず、遂に俳諧をして盛唐の詩、西行の和歌と比較して遜色なきに至らしむ、翁もまた偉なるかな。

芭蕉はその句を吐くに當りて敢て推敲を怠るものにあらずと雖も、興に乗じて詠出するをその本懐とす、玉石混淆はこの種の詩人に免るべからざる通弊にして、吾人その例を西行に見たり、芭蕉今はた此の如く、或は松島の勝景に對して一句を吐かざるが如き、或は道端の權は馬に喰はれけりなど、時流には推稱せられながら、宛としてこれ道學者的口吻、純文學としては寧ろ價高からざるものあるが如き、是と非と、巧と拙と、集を通じて相半ばす、しかもその巧妙なるものに就て見れば、細緻なるものあり、放膽なるものあり、塵を拾ひて玉に化し、或は曄麗に、或は豪壯に、和易また冲澹、鶯や、餅に糞する縁のさき。

花の雲、鐘は上野か淺草か。

山吹や、宇治の焙爐のほふ時。

荒海や、佐渡に横たふ天の川。

名月や、池をめぐりて夜もすがら。

無残やな、兜の下のきりくす。

數句未だ以て芭蕉の全面目を窺ふに足らずといへども、山川の景が行くに從ひて移るが如く、芭蕉の感興も物に應じ時に觸れて變化窮りなし、而してその抱擁力の大きるところ、やがて大詩人の面目にあらずや、元祿の時天下の俳士雲の如く、しかも芭蕉ひとり牛耳を執りて、濟々たる多士みな甘んじてその膝下に屈服せしもの、決して偶然にあらざるなり、芭蕉一たび去つて其角、嵐雪以下の輩各、異を樹て黨を結びて論難攻撃し、俳諧を口にする者は日に月に増ししかども、その道はすなはち衰へぬ、芭蕉と同時代に攝津伊丹に上島鬼貫あり、またよく舊套を脱して自然に歸り、趣味を重んずること蕉風と頗る相似たり、たゞこの人や、進んでその流を布くことを思はず、獨りみづから清うして樂め

不易流行

ば、名聲彼に如かずといへども、また一代の傑物たるを失はず。かくて東に芭蕉あり、西に鬼貫を生める。元祿の風潮はまた推するに難からざるなり。芭蕉の道を立て、門下を率ゐるに當りてや、自ら箴言とする所あり、不易流行といひ、またさびしをりといふもの即ち是なり。不易流行とは何ぞや、不易とは萬古不易の美の謂なり、詩を作らんほどの者は、永劫不壞の美を補ふことを要す。流行とは時を逐うて推移する風潮の謂なり、われらは一方に於て不變の美を擱むことを忘れざると共に、一方に於てまた常に隨時變遷する變化の美を逸すべからず、古人の言ひふるしたる句境を株守して變通することを知らざる如きは、わが黨のことにあらずと。例へば山川の景を敍し、賢人義士を讃するが如きは、不易の領分にして、折ふしの人事風俗を歌ふが如きは、流行の範圍にあらずや、前者は他くまで純正にして温雅なるを特色とし、後者は思想の珍らしく、用語の新しきにもをかしみは存せん。畢竟芭蕉はこの宣言によりて一面その純美に憧憬れし古典派の詩人たるを明かにすると同時に、一面また匆忙なる世態の波に漂ふ元祿一般の思潮に同化したるを告白するものといふ

さびしをり

べきか。

さらばさびしをりとは如何。寂は句の色に於ていひ、寂は句の姿に於ていふ、また別に細みといふことあり、これは句の心に於ていふ、何れも相扶けて幽寂冲澹の趣を得しむ、俳諧の道に遊ぶもの、この三つの趣を解せずんば、作るどころ或は豔冶に過ぎ、或は輕浮に流れて眞の妙處には詣り難かるべしとなり。かく芭蕉が寂靜の境地を力説せるは、その人匆忙の社會に生活しながら、また超然として一步これより出でたる所ありしを説明して餘ありといふべし。抑、俳句はわが國文學の中その形式最も小なるものにして、複雑の思想乃至時間の經過を寫すが如きは、三句十七字の能くし得べきにあらず、従うて個性美よりも普遍美、人事美よりも自然美、活動よりも寂靜を主とすべきは、必然的の約束なり。芭蕉以前既にこの傾向は顯著なりしが、芭蕉に至りて特にその然るを見る。然り、芭蕉は流行の強ちに排すべからざるを説けど、重んずるところは到底不易にあり、寂、葉、細みといふも、畢竟同一点に歸着せん。思ふに此の如きは芭蕉本來の性情によるものにして、その山川に對する憧憬の如きも極めて自然的の

ものなるべきが、更に一考すれば佛頂禪師に參して獲得せる宗教的信仰にもよることなるべし。要するに正風の體たる、幽玄にして枯淡、流俗を超越して遠く西行の和歌、雪舟の墨畫に接す。この點は實に渠が元祿文學の平民的風潮と睽離する所以にして、また實に渠が生きたる時代の詩人たるよりも古風の詩人を以て目せらるゝ所以なり。それ此の如し、かくて芭蕉の寂靜と枯淡とは社會と風馬牛、その眞意を得たりと稱するものも實はその眞を得ず。元祿平民の大多數は寧ろこれに對して興會を感せず、更に去つて自己の社會を描ける娑婆臭き文學を要求せり、この要求に應じて西鶴と近松とは出でたり。

町人の勢力

げに元祿時代は芭蕉の如き消極的文學を喜ぶべき時代にはあらざりけり、世の中は靜謐にして、生活の程度は著しく進みぬ、わけても平民の勢力目ざましきものありて、かれらの中には、折ふし交通の道開け、土木建築の業興れるに乗じて、一攫鉅萬の富を得たる俄分限も少からず。慶長の角倉了意が保津川富士川の改修こそ今は昔の物語なれど、明暦の江戸の大火に木曾の木材を買占め、その後また宇治川を修して富貴功名兩つながら收め得たる河村瑞賢は元祿

のはじめに未だ死せず、江戸には紀文、奈良茂等あり、紀文は郷土の名産紀州蜜柑を江戸に上せて巨利を博し、東叡山根本中堂の造營を請負うて得る所はた如何ばかりなりけん、本所に廣大の邸宅を構へて、客を迎ふる毎に席を新にし、數人の疊屋日々手を休むるに暇なかりきといふ。京の中村内藏助銀座として豪富に誇り、大坂には娼家茨木屋幸齋ありて家作の結構宮殿も及ばず、淀屋辰五郎は一萬坪の地所と一萬人に近き奴婢とをわが者として王侯の費に比す。江戸の石川六兵衛の妻が清水の舞臺に京の難波屋十右衛門の妻と衣裳競をなして、模様は南天の實に累々たる珊瑚珠を列ねたりといふも、當年の榮華を偲ばしむる好話柄ならずや。然れども財寶限あり、虛榮の心未だ消えざるに、内證まづ傾き、分外の榮耀沙汰の限りごと、その財産を幕府に沒收せらるゝものも二三のみにあらず。これら町人の夢より覺めての悲哀の境涯はまた天下の同情を引くに足るものなきにあらざりしかど、とにかくに當時の町人はまた元の町人にあらず、武士はその名のみこそ嚴めしけれ、實力に於ては天下は既に平民の天下なり。思へ、國內久しく靜穩にして、風雨順を違へず、米價頻に下落

すれば先づ手許の狂ひ來るものは米を祿なる武士の外はあらず、こゝに至つてか金錢を土芥の如く見たりし戦國武士の意氣は何時しか去つて、苦しみ時は二本投げ出しても町人様に才覺を頼まざるを得ざるに至る、さりては町人も偉くなれるものかな。されば江戸には旗本奴に反抗して、幡隨院長兵衛、唐犬權兵衛等の町奴の起るあり、然諾の一言に男一匹かけて、弱きを扶けて強きを挫く面魂さても頼もしく、上方の文學にも、その忠臣藏に素町人を黠出して、天川屋儀平は男でござると氣を吐かしむ、わけて大坂は、秀吉の築城このかた漸く堺の富を吸収して、東西往返の要津となり、出で入る船の影港の口を埋め、江戸を政治の本源地にしてまた武士の都とすれば、こゝは商業の中心地にして町人の都、げにや全國の相場を支配するは大坂堂島の米市場にして、こゝが日本の臺所とはよくぞいひし。

現代の賞讃

試に元祿時代に於ける國民の心理を解剖せんか、如何に余輩明治の國民と感懐を同じうするよ。余輩は今日古老が舊幕時代の状態を語るを聞く時、一面惻隱の情禁じ難きものあると共に、一面この曠古未曾有の盛代に生れて、隆々た

る帝業を賛し、思想は自由に才に任せては驥足をも延ばし得るを思つて、衷心言ふべからざる愉快を感ぜざるを得ず、誰かまた今に至りて戀々として維新以前の國情に歸らんことを冀ふものぞ。元祿平民の心理もまた必ずや此の如きものありしならん、おのれらが鼓腹擊壤せる現下の國情と幕府初政の時もしくは戦國の末に比するに、殆ど夢か現かを疑はんとするものあるべければなり。もしそれ百般の文明の程度に至りては、貞享、元祿と元和、寛永との差は猶ほ明治四十年の文久慶應に於けるに同じ、元祿の國民はわれらと共に自ら眼を睜りてその長足の進歩に驚くと同時に、現にかゝる歎美すべき社會の一分子として生存し、活動することを無上の誇りしたりしや、言ふを須ひず。而して當時の町人がわけても誇りせるは所謂三津の繁榮なり、よくもあらぬ例ながら、役者評判記難波入江船に曰く、天地人の三才に人ほどたつときはなし、中にもお江戸は武士所、都は女の艶所、大坂は町人所、人情風よき所、頼むというてひかぬ所、きかぬと云うて死ぬる所、萬大腹中な寛濶所、麻につるゝ蓬つむ女までも心のだてな色所、そなはつて下卑ぬ所云々、以て一斑を知るべし。

浮世繪と浮世草紙

斯く現代を謳歌するの時世なれば、元祿時代には殆ど古代に對する憧憬の影を認め難し、その口にする所も一より十まで現實世界に限れり、されば當時の小説にも化物や幽霊が出でざるにはあらねど、謡曲に現はるゝ幽霊の如きものにあらずして、寧ろ人間らしき臆病なる化物となりぬ。また浮世といふ當時の流行語あり、これは當世風といふ意味にして、なほ平安朝に今様といふが如し、浮世笠、浮世囊、浮世楊枝、さては浮世髻など、元祿時代は浮世ならでは夜も日も經たず、同じ格にて浮世繪と浮世草紙とは出づ。浮世繪は當世の風俗を誇りやかに色美しく寫し出して、専ら中流以下の玩弄に供したるもの、菱川師宣、鳥居清信、宮川長春等最も名あり、浮世草紙は一種の寫實小説にして、從來の假名草紙に對して起れるもの、これを論ずるは即ち井原西鶴を論ずるなり。

井原西鶴

井原西鶴は大坂の人なり、俳諧を檀林派の祖西山宗因に學びて、その高足と評せられしが、繁華なる都會に育ちし身の目に觸れ心を動かすものは山川の自然にあらずして、變轉極なき人事の現象にあり、しかも西鶴もまた芭蕉の如く幾春秋を羈旅に費し、ことは、その小説及び一目玉鋒等によりて明かなれど、

浮世に氣遠き月花の眺はその性の嚮ふ所にあらず、所詮その對象は人情にあり、風俗にあり、殊に諸國遊里の状態を探るを以てその旅行の大目的とす。かくてその觀察する所は到底俳諧の如き小詩形に盛ることを得ざれば、西鶴は四十一歳の年を期して俳人より轉じて小説家となれり、その處女作は即ち天和二年に出でたる好色一代男にして、この書一たび梓に上るや、讀書界は色めき立ちぬ、蓋し一代の民衆が久しく心に期待せしところは、この作によりて漸く現實にせられたるが爲にして、西鶴の名はこの劃期的の小説によつて一時に高く、其角の如きもこれに擬して吉原五十四君を著はすに至れり。かくて一代男に始まりたる好色本は爾來打續きて書き續けられ、巧に三都その他の遊廓の様を寫して、一作毎に洛陽の紙價を高からしめしが、機を見るに敏なる西鶴は、喝采の聲未だ收まらざるに先だちて、局面一轉、忽ち武士を題目とせる武道傳來記等を出す。されどこれらは固より町人の謳歌者たる西鶴が得意の壇場にあらず、更に再び歸りて町人社會を捕へ、その筆もまた漸く圓熟の境に入りししが如し、日本永代藏、胸算用などはこの期に於ける雄篇とす。なほ西鶴には

西鶴の思想

この外に珍事異聞を集めたる因果物語等の類もあれど、西鶴の西鶴たる所は前の好色本と後の町人小説とにあること言ふまでもなし。一代男といひ、一代女といひ、一見すれば何れも首尾一貫せる主人公ありて、情事の外なきその淫蕩の生活を寫して餘念なきものに似たり、若し果して西鶴にして斯る現世的快樂を寫すのみを以て能事とし、社會の制裁をも無視してまで町人の嗜好に媚びたるものなりとせば、その心事の賤劣にして理想の低き唾棄するに堪へたるべし。されど余輩を以て見るに、西鶴の小説は事件の進行も、人物の性格も、豫め這般の腹案あるにあらず、いはゞ今の新聞紙の三面記事に髣髴たる切れぐの短篇を彼此補綴せるが如きもの多く、一篇の主人公さへそれと明かに定め難し。更にその筆にする所を見れば、伊勢源氏の一節を今様に譯出せる如きものあり、一代男の如きは全體の着想に於てまた源氏に負ふ所ありといふを得べけれども、西鶴の西鶴たる本領は遂にその極端なる寫實にあり。西鶴の觀察や甚だ奇警なり、その三都の風俗を描くや、紅紫眼を射る表面の事象を描き盡くすと共に、文明の裏必ずまた弱點潛み罪惡隠るゝ所

西鶴の世相

以を抉出して餘す所なきは、筆路の簡淨なると相俟ちて、眞に古今獨歩と謂ひつべし。たゞ外に觀ること多きもの、必ず内に察すること少き習、西鶴の觀察力は此の如く精緻は精緻なりと雖も、その想像力に至りては乏しきの恨あり、故にさばかり通曉したる遊里の様も、實際の見聞を離れては一語だも下す能はず、一旦經驗せる所を寫し盡しては、これを再びするに重複の嫌あり、みづから空想によつて生まんとすれば、想涸れ筆蹙まる。一代男に比べて二代男が劣り、二代男に比べて三代男が更に下れるはこれが爲なるのみ。しかも西鶴は自らよく知れるものなり、その好色物より轉じて武家物、町人物に移れるは、時勢を見るに敏なるの致す所なるべしと雖も、そも／＼またその弱點を自覺せるによらずんばあらず。

西鶴の作中、その壯年時代の生活をさながらに寫せるものは前の好色物にして、晩年のそれを描けるは後の町人物なり、而してこの生活の過程はひとり西鶴に特有なるにあらずして、當時一般の人に普通のことといふべし。青春血躍りては、短き世に樂むべきもの色と酒とし、さつさ押せ／＼と島原新町さては

吉原に駕籠を飛ばせて、歡樂の盃を飲み干せど、中年以後影瘦する己が姿を顧みては、流石に秋風に身をすぼめざるを得ず、昨の遊蕩兒は今の世間男と化して、勤儉貯蓄を口にし、人間萬事金の世の中と悟り、ますもをかからずや、斯くてもなほ西鶴は一個の快樂的詩人たるを失はず、時に榮華の夢と消え易きを聊つこともあれど、由來佛教的厭世思想の屢、わが國民の性情に浸みんとして、しかも浸み能はざると一般、これら悲愁の雲はやがて跡方もなく吹き拂はれて、樂天的なる西鶴本來の面目は暴露せらる。人は働きて得る日に働くがよし、而して老年の隠居を樂めよといへる、後期の西鶴の小説の思想は、西鶴自身の人生觀にして、また當時一般世間人の人生觀なり。

兩雄並び立たずと雖も名家時に相率ゐて起るとかや、西鶴を結べる筆を以て近松に續がざるべからざる元祿文學は眞に國文學史上の偉觀とすべきなり。

近松門左衛門、巢林子と號す、その生國は何處なりけん、異説並び存してそれと定かならず、京に出で、搦紳一條家に仕へて位階をさへ授けられたり、傳へいふ、近松はじめ西鶴に學ぶと、この事にはかに信すべからず、されど元祿は個性

近松門左衛門

時代物と世話物

尊重の時代なり、豈に徒らに人の精粕を嘗めて止むべけんや、加之自家を知るものは自家に如かず、近松一たび一條家を去りて、浪人して都萬大夫座の爲に歌舞妓の脚本を作りしが、これも面白からざりしか、更に轉じて宇治加賀掾、井上播磨掾等の爲に淨瑠璃を作る、時に貞享二年、大坂の淨瑠璃大夫に竹本義大夫(筑後掾)といふものあり、道頓堀に竹本座を立つ、近松京を後にして大坂に下りてこれと相結び、爾後専らその座附作者として相續いで新作を出す、義大夫もとより美音梁塵を動かすもの、近松が靈筆はこの妙手を俟ちていよ／＼發揮せられ、當時難波第一の名物といへば、何はあれ竹本座の義大夫が淨瑠璃よと世にもてはやされ、外題の變りめ毎に市民は開場遅しとおしかけつめかけ、酔へるが如く狂へるが如くなりきとぞ。

そも／＼淨瑠璃には時代物、世話物の二類あり、時代物はその舞臺を過去に取り、これに反して世話物は現在の出來事を仕組めり、小野お通が十二段草子以來、淨瑠璃は概ね時代物なりしが、元祿前後の風潮に促されて、世話物は出で來たるなり、されど當時にありては世話物は二番目物として餘興的に演せらる

るに過ぎずして、近松が全力を盡し、もやはり時代物にして世話物にはあらず。即ちその作について計算するに、彼の八に對して此は僅かに二の比例のみ。今日になりては近松が世話物はわが國文壇隨一の名品と仰がれ、そのシェークスピアと併稱せらるゝ所以もまた主として世話物の爲とせらるれど、元祿時代の人々は國姓爺合戦、曾我稽山に寢食を忘るゝことをこそ知れ、いまだ曾根崎心中、天の網島にしかく不朽の價值あることを考へざりしなり。此の如きは現在を生命とするこの時代にありても、鑑賞界が全然因習の見方より脱すること能はざりしを證明するものといふべきが如し、しかも一步進んでその時代物の内容を檢するに至つては、やがてまた元祿時代の元祿時代たる所以を知るべし。

時代物の性質

時代物は世界を過去の史實に取るといふ、されどこゝに所謂過去は普通の過去と少しくその趣を異にす、名をのみ聞けば嚴めしき武士も一ト皮むけば當世の素町人、義經といふは大盡、辨慶といふは幫間、曾我兄弟は廓あらしの道樂息子にあらずや。されば史實の正否などいふこちたき事はさておき、言語も全く當世慣用のものにして、禮儀式正しかるべき武士のことばも無下に卑しく、さながら大坂商人が奉公人に對する口吻と選ぶところなし。此の如きは現在を以て最高位に置ける時代としてさもあるべき現象にして、近松が故意にかかる時代錯誤を敢てせりとなさんよりも、近松もまた時代の子にして、不知不識こゝに出でたるものといふべきか。

所謂心中物

さて世話物は目前の事件を捕へてこれを種にせるものなり、中にはやゝ時代の溯れるものあれど、多くは其頃大坂または近在に起れる出來事を、眼もくるめくばかり早く仕組み、操にかけたものにして、何よりもまづ迅速を以て世人の喝采を博せんとしたるなり。その重なる題目はいふまでもなく男女の心中にして、世話物の中より心中の一項を除き去らば、剩すところ幾何。蓋し當時淫逸風をなし、駢落心中の病的現象到るところにありて、明け暮れの茶飲話その沙汰ならぬはなし。近松この社會の風潮に乗じて、靈妙の筆をこれに着くるに、言々同情あり、句々珠玉を聯ねしかば、果して世に歡迎せられ、未だ時代物ほどには持囃されざりしにせよ、これが爲にうら若き男女の心中に趣くもの

世話物の性質

一時に多きを加へたりといふもの、ゲーテがヴェルテルをさへ思ひ起さしむ。近松が世話物の最初は元禄十三年に出でし長町女腹切にして、心中物の發端は同十六年の曾根崎心中なり、之より先き延寶六年、萬屋助六心中といふ淨瑠璃の都一中によりて語られしことあれど、何人の作なるか明かならず、これに次いで近松を以て心中物の先驅とすべし。さらば近松の世話淨瑠璃はその當面の事件に對して如何ほど忠實なりしかといふに、これまたさまでは實際に拘泥せざりしが多し、事件の大體の經緯は事實に従ふも、これを美化するは、一に渠が天才的手腕に俟つ。これ一には事件を寸分違はず寫せば、その關係者より苦情を持ち込まるゝ恐ありしにもよれど、抑又近松が世態人情に對する觀察の精到にして、到底一事件を直寫するのみにては、所期の深刻を得難く、これこれ大に之を想化して、古今獨歩の妙篇傑作は生まれたるなるべし。

近松と西鶴

近松が西鶴と其の趣く所を異にするは主として右の一點にあり、西鶴も社會の現象を活寫して餘す所なしと雖も、畢竟その描寫は有りのまゝに表面的にこれを寫すに過ぎざるに、近松は寧ろ時代と共に變化する皮相の描寫を排し

て、一意滲らざる人情の祕密を掴まんとす。故に西鶴が作には小説とはいへど、服飾食物などの記述極めて多くして、風俗史を讀むが如く、珍らしき語彙應接に暇なくして、時に余輩を苦しむるに至れど、近松が戯曲にはさるたぐひ多からず、所詮寫さんとする所は義理なり人情なり、然り、義理と人情との衝突、これぞ人間感情生活の波瀾の潜む所にして、これを廻つて佳人涙あり才子腸を斷つ、近松はこの大題材をしも捕へて、爬羅剔抉、庖丁解牛の妙手腕を揮ふ、その道德的觀念の如きも西鶴に比して著しく發達せるものあれど、しかも後の褊狭なる讀本作者の如く千篇一律的に善人榮えて惡人亡ぶものとはせず、飽くまで情理を盡くして、抗すべからざる運命の手に翻弄せらるゝ世上幾多の人の子の爲に同情の涙を灑ぎ、これと共に泣き、これと共に訴へて、その結末は多く心中の悲劇となる。唯時に平凡の極を結ぶものあり、また稀に因果應報の理を説明するに至るものさへなきにあらざると雖も、それらはたしかに例外といふべし。

近松の文章

西鶴はわが世の歡樂に沈溺して、放縱自ら恣にせるもの、その作品の内容は專

ら時勢粧を描かんとす、而してその文章はさすがに古文の影響も少からず、雖も語格句法に至りては全然獨自のものにして、古文を離れて別に自由奔放なる一體を創めたる所にその特色を有す。されど近松は然らず、渠は等しく社會を寫すといふも、その主眼とする所西鶴と異なり、即ち世の流行に伴うて消滅すべきが如き表面の現象には餘り意を留めず、ひたぶるに古今不易の人情を探らんとするにあれば、近松にありては今と共に更に溯りて古をも究めざるべからず。またその作者としての立脚地は、單に眼を以て讀まるゝ西鶴の如く全然自由なるを得ずして、舞臺に上ほせて語らざるべからずといふ條件あり、この條件は必然的にその詞藻を拘束し、おのづからまた渠をして古文學に近づかしめたり。近松の作品を見るに、その初期のもの如きは殊に著しく古文學の影響をうけ、甚しきに至りては謠曲と全く同一なる題目を選び、文章もまた謠曲のまゝを踏襲したるものさへ少しとなさず。されど此の如きは天才近松が何時までも甘んじ得べき境地にあらず、やがて古文學の制肘より脱却して、自らの解釋によつて事蹟を寫し、その文章もまた擬古の弊を去りて、卓然

歌舞妓

として一新境地を開拓し、一たび紙面に對すれば千萬言たちどころに湧くの概あり、しかも此に至りて古文學の素養は却つて渠を助けたること言ふを須ひず。もしそれ渠が簡潔なるべくして時に冗漫に陥り、眞面目なるべき所に却つて諧謔を弄したるが如きは、偶々千慮の一失にして、これをや弘法の筆の誤といふべく、いまだ千載不磨の文章を否定せんは當らざるべし。啓蒙時代に於て既に説きたるが如く、歌舞妓と淨瑠璃とは各、その發達の徑路を異にせり。而して歌舞妓には初より一人の名だたる作家も出でず、わが近松の如きも、一時はこの方面に筆を染めたれども、のちには専ら淨瑠璃の著作に従事するに至れり。蓋し歌舞妓にありては直接に觀客に接する役者そのものに無上の權力ありて、作者はその下風に立ち、自ら諸種の難題にも應ずるの覺悟なかるべからず、この屈辱は到底抱負あるものの屑しとせざる所なるべければ、遂に見るべきの作家をこゝに誘致すること能はざりしならん。かくていはゆる脚本には殆ど見るに足るの作なかりしが、それにも拘はらず元祿の歌舞妓はその伎藝において目覺しき發達を遂げたり。その役者の有名なるもの

平民と演劇

京には坂田藤十郎等あり、また江戸には市川團十郎初代、二代相續いで荒事の名人と稱せられ、中村七三郎は無類の和事師としてその名を馳す。今日の演劇は實にこの時に於て既に早く形成せられたるなり。

淨瑠璃にもせよ歌舞妓にもせよ、共に江戸時代に入りて著しく進歩し、遂に元祿に至りてかゝる美花を結ぶに至れるは、平民の發達に負ふところ多しといふべし。平安朝には枕草紙、源氏物語等の出づるありて、散文わけても小説は前後比儔なきまでに振ひたれども、演劇の方面には何等の發展をも見る能はず、これ他なし、劇の性質として演伎に對する長時間の練習と大仕掛なる舞臺上の設備とを必要とすれば、宮廷貴族の生活が如何に悠閑に、また財物如何に豊富なりとも、その限られたる少數者の社會に於て、よくこの大道具を整へ、また長き期間に亘りて同じ演伎を繰返さんこと思ひも寄らず、勢ひ華麗の面衣装と、或る種の樂器の外は餘り事々しき設備を要せざる奈良朝以來の雅樂を以て満足せざるを得ざりしなり。下つて室町時代に及びて、猿樂の興行せらるゝあり、こゝに劇の平民化的傾向を見得べくなりしが、その後戦亂打ちつゞきて

八文字屋本

これに親しみ得べきものは、何時も悠閑なる貴紳か、または干戈の暇に閑日月を樂まんとする中流以上の武士に止まれり。従つてその舞臺といふも名のみにて、興行の時日も一日二日に過ぎず、今日止めてまたいつ始むべしともあらざれば、その脚本は切れぐの對話よりも諷誦して記憶に便なるものならざるべからず、演伎もまた一を學びて容易に他に應用し得べき型本位のものたらざるを得ず。かくて劇とはいひながら、語るよりも謠ふことを主とする謠曲の詞句は成り、能も出で來にけり。しかるに江戸時代中期に入りて情勢一變、天下は平民の天下となり、歌舞妓もまたこの新しき機運に乗じて、急劇の發展を遂げたり。最早此に至りて曩日の簾張の小屋掛は見るべくもあらずして、櫓に定紋あげたるいはゆる定小屋は成りぬ、舞臺はひろく、道具は美に、衣裳は眼を奪うてきらびやかなり、題外も半月、一月、評判よきは百日も打ちつゞくるに、日毎に新顔の見物を絶たず、時人誇りていはく、新吉原と葺屋町とを知らずんば江戸の繁華を語るに足らずと。

小説界の趨勢を見るに、西鶴の後、これを學びて當時の社會を寫せる寫實的の

小説日を追うて盛行したりしも、その祖を凌駕するものなく、たゞ所謂八文字屋本なる一種の作物に異色あるを見るのみ。八文字屋本の名はこれを刊行せる八文字屋自笑の屋號に因むもの、而して自笑自らその作者顔したりしが實は然らず、作者は別にありて、就中江島屋其磧の名を擧ぐべし。この八文字屋本と稱する草紙は西鶴が好色本に倣ひて、男女の情事を主とし、殊に好んで狹斜の風俗を寫せるが、更にこれと類を同じうする氣質物カキモノといふ小話集もこれらの人の筆に成りたり。その寫すところ西鶴の如き表面の寫實に止まらず、やゝ近松の淨瑠璃に見るが如き要素を入れ、滑稽皮肉の中に一味の人情を寓す、その行文もまた保守的なる京都の地に生まれたる爲か、西鶴の如く自由ならずして幾分の古文臭味を帯びたり。さりながら八文字屋はもと劇評即ち役者評判記を發行して、その家名を擧げたるもの、爾來年々これを續刊して本業としたれば、その小説類も自ら歌舞妓の餘波を受くること多く、固よりまた近松によりて發展せる淨瑠璃の影響さへ甚しくして、殆ど清新と評すべきものなく、幾ばくもなくして社會より見棄てられたり。

淨瑠璃

小説に比するに淨瑠璃の發達は遙かに目覺しきものありき。竹本座創立後數年にして更に道頓堀に豊竹座出で來、紀海音を立作者として、竹本座に對抗を試み、南北競うてその勢を張らんし、これに伴うて作者も彼此多く輩出し、互に想を練り腕を磨けり。近松の歿後に於て最も噴々の名ありしを竹田出雲とす、その脚色の變化に富めるは近松に比して寧ろ優るところあり。されど近松ほどの學殖と文才とを提げてこの道に入れるものは近松以後また見るを得ず、何時しか合作など類に行はるゝに至り、全體の統一は擱きて部分々々の美に力をこめ、そこゝの山を看板として觀客の好奇心を唆らんごす。趣味低き觀客の觀賞眼はかくても胡麻かし得たれども、その實は一部の劇曲中にも各齣の優劣餘りに顯著にして、人物の性格も矛盾撞着を極め、また前後に全く關係なき人物事件を點出するなど、支離滅裂、所謂夢幻劇的の病弊また救ふべからざるもの多し。近松逝いて漸く四五十年、その間名ある作者も少からず、世は尙ほ淨瑠璃の世と見えたれども、一人の起ちてこの弊風を矯め、以て志を巢林子に踵がんとするもの無かりしは慨するに堪へたり。

義理と人情

纏つてこゝに少しく元祿文學の題目に就て考察せんか、中古以來、制慾克己の精神次第に國民の間に養はれ、女性を卑しむの風盛なるに従ひて、もはや戀愛は文學の上乗なる題目とはせられずなりぬ。江戸時代に入りて儒教の影響殊に著しきものあり、一切情緒の發動を抑制するの主義を取れば、男女相愛の情の如きは最も劣等なる閑葛藤として、罪惡視せられ、架空の説話としてもこれに耳を假す者なからんとす。何事ぞ、ひとりわが元祿時代は感情を重んじて、戀愛を謳歌するの風あり、元祿時代は此點に於て最も江戸時代らしからぬ江戸時代にして、言はゞ一步を平安朝に接するものと謂ふべし。平安朝と元祿時代とは實にわが國に於ける感情主義の二大時期なり、されど類似の中にも自らまた相違あり、これを文學に就て見るに、彼にありて人生に波瀾を起し、ものは常に感情と感情との衝突なれども、此にありてはすべて感情と義理との葛藤なり。これは未だ定まれる道德律の有るなく、ひたすら感情の中庸を標的として行動せる平安朝と、忠孝仁義の説やかましく、國民思想の根柢をこゝに築ける江戸時代との間に當然起るべき相違なるべし。

凡下なる平民の趣味

遊廓

余輩はこゝに元祿時代は感情偏重の時代なりといふ、されど誤解することを止めよ、そは主として一般町人間のことにして、書を読み徳操の何物たるを得たる中流以上の社會のことにはあらず、従つて戯曲小説の喜ばれたるも概ね前者の範圍を出でざりしは今更説くまでもなきことなり。事情此の如くなれば、戯曲小説に於て道德と呼び義理と唱ふるものは普通の場合極めて淺薄なるものにして、またその餘りに形式的なるに失笑を禁する能はず、殊に道德一轉して金銭すなはち義理の存する所たるに至りては、迂愚も甚しからずや。義理の爲ならで金銭の爲に死すとは、既に近松がその作中に喝破せる所、如何に理財の道と離れがたきが町人のくされ縁とはいへ、親の藥代拂はんが爲にその身を奴隸にし、主家の寶をとり戻すとしてその妻を賣るの類はまだしも、放蕩にその身を持ちくづして融通がつかずとして我どわが刃に伏し、遊女をうけ出すべき身の代金なしとして心中を急ぐも、屢見る例なり、自殺はまた實にかれらが壓迫苦痛を脱すべき唯一無二の手段にてありけるなり。

文學には戀愛を取扱へり、されど當時の倫理觀よりすれば戀愛は勿論排斥せ

られたり。女子はもとより、男子と雖も結婚問題はすべてこれが解決を父母に待つ例にして、自由戀愛は絶対に許されず、夫婦同棲の後もよし衷心に如何ほどの愛情を蓄ふとも、表面は儼として主従の如き關係あり。お夏の如き、おさんの如き、お七の如き女性、西鶴や近松の名筆に上りたればこそ、一部世間の同情をも贏ち得たれ、實際に於ては當時の社會はこれらの女性を淫奔破倫の標本とし、飽くまでその行爲を彈指するに憚らざりしなり。たゞ一別天地あり、このみはさしにも峻烈なる社會の制裁も及ぶなく、一切の窮屈なる道德を離れて、人々悠悠々自適し、はにかまず、氣どらず、どりつくりはす、天真の性情を暴露せる婦人も亦こゝに來りて始めて見るべし、これを當時の遊廓とす。蓋し元祿人士が遊廓に對する、その觀念に於て余輩明治の人と大にその趣を異にするものあり、當時の遊廓は實に幕府の消極政略の壓迫に堪へざる鬱氣の安全弁なり、こゝぞ人間が人間同志の境を撤し、あらゆる邊幅をかなぐりすて、平等に行動すべき交際場裡にして、固より全然金錢の關係より離るゝ能はず。雖も、いはゆる意氣を貴び、張を喜びて、男女共に感情を本位とせる特殊の道德に

この時代の概観

よりて相會す。かくて京の島原、大坂の新町、江戸の吉原は不夜城の觀を呈し、西鶴を初として作家のこれに向つて筆を着けざるなし。元祿文學より遊廓に關する記事を除かば、その精采の大半は失はれぬべし。

要するに元祿時代は江戸四期の中國民が最も積極的に活動せる時代にして、思想比較的自由、且つ最も創意に富めり。この特色は學問文藝の各方面に現はれて、漢學に於ては仁齋、徂徠の徒を出し、國學に於ては契沖、東麿の現はるゝあり、或は俳諧の芭蕉を呼び、或は戯曲小説の西鶴を起し、近松を作る、かれらの向ふところは各異にして一ならず。雖も、發する所はすなはち一個の源泉に外ならず、而して恰も故らに歩調を合せたるかの如くに、勇往邁進、以て中世以降の理想を古代に求むるものもあり、或はその趣味を現代に見出だすものあり、その色彩は言はゞ十人十趣、時に到底相調和し難きものさへなきにあらざりし。雖も、畢竟これ個人性の相違と經驗の不同より來れる結果にして、この紅紫參差として枝を交はせるところ、やがてまた元祿文學の異觀ともいふべし。

以上余輩は江戸文學最盛期の諸現象を敘述し了りぬ、一顧名残を惜みて、更に歩を轉すれば、さしにも自由を叫び個人を重んじたる風潮も煙火流星一時の夢、世は再び抑壓と没自我との波に漂はんとす、止んぬるかな。

第四章 文運東遷

八代將軍

八代將軍吉宗は家康の曾孫にして、折しも幕府の政治漸く衰へ、三代の功業日に落ちんとする時、紀伊より入りて將軍職を繼ぐ。すなはち大に紀綱を振肅し、武事を奨励すると共に、風俗の頹廢を矯正し、人材の登用はいふも更なり、刑律を明にし、貧窮を賑はす。加之外國科學の勝れたるを見て、これを範として天文窮理本草等の學に一大刷新を行ひ、最も意を殖産工業の發達に留めしかば、諸國の物産一時に起り、餘澤の引いて今日に及べるもの多し、宜なるかな吉宗の徳川氏中興の盟主といはるゝこと。

文藝の窘束

されど吉宗が一方において政治に熱心なると共に、一方において極力勤儉質

素を旨とする消極生活を鼓吹したる結果は、著しく國民の意氣を沮喪せしむるに至れり。既に一言せる如く消極主義は徳川幕府の根本政策にして、家康先づこの方針を樹て、より政治に與るものは、皆この遺範に倅るを得ず。吉宗いまはたこの方針を以て天下に臨めるものにして、その人物の大なりしだけ、それだけ四民の壓迫を受くることも甚しかりしや言ふを須ひず。一例を文學に因縁深き出版法に取らんか、抑出版に對する政府の干涉は、これも幕府創立以來のことにして、敢て吉宗の時に始まれるにあらず。既に元祿中にも風俗を亂し、虚説妖言を構ふる書冊の版行を禁じたることあり、それにも拘はらず、當時の放縱淫逸なる社會精神は益發達したるが爲に、その取締の強ちに咎めがたきを思はしめしが、享保に至りて幕府の制裁は俄然重きを加へたり、即ち從來行はれたる小説院本類はこの時更めてその版木の檢閲を受くべきこととなりたるのみならず、新たに上梓すべきものは、その種類の何たるを問はず、すべて著作者及び發行者の署名を要することに改められぬ。これは一面より見れば作家及び書肆をして自己の責任を自覺せしむる手段にして、今日より見れば

ば却つて賞讃すべき法度と稱するを得べしと雖も、一步進んで將軍家に就ては現在の直統はいふに及ばず、過去の家系または歴史に關する瑣末の記事すらも一切筆にすることを嚴禁せるが如きは、壓制もまた極まれるものと言はざるべからず。此の如き壓制は名は操觚者をして反省せしむるにありとはいへ、實はその口を箝してまでも一意徳川氏の安泰を計らんとせる猜手段にして、明かに學問の進歩をも無視せるものといふべし。

われらの所謂文運東遷の過渡期は前後五十年なり、その間上方文學は形勢日に盛まり、江戸文學は漸く好望ありと雖も、未だ大に見るべきもなし、一般の情勢は要するに不振なりといふを憚らず、然らばこの五十年間は文學史上全く特筆すべきものなきかといふに、必ずしも然らず、余輩を以て見るに少くとも二つの閉却すべからざる重要事項あり。何ぞや、(一)元祿の盛運に乗じて諸般の學藝勃興せるが中に、最も時に於て後れて出でたるものに、荷田東廬の提唱せる國學ありき、その特色に就ては既に前章に於て述べたればまた贅するの要なし、しかも今や賀茂真淵がその後繼者として出でて、その學派の基礎を堅う

この時代の
二大現象前後連鎖の
時代

すると共に、これを以て一世を風靡せし徑路を説かざるべからず、(二)元祿頃までは漢學は専ら修身齊家治國平天下の學問として行はれ、従つて實踐躬行の倫理學として考へ、若しくは高遠なる哲學の如く思惟したりしが、風潮一變、純文學の方面より解釋して専ら詩文として翫賞するもの多きに至れること是なり。國學と漢學との二大勢力が後のわが國文藝に及ぼせる影響は極めて大なるものあり、幕末以後に至りては漢學は一見洋學の爲にその地盤を覆されたる觀あれども、漢學も洋學も共に外國の學にして、國學と相並びて存し、かの維新前後に於る尊王攘夷思想といひ、また今日われらが國粹保存といふが如きも、畢竟これらに對する好惡賛否の聲に外ならざるは、何人も首肯せざる能はざる事實なるべし。

國學が眞淵によつて一層の發展を遂げたるは、前時代に於ける活潑なる國民精神が幕府の消極政策に遇うてもめげず、却つて之に刺衝せられて、こゝに一段の進化を示せるものにして、元祿文化の花はこの時代に至りてその實を結べるものといふべし。されどまた一方よりいへば、次の時代に於ける宣長、篤胤

等が目覺しき活動の先鋒となれるものは眞淵にして、かく考へ來れば勤王討幕の思想はすでに元祿に兆して、眞淵の時に萌えたりと謂ふべきなり。次に漢文學の流行もまた次期に至りて更に大に興るべき新文學の素地を作れるものにして、彼といひ此といひ前後の關係を味ひてその興は一層深きものあるを覺ゆ。しかも長所あるもの短所もまた伴ふ、國學はよく國民思想をして中世以降の束縛を脱して、上古簡樸の時代に復歸せんと希はしむるに至りたれど、その餘りにこれを憧憬せる結果として、古典に拘泥せる傾なきにあらず、漢文學もまた彼の簡潔の句法、雄大の格調を輸入せる等の功勞は否みがたけれど、その思想をも摸倣して及ばざらんことを恐れたるは、餘弊の甚しきものなり。以下余輩は更にこれらの消息を明かにすべきが、所詮獨立せる一時代としてこの時代は元祿時代の如き壯觀あることなく、文學者その人も他の時代に比して極めて寥々たる國學の眞淵といひ、俳諧の蕪村といふが如き人々のみは比類稀なる大家として尊敬するに吝かならず。

賀茂眞淵

縣居の翁賀茂眞淵の生地は何處ぞといふに、平安朝以後文學の中心たりし京

眞淵の學說

都にもあらず、新文學の勃興地たる江戸にもあらずして、その中間なる遠江なり。はじめ渡邊蒙闇につきて徂徠學を修めたるが、東廡の名を聞きて京に出てその門に投じ、専心攻學、終に國學の奥旨に達す。師の歿後一旦郷里に歸りしが、決然として以爲らく、今の時學を弘め名を傳へんこそせば、江戸に出づるに如くはなしとす。なほち東下して、帷を下して諸生に教授す。當時、江戸の地にも國學者少からざりしが、眞淵の唱ふる所最も新奇にして生氣あり、講筵常に學生を以て充滿せり。馬の嘶くにさへ驚く幕府の當事者のかくと聞きて、如何んぞ不問に附する理あらん、與力加藤枝直をして往いてその學問の正邪を判せしむ。枝直また一家の見識ありて、是非の鑑別は自ら明かなり、一たび眞淵の聲咳に接して推重措かず、師友を以てこれを待ち、且つ家を己の近隣に構へてこれを迎へ、またその子千蔭をして弟子の禮を取らしめしかば、眞淵の名いよく高く、ついで東廡の子在滿の推薦によりて田安宗武に仕へ、生涯江戸に寓して著述に講說に専らその道を傳ふるに盡瘁したり。

そも、眞淵が時勢に對して慷慨禁する能はざりし所以のものは、和歌が古

今集以來漸く消閑の具、戀愛の媒となり了せると、漢學が國民思想に浸潤して太古淳樸の風を失はしめたるにあり。眞淵は和歌の墮落と漢學の跋扈とは全然關係なきものにあらず、漢學傳播以來和歌は漸く剛健の氣を失うて女性的となりたりと推定し、従うて支那の學問に對して絶對的反抗の聲を擧げ、此の如きは天地自然の道にあらず、彼國の如き虚偽欺瞞に充てる國俗を矯めんが爲に設けたる人爲不自然の道のみ、これをしも思はずして直ちに取れてわが國に應用せんとするは、誤れるの甚しきものなり。漢學の染浸と共に人間の言動に對する無用の拘束出て來て、國民は天真を失ひ、神州の歴史は虚飾優柔の事蹟に滿つるに至れり、今より國家の前途を慮りて、社會人心の改善を圖るものは、須らく厭ふべき平安朝以來の漢學的文化和捨て、國民が性情のまにまに行動せる祖先の古に歸らざるべからずと絶叫す。蓋し眞淵の説は、やゝ大道廢れて仁義ありといふ老莊の説に似たり。さらば如何にしてわれらはよく漢學の影響なきわが國固有の國民生活を知るを得べきかといふに、眞淵答へて曰く、上古の生活を窺ふには、上古の和歌を究むるに如くはなし、和歌以外の

歌人として
の眞淵

典籍は皆からごゝろあるを免れず、和歌のみは國民性をありの儘に打ち出せり、その和歌も後世のものは與らず、萬葉の四千四百餘首、記紀の中なる二百餘首のみぞ人の國より傳はらで神代を受けし眞心の精髓とも稱すべきものにあはる、これを讀めば古意おのづから明かに、古意に則りて進まばやがて無爲の自然に復歸するを得んと、此に於てか自然の順序として眞淵は古言の研究に心を潜め、萬葉考、祝詞考、冠辭考などいへる書どもを著はせり。唯方便は動もすれば目的となる、眞淵が究極の目標は古道の復興にありたれど、何時しか古文學の研究に没頭し了せるの觀あり、これ恰も徂徠が復古説を唱へてしかも古文辭の研究に終れると同一轍にして、此に至りて眞淵がその初め修得せる漢學の影響は知らず識らず渠を毒せりといふべきか。

眞淵の萬葉集研究を以て契沖に比するに更に一步を進めたるものあるは勿論、國學を倡道して世道人心に益する所ありしは、徂徠の上に出づ。されど眞淵の功績は道學者たるよりも文學者たるにあり、固より眞淵はわが國の古道を闡明せんと力めたるものなれども、深く哲學的思索を廻らせるにあらず、また

わが國固有の道を復活せしめよといふも、これが宗教的宣傳を計畫せるにあらず、言はゞむしろ自己の好尚によりて無意識的に一種の文藝教を樹立せんとしたるものにして、その人詩人の天賦を有し、創作の才に至りても驚嘆すべきものなからず、斯くて萬葉の研究に従事せる渠は、何時しかその風調に感染して、種々作歌の上に應用するどころあり、また長歌の復興に志して、苦心製作、間々朗々誦するに堪へたるものあり、たゞその餘りに古語古調を弄したるが爲に、當時の讀者に耳遠き感ありしのみならず、更に進んで廢語を用ひ、また本來の意義をはき違へて笑ふべき誤謬に陥れる例さへ無きにあらねど、ごにもかくにも眞淵が虚飾を退けて古意を見んとし、萬葉の形式を借りて、或る程度までその理想を實現せるは、流石に一代の先覺者たるに耻ぢず。これより萬葉崇拜の風一時に盛にして、歌壇一新の觀あれど、しかも精神を汲み忘れて、徒らに外形を摸するもの多かりしは惜みても餘あり。なほ眞淵と時を同じうして和歌に志し、しかも眞淵と全く反對の方向に出でたるものに京の小澤蘆庵あり、その旨とする所は平易の雅言、率直なる感懐にして、また當代歌壇に重きを

漢學の變遷

なせりと雖も、その勢力は到底眞淵に及ぶべくもあらず。

江戸時代に傳はれる外國文化は和蘭及び支那のそれにして、共に長崎を経て國內に流布す。されど和蘭の影響は事々しく言ふに足らず、これに反して愈、その勢力ありしは支那の文化なり。實に支那は太古以來わが國民が學藝の先達として仰ぎたる國にして、時代の變遷に伴ひて、多少漢學に對する態度の消長はあれど、未だ之を廢したることなし。而して元祿の初期までは、嚴格なる哲學もしくは道德律として尊奉せられたりしに、その末期に至りて文學としての鑑賞は生まれ、徂徠の古文辭學の如きはこれに傾けるものにして、その門下の服南郭、順庵門下の祇南海の如き殊に然りとす。この二人はまた柳里恭と共に畫才ありて、始めて文人畫の風を輸入したるもの、文徵明、董其昌など明代文人の名これより漸くわが國に高し。而して詩文が既に儒學を離れて特立したる上は、これを専門の學として門戸を構ふるものもあるも、怪しむべきにあらず。支那小説の研究に従ふものも漸く多くなりて、その翻譯も現はれ、この流行は更にまた讀本の發生を促したり。もしそれ文人畫の勃興が天明調の俳諧に及

與謝蕪村

ぼせる影響に至りても、余輩これを否む能はず。天明俳壇の驍將を與謝蕪村とす。芭蕉歿後俳諧の風潮年を逐うて下り、群小作家おのゝ異を樹て、互に辯難攻撃すれども、その目的多くは糊口の道を得んとするにありて、月並の俗臭鼻を衝くもの比々然り。世人はやうやくその平凡に厭きて、天才者の出現を待つに至りたるが、天明の頃氣運正に熟して、無爲庵、樗良、雪中庵、蓼太、春秋庵、白雄、暮雨庵、曉臺、南無庵、閑更などの新人相接して出で、何れも一騎當千の士なり、中にも旗幟最も鮮明、斯道中興の祖と仰がれしものを蕪村とす。蕪村は攝津の人、江戸に出でて江戸座の俳諧を學び、のち西に歸りて京に住む。蕪村また天性畫技に長じ、池大雅と其名を等しうす。されど二者の畫はその趣に於て自ら相同じからず、暫く竹田の語を借りて評すれば、大雅は正にして謫ならず、蕪村は謫にして正ならず。蓋し余を以て見るに、彼は天上の神にして、此は地上の僊なり。蕪村嘗て謂へらく、吾に師なし、自然を以て師とす。最も意を筆墨の外に置けども、形態自ら備はる、他なし。寫生より入りて寫生を離れたればなり。されど畫人としての蕪村は多く語るの要なし、唯看

蕪村の俳風

過すべからざるは、この繪事と蕪村の俳句との關係にして、その俳に對する主張は必ずやまた畫に於けると相同じかりしなるべく、かくて畫の筆法は俳に入り、俳の趣味は畫を助け、兩々相俟ちてその才を發揮したり。芭蕉の俳諧は靜寂の趣を得るを以て旨とせしが、蕪村は進んで活動の態を捉へんとす。彼の消極的なるに反して、此は積極的といふべし。自然の景物を寫すこと多きは、彼此伯仲の間にありしが、これに主觀の語を交ふること多きは芭蕉にして、飽くまで客觀的態度を以て貫かんとするは蕪村なり。芭蕉を古今集に比すれば、蕪村は新古今集の如きか、その

牡丹散りてうち重りぬ、二三片。

柳散、清水澗、石處々。

の如きは、最もよくこの風尚を現はせるもの。また芭蕉は専ら自然の懷に投じて、人事はこれを忘れんとする傾向ありしに、蕪村は好んでこれを詠す。

御手打の夫婦なりしを、衣更。

鯨賣、市に刀を鼓しけり。

従うてその思想は芭蕉に比してやゝ複雑を加へたりといふを得べく、殊に従来の俳句が繪畫と等しく刹那的靜止的現象を寫すを以て普通とせしに、更に進んで音樂的に時間的經過をも寫さんとしたるは注意すべし。而してこの小詩形中にしも多量の意味を含蓄せしめんが爲に、簡潔なる漢語を借り來り、もしくは歴史的事實に助力を仰げるは、渠が屢用ひたる快手段なり。

霜百里、舟中にわれ月を領す。

春雨や、綱が袂に小提燈。

見よ、此の如くにして蕪村の句の如何に活躍し、また如何に複雑なるを得たりしかを、また見よ、此の如くにして如何にその調の緊縮し、如何にその響の勇健なるを得たりしかを、蕪村は此の如くにして先哲が未だ成し得ざりし所を成し得たり。この時に當りて、別に江戸より京に出でて名をなし、もの炭太祇あり、これもまた複雑の人事美を詠するに巧にして、この點のみにかけては敢て他人の企及を許さざりき。

俳句の性質

元來俳句はその文字僅かに十七短詩中の短詩なれば、その對象は能くその急

所を捕へ、且つこれを現はすべき字句は酥の如く刃の如く熟烹し鍛鍊せるものなるを要す、もしこれを忘れて漫然としてつぶやき出づるに於ては印象忽ち稀薄となりて、到底所期の思想感情を傳ふること能はざるべし。讀者の側よりいふも十七字中に要約して突如として投げ出されたる事物に對して嘗て經驗なくば、たその趣味をも感じ得ざらんか、一句の意味は頑乎として通するに由なかるべし。されば俳句や、一見よみ易く味ひ易きが如くにして、實はよみ難く味ひ難きこと、これより甚しきはなし。貞徳以來俳諧の流行天下に普く、芭蕉以後は吳服屋の手代、髮結床の下剃までが、やかなの運用にしたり顔する世となりたれど、弊害百出、半ばは博奕の如きものとなり果てたるも、畢竟その眞意の得がたきが爲なるなからんや、芭蕉だに複雑の思想はこれを難しとして、人事時間の描寫はこれを避け、活動的現象も亦その能くする所にあらざりき、皆これこの詩形の不便の超越しがたきものあるが爲なるべし。然れども俳諧には或る程度までこの不便をすくふべき種々の特殊の法則あり、例へば季を定めたるが如き是にして、藤は春、牡丹は夏、鯉、奈良漬の類さへ、二月、六月のもの

と定めて動かさず、門外者より見ればその窮屈なる一見堪へ難き感あるも、この約束なくしては、片言隻句の中の確なる時處の心持は現はしがたきなり。その他切字などいふ雑多の法則もみな小詩形に免るべからざるものとして、おほかたは必然的に出來たるものなるを發見すべし。かゝる窮屈なる詩形をしも操縦して、許多の困難を排しつゝ、斯道の上に一新生面を拓ける蕪村が功は偉なるかな。しかも蕪村の俳句の芭蕉に比して時に浮華誇大の弊に陥るものなきにあらざるは、取材の相違に基くといはんよりも、寧ろ人格の問題として見るべきものなるべし。遮莫蕪村歿して芭蕉以後の暗黒時代は再び來りぬ、これを照らすは明治の子規を待たざるべからず。

詩文の隆盛

小説は八文字屋本依然として情勢を持続すれども、毫も活氣なし、而して別に教訓の意を寓したるもの乃至怪談、奇聞、實録類も多く出でたれども、一として見るに足るものなし。唯この間に在りて著しく特色を有し、後の讀本の魁となるものを英草紙とす。されど英草紙を説かんとせば、まづ當時における漢文學流行の情勢を説かざるべからず。見よ、今や詩文は各地に盛行し、詩社を設け

て騷客を集むるもの頗る多し。京には龍草廬の幽蘭社、江村北海の賜杖堂、服蘇門の長嘯社あり、江戸には服南郭が芙蓉社、安清河が市隱社ありて遙にこれと相對峙し、片山北海は混沌社を大坂に開き、高陽谷は瓊浦芙蓉詩社を結びて、長崎京の間を來往す、その他曰く何曰く何かくては支那稗史小説の類も何時まで疎外せられて止むべきにあらず、長崎の譯官たりし岡島冠山は東都に住しまた京攝に遊びて、通俗水滸傳、小説讀法等の著を出し、岡白駒もまた彼國の小説俗語に通じて、これに關する著述多し。支那の戯曲小説は從來もこれを繙くもの固より無きにはあらざりしが、これら通俗的譯書の出づるありて、一般世人の注意は俄然としてこれに向へり。

英草紙

英草紙は斯かる時代に生れたり、その著者を都賀庭鐘といふ、庭鐘は大坂の儒醫にして、博物骨董に精しき葦葭堂と友とし善く、舶載の小説類その一讀を経ざるは稀なりといふ。英草紙の述作ありしは寛延二年にして、續篇には繁野話、莠句冊あり。その内容は何れも怪異荒誕の短篇小説を輯めたるものにして、漢文脈を傳へたる遒勁の措辭はその内容と相俟ちて特に讀者を喜ばしめたり。

唯その文餘りに漢臭を帯び、わが國の風俗を寫すにさへ、或は「手を舉げて會釋す」といひ、或は人を饜應するに「粥を煮せしめ」などいへる無意義の踏襲隨處に散見するは、時人には珍らしと喜ばれたらんも、今は笑ふべし。蓋し英草紙は剪燈新話、聊齋志異等の筆法を轉じてわが國の史實に應用せるものにして、八文字屋本の漸く衰へたる當時の小説界によく清新の氣を注入し、その事業をついで上田秋成の雨月物語も出でたり。

上田秋成

上田秋成もまた大坂の人、後年京に寓して、その地に終れり。三十五歳の時始めて八文字屋本風の小説に筆を染め、天成の才筆早く見るべきものありしに、自らこれに慊焉らず、更に方面を轉じて雨月物語を作れり。雨月物語は短篇數種を集めたるものにして、各篇何れも奇聞怪談ならぬはなく、内容形式共にこれを英草紙に比較して明かに彼にヒントを得たるを知るべし。されど英草紙は史實を小説的に結構して作者一流の道義觀を披瀝せるものと見るべく、その道義的批判は世間普通の道德論者が云爲する所に比して著しく寛大にして當然惡人とせらるべき歴史的人物の上にも溫き同情を注ぐを惜まず、その人

生觀の如きも極めて樂觀的なるを見るべし。然るに秋成はこれと全く相反す。秋成生れて狷介剛愎世に容れられざるよりも、おのれまづ世を容れず、この性情は、勢ひ作物の上に現はれて、到るところ熱嘲痛罵骨を刺すものあり。また江戸時代の小説は英草紙をはじめとして怪を語るといふも、何れも現世的寫實的色彩を帯びたるがその通有の性質なるに、秋成がこの作のみは甚だ深秘的にして、言はゞ神韻縹渺、遙かにわが世を隔てたる感あり、行文また縦横無碍、意の趣く所筆從はずといふことなく、その風體の絢爛にして華麗なる、古今よくこれと匹を争ふに足るもの少し。秋成中頃より醫を專業として、一たび小説の述作に念を斷ちしが、晩年に及びて更にまた癩癩談、春雨物語等の著あり、唯こたびは脂粉の香や、失せて蒼枯の色これに代り、故らに想を練り、思を凝らすことをなさず、一氣呵成筆を下すといへども、その辛辣なる諷刺いよ／＼出ていよ／＼度を加へ、秋成の面目躍如として見るべし。思ふに世はみな濁れりわれひとり清むとし、またみづから高く標置して、怒號これ快しとせるは、畢竟秋成が存在の生命なりしなり。

建部綾足

秋成と同時に江戸にありてまた讀本の發生に與りて力ありしを建部綾足とす。綾足は南部の人、亡命して洛東東福寺の僧となりしが、のち蓄髮して東都に住む。長崎の熊斐に學びて畫名あり、俳諧をも善くし、また片歌カクワカの一派を立てんとせしが、廣く行はるゝに至らざりき。綾足、明和五年、秋成が雨月物語を出すと殆ど同時に西山物語ニシヤノモノガタリを作れり、その文辭つとめて古雅を欲し、一篇の材料は京都滞在中の見聞にかゝると稱せらる。次いで有名なる本朝水滸傳成れり、この書は惠美押勝を宋江に、道鏡を高俣に、琵琶湖畔の伊吹山を梁山泊の水寨に擬したるものにして、その文章むしろ平凡、結構また強ひて奇を弄すれども、深く人の感興を動かすに足るものなし。唯その世人の注意を引くことしかく大なりしは、一にこの書が水滸傳翻案の先鞭を着けたるが爲にして、かくて綾足もまた秋成と共に讀本の魁をなすとはいふものの、二者の功績に若干の逕庭あるは言ふに及ばざるべし。さらば鬼才秋成に匹敵して相下らず、江戸の讀本興隆にも多大の關係を有するものは誰か、平賀鳩溪その人なり。

平賀鳩溪

平賀鳩溪はまた源内の名を以て知らる、讃岐の人、のち出でて江戸に寓す。天賦

の才能極めて多方面にして、戯曲小説より油畫に至るまで苟くも手を着くればすなはち達す。その専門とするところは本草、窮理の學にありて、これに關する發明創作少からざるが、一生轆轤不遇にして世に用ひられず、滿々たる不平絶ゆる時なくして、偶、淨瑠璃小説の戯作に耽つて僅かに鬱悶を遣りしもの如し。その小説は、根無草の如き、風流志道軒傳の如き、何れも當時市井觸目の俗事を題材とし、これを著しく滑稽化したるものなるが、その滑稽の尋常一様の滑稽に終らず、動もすれば憤懣鬱勃の情虚隙を衝いて火の如く揚る所、やがて鳩溪の鳩溪たる所以にして、この點もまた正に關西の秋成と好一對と謂ふべし。蓋し鳩溪の如きは、徳川氏の消極政策乃至階級制度が餘りにその度を越えたるが爲に、可惜有爲の士をして花咲くこともなく朽ちしめし、好個の實例にして、渠の如き抱負遠大、精悍無比の資を以てして、僅かに開帳のにぎはひ、見世物のをかしさ、さては女大力の様子などを寫して止まざるを得ざりし衷情、洵に一掬の涙なきを得ざるなり。

小説と古典の學

以上四人を直接間接に文化、文政の讀本の爲に地盤を作れる人々とす、中に就

きて鳩溪はやゝ選を異にし、寧ろ青本、洒落本の發生に影響すること大なりといへども、等しく讀本の先驅として擧ぐるも、また強ち不當の見解にはあらざるべし。兎に角に支那小説の感化に基きて、此の如きの作者が續々として輩出し、以て新文學の發生を誘致したりしは、前來述べたるどころによりてほゞ明かなるべきが、これと同時に忘るべからざるは、わが國學もまた渠等を助けたることなり。然り、外國文學の影響如何に大なりしにもせよ、國文の素養なかりせば、その作物は如何に貧弱なりしならん。幸にして渠等はまた古典の學にも通曉したり。これと相表裏して、荷田在滿、賀茂真淵の國學者等が特に擬古文を以て短篇小説を試み、以て自ら娛樂とするの傍、國文の語法語格を普及せしめんとせる如きも注目すべし。見よ、上田秋成は加藤宇萬伎の門人にして、その晩年に至りては主として古典の研究に心を潜め、殊に宇萬伎の師たる真淵に私淑して、その著書の出版に關しては大に功あり。小説の如きはむしろ秋成にありては消閑の副事業に過ぎざりしといふも過言にあらず。また縣門の名簿を繙かば、宣長が入門を記したる寶曆十四年の前年の條には、建部綾足、平賀源内

の署名をも併せて發見せん、而して綾足の繙案せる水滸傳が純粹なる雅文に成り、更にまた西山物語が文中の古語にわざ／＼註釋を施して古文の習得に資せんとしたるが如き、彼此勘合して時潮の趣く所を察すべし。余が漢文學と相俟ちて、古文學の小説に及ぼせる影響甚だ少からずといへるは、言ふまでもなくこれらのことを指せるなり。

文學の東遷

翻つて思ふに、文學の中心はこの頃やう／＼動き初め、諸般の文化と共に、擧つて京坂を去つて東の江戸に遷らんとす。京に學べる真淵が江戸に下りて帷を垂れしが如きは、その最も著しき例にして、俳諧に蕪村はあり、小説に秋成はあれど、大勢はすでに定まれり。淨瑠璃とてもこれに同じく、享保に門左、歿し、寶曆に出雲遊いてより、近松半二が雙肩俄に重く、一時好評をも博したれど、大夏の倒れんとするを、一木の何時までか支へ得べき、劫風一陣、さしもに盛なりし大坂淨瑠璃もこゝに崩れ落ちて、江戸は却つて凱歌を奏しぬ。江戸淨瑠璃のはじめは福内鬼外が神靈矢口渡なり、鬼外は例の平賀鳩溪の別號にして、この外なほ數篇の作あり、而して鬼外につぐべき作家も一二にして足らざりしが、しか

も淨瑠璃の運命は京坂より江戸に遷りても、終にまた振はず、以て今日に至れり。然るに江戸の小説に至りては、これと趣を異にして、着々として新しき發展を遂げ、元祿前後における上方の盛況をも凌がんとす。殊にこのごろ印刷術の進歩著しきものありて、錦繪の精巧眼を奪ふばかりなり。この印刷術の進歩がまた小説の發展に直接間接の便宜を與へたるは勿論のことなり。

さらば江戸に行はれ來りし小説の種類は如何なるものなりしぞ。余輩はこれを草雙紙の名に一括すべし。草雙紙の起源は元祿以前にあり、その初は丹色の表紙を用ひたれば赤本といひ、五枚を綴りて一冊とし、一枚毎に繪を挿めり、その題目は鉢かづき、文正、桃太郎、花咲爺、かち／＼、山猿蟹合戦、鼠の嫁入など、御伽草子より脱化せるものか、または金平淨瑠璃に取れる金平が恠勇譚、さらすば辨慶、朝比奈、四天王、新田、楠が武功物語などにして、やゝ移りて色道の勝負、敵討の成敗を書けるもあり。しかるに安永四年、戀川春町が金々先生榮華夢を出だせるより風體一變、専ら世態人情を描くこととなり、従つて童幼よりも大人の見るものとなりぬ。斯くして曩の赤本、黒本は青本、黄表紙とうつりゆく中に寫

草雙紙

洒落本

すどころも遊廓の事情、または開帳、見世物など流行に關するもの多きを加へ、滑稽洒落を旨として、ひたすらおのれの通と才とを衒はんことす。すなはち何等諷刺教訓などの目的あるにあらず、極めて淺薄なる觀念より筆を執れるものにして、讀者の一笑を買はざ、かれらの望は満たされたるなり。

青本と併びて、別に洒落本と呼ぶ一種の小説あり、これも露骨に吉原、深川あたりの遊里の様を寫したるものにて、猥雑厭ふべく、到底これを以て堂々たる文學中に伍せしむるを耻づるものなるが、しかも洒落本の功績として言はざるを得ざるは、その極端なる寫實的描寫にあり。元祿の西鶴が作も寫實はすなはち寫實なりげに西鶴はその以前の小説家が爲せる如く全く自己の耳目にも觸れぬ架空の事柄を描かんとはせず、まのあたり目に見、耳に聞く社會の出來事を寫したり。されど今にして思へば西鶴の寫實は比較的印象の著しき部分のみを抜き出づるまでにて、事巨細となく有るが儘に寫すにあらず、對話の如きも固より一種の文章體にして、當時の口語をその儘に筆記にしたるものにはあらず。洒落本の寫實は然らず、例へば遊里を描くに、遊女嫖客の容姿衣

裳乃至動作はいふも更なり、或は客の種類により、或は見世々々の格式によりて異なる言葉のつかひざままでも、細かに書き分けて誤らざらんとする風あり。斯かる寫生的の描寫は洒落本の出づるまで曾て無き所にして、眞に寫實らしき寫實は、洒落本を以て始まるといはざるべからず、明治に於ける寫實派の筆もまた或はこの邊に學び得たるならんか。

さて吉宗が政治に勵精せる結果は、その死後に至りて益、現はれ、幕府の基礎愈々固きを加ふると共に、江戸の繁華は目ざましきものありき。九代及び十代の將軍の時代は太平その極に達し、吉原、深川の賑ひ前代未聞の觀を呈し、いはゆる十八大通の中には、千蔭、春海の名さへ見ゆる時なれば、一般の文藝が和樂遊蕩の氣に滿ち、動もすれば嚴肅を缺くの嫌ありしも當然のことといふべし。思ふに當時の市民は鼓腹擊壤、胸中一片の不平あるなく、自ら花の大江戸に生れ合せたる仕合を喜び、朝な夕なに眺むるは前と後ろの富士筑波、水道の水をかせる錢湯に鼻唄うたうて、うか／＼とのみ暮らし、なり。この歡樂場裡の消息をさながらに反映せるものは青本及び洒落本にして、外にまた適切にこれ

狂歌と川柳

を示すものは、天明調と呼ばるゝ狂歌なり。狂歌には此より先き享保の頃大坂に油煙齋貞柳ありて、名聲甚だ高かりしが、その作多くは平凡の評を免れず、しかも理窟に陥るの弊ありしが、今や江戸に四方赤良(太田蜀山)等の出づるありて、洒落と穿ちとを主としてこれを詠み、高尚なる滑稽に至りてはなほ求め難かりしも、口を衝いて出づる諧謔は兎も角も人をして頤を解かしめずんば止まず。柄井川柳また同じ時に出でて、巧に人間の弱點を押へ、これを露骨卑近の警句に仕立て、皮肉なる諷刺を試みたり。

第五章 江戸の盛運

この時代の
大勢

十一代將軍家齊の時代に至りて幕府の政治は頗る振へり、當時の老中は有名なる越中守松平定信にして、その施政の方針は依然として消極的なりけれど、在職六年の間に、紀綱を張り、經濟を整へ、武事を勵まし、奢侈を戒め、風俗を匡して實績を擧げたること前後三百年を通じて多くその比を見ず、かくて家齊將